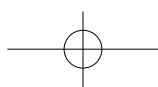
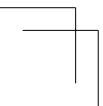
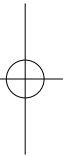
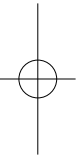
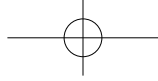
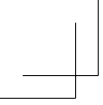


前谷遺跡 X

埋蔵文化財発掘調査報告書

2021

埼玉県戸田市教育委員会

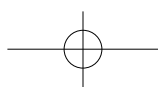
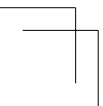
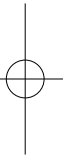
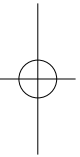
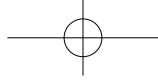
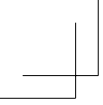


前谷遺跡 X

埋蔵文化財発掘調査報告書

2021

埼玉県戸田市教育委員会



はじめに

埼玉県南東部に位置する戸田市は、荒川の自然に恵まれ、古くから交通の要衝として発展してきました。現在は交通の利便性から都心部のベッドタウンとして市街地化が進み、人口13万人を超える都市に成長しています。

近年、まちの景観の急激な変化とともに社会的、文化的な環境も急速に変わってきておりますが、古来より受け継がれてきた伝統や文化を守り、人々の絆を一層強いものとするために、文化財の保護及び活用が求められています。

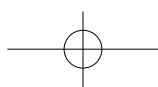
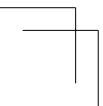
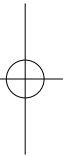
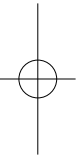
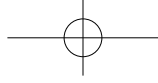
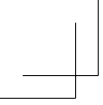
今回報告いたします前谷遺跡第10次発掘調査は、店舗・共同住宅建設に伴い、令和3年に緊急発掘調査が行われたものです。

この発掘調査により、弥生時代から近世にかけての生活の痕跡を多数検出し、戸田市内の人々の生活や土地利用のあり方などを知る良好な資料を得ることができ、地域の遺跡の性格の一端を明らかにすることができました。本書が、戸田をより深く学習するための一助となることができたら幸甚に存じます。

最後になりましたが、本事業の遂行にあたり、御尽力、御協力を賜りました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

令和3年8月

戸田市教育委員会
教育長 戸ヶ崎 勤



例 言

1. 本書は、埼玉県戸田市上戸田二丁目25番3、6の一部に所在する前谷遺跡第10次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、事業者の小山一夫氏によるYFKビルⅡ新築に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会（担当：今井源吾）が大成エンジニアリング株式会社の支援を受けて実施した。また、整理作業及び報告書作成は、戸田市教育委員会が大成エンジニアリング株式会社から支援を受けて実施した。
3. 発掘調査は令和3年1月12日から同年2月12日まで行い、整理作業・報告書作成は令和3年8月31日まで大成エンジニアリング株式会社府中事務所で実施した。
4. 発掘調査から報告書作成までの調査事業費は事業者の全額負担による。
5. 本書は、埼玉県戸田市教育委員会が刊行し、今井が監修した。編集は黒済和彦指導の下、林ひかるが行った。執筆は、第1章第1節、第2章第1～3節、第5章第2節を今井、第1章第2節、第2章第4節、第3章、第5章第1節を林、第4章をパリノ・サーヴェイ株式会社がそれぞれ担当した。
6. S D O 1出土の石帯（丸軀）はパリノ・サーヴェイ株式会社が分析をし、第4章にその成果を掲載した。
7. 発掘現場での記録写真は黒済、林が行い、出土遺物は太田淳子が撮影した。
8. 本書の著作権は、戸田市教育委員会が保有する。発掘調査成果の周知、活用、学術研究、教育等を目的とする場合は、本書の一部を無償で複製し、利用できるものとする。
9. 本遺跡の出土遺物及び発掘調査の各種データ等は、全て戸田市教育委員会が保管し、活用を図るものとする。
10. 本事業は以下の組織により実施した。

【埼玉県戸田市教育委員会】

教 育 長 戸ヶ崎 勤
教 育 部 長 山上 睦只
次 長 星野 正義
生涯学習課長 福田 忠史（令和3年1月17日まで）
関根 晃（令和3年3月31日まで）
鎌田 陽子（令和3年4月1日から）
高屋 勝利（令和3年4月1日から）
生涯学習課主幹 細井 薫子（令和3年3月31日まで）
本橋 洋（令和3年4月1日から）
生涯学習課主任 吉田 幸一（令和3年3月31日まで）
生涯学習課主事 金子 遥奈（令和3年4月1日から）
今井 源吾（出土品整理・報告書作成担当）

【大成エンジニアリング株式会社 文化財事業部】

調 査 員 黒済和彦 林ひかる 佐藤和男

発掘・整理作業参加者

田原 浩 鈴木勝広 瀬戸宏征 上杉鈴美 戸部英二 伊藤 峻 朝廣俊介
太田淳子 金丸隆子 小野寺優斗 本美里紗子 菅原孝志（順不同）



11. 調査及び本書を作成するにあたり、次の方々・機関にご指導、ご協力を賜った。
市川康弘 岩井浩人 岩崎岳彦 久世深雪 惟村忠志 宅間清公（敬称略、五十音順）

凡 例

1. 本書の国家座標、緯度、経度は世界測地系に即しており、平面図の方位は真北を示す。
2. 挿図の縮尺は各挿図に示した。
3. 本調査では世界測地系に準拠した経緯上に、 $X = -20730.000$ 、 $Y = -13838.000$ の国家座標を基点にして4 m四方のグリッドを設定した。グリッドの呼称については北西隅を基点に、東西方向に大文字アルファベット、南北方向にアラビア数字を振り「A-1」のように表記する。
4. 標高は、T. P.（東京湾中等潮位）を基準とした。
5. 遺構実測図の水系レベルは全て標高 3.00 mに統一した。
6. 遺構の略記号は以下のとおりである。

SD：溝状遺構 SK：土坑 P：ピット

7. 遺構平面図と遺物実測図中のトーン及び記号は以下のとおりである。

地山  赤彩範囲  須恵器（断面） 

8. 遺物の種別のうち、弥生時代後期から古墳時代前期初頭の土器は全て「弥生土器」、古墳時代前期初頭より後から平安時代に属する土器は全て「土師器」と表記した。また、中世の陶器は全て「中世陶器」と表記し、そのうち片口の痕跡が確認できない鉢は全て「鉢」とした。
9. 遺物実測図のうち、整形や器面の摩耗により調整痕が不明瞭なものについては破線で示した。
10. 遺物観察表中の胎土及び焼成の項表記は緻密>密、良好>良である。
11. 遺物拓影図は、向かって左に内面を、右に外面を示した。ただし、外面のみの場合には、向かって左に外面を示した。底面は下に示した。
12. 遺構覆土・土器などの遺物の色調は『新版標準土色帖』2008年度版（小山正忠・竹原秀雄編・著者、農林水産省農林水産技術会議事務所監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、日本色研事業株式会社発行）を参考にした。
13. 写真図版の縮尺は、遺構は不同、遺物は実測図に準拠した。また、写真図版のみ掲載している遺物の縮尺は1/3である。
14. 出土遺物の註記は、下記の原則に基づき行った。

例：MY. 10. SD 01 - 1
遺跡略号 調査次 遺構種別 遺構番号 遺物番号

表面採取遺物や攪乱層出土遺物については、遺跡略号及び調査次のみを記載した。

目次

はじめに

例言／凡例

目次／挿図目次／挿表目次／写真目次／図版目次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯 1

第2節 発掘調査と整理作業の経過 2

1 発掘調査

2 整理作業

第2章 周辺環境と遺跡・調査の概要

第1節 地理的環境 3

第2節 歴史的環境 4

第3節 遺跡・調査の概要 6

第4節 基本土層 11

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 弥生時代後期後半から古墳時代前期 12

1 溝状遺構

2 土坑

第2節 平安時代から中世 24

1 溝状遺構

2 井戸跡

3 土坑

第3節 近世 34

1 井戸跡

2 土坑

第4節 非掲載遺構出土遺物 39

第4章 自然科学分析

出土石帯（丸鞆）の石質について 42

第5章 まとめ

第1節 第10次発掘調査の成果 45

1 弥生時代後期後半から古墳時代前期

2 平安時代から中世

3 成果と課題

第2節 総括 51

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図	遺構確認調査トレンチ図	1	第22図	第1号溝状遺構出土遺物実測図 (SD01)	27
第2図	調査区図	2	第23図	第9・13号溝状遺構出土遺物実測図 (SD09・13)	28
第3図	埼玉県の地形	3	第24図	第15号土坑実測図 (SK15)	29
第4図	戸田市域の地形	4	第25図	第15号土坑出土遺物実測図 (SK15)	29
第5図	前谷遺跡及び周辺の遺跡位置図	5	第26図	第3・5・6号土坑実測図 (SK03・05・ 06)	32
第6図	前谷遺跡調査区位置図	9	第27図	第9・18・19・24・25・26・28・30号 土坑実測図 (SK09・18・19・24・25・ 26・28・30)	33
第7図	調査区全体図	10	第28図	第6号土坑出土遺物実測図 (SK06)	34
第8図	基本土層図	11	第29図	第2号土坑実測図 (SK02)	35
第9図	等高線図及び基本土層確認位置、 グリッド配置図	11	第30図	第2号土坑出土遺物実測図 (SK02)	35
第10図	第3・4・5・6号溝状遺構実測図 (SD03・04・05・06)	15	第31図	第1・7・10・14・16・17・20・21・22号 土坑実測図 (SK01・07・10・14・16・ 17・20・21・22)	38
第11図	第7・8・10号溝状遺構実測図 (SD07・ 08・10)	16	第32図	第1・17号土坑出土遺物実測図 (SK01・17)	39
第12図	第14号溝状遺構実測図 (SD14)	17	第33図	第33号ピット出土遺物実測図 (P33)	39
第13図	第3号溝状遺構出土遺物実測図 (SD03)	17	第34図	蛍光X線スペクトル	43
第14図	第4号溝状遺構出土遺物実測図 (SD04)	18	第35図	第1次調査の第1号方形周溝墓	46
第15図	第5号溝状遺構出土遺物実測図 (SD05)	18	第36図	SD04を主体とする周溝状遺構	46
第16図	第7号溝状遺構出土遺物実測図 (SD07)	18	第37図	戸田市域における周溝状遺構類型	47
第17図	第4・8・11号土坑実測図 (SK04・ 08・11)	22	第38図	本調査地点の周辺の調査成果	49
第18図	第12・13・23・27号土坑実測図 (SK12・13・23・27)	23			
第19図	第4号土坑出土遺物実測図 (SK04)	23			
第20図	第1号溝状遺構実測図 (SD01)	26			
第21図	第2・9・11・12・13号溝状遺構実測 図 (SD02・09・11・12・13)	27			

挿表目次

第1表	前谷遺跡周辺遺跡の概要	5	第5表	第4号土坑出土遺物観察表 (SK04)(2)	24
第2表	第3・4号溝状遺構出土遺物観察表 (SD03・04)	19	第6表	第1・9・13号溝状遺構出土遺物観察 表 (SD01・09・13)	28
第3表	第4・5・7号溝状遺構出土遺物観察表 (SD04・05・07)	20	第7表	第15号土坑出土遺物観察表 (SK15)	29
第4表	第4号土坑出土遺物観察表 (SK04)(1)	23			

第 8 表	第 6 号土坑出土遺物観察表 (SK06)	第 11 表	第 33 号ピット出土遺物観察表(P33)
 34	 39
第 9 表	第 2 号土坑出土遺物観察表 (SK02)	第 12 表	ピット計測表
 35	第 13 表	遺物出土点数・重量一覧表
第 10 表	第 1・17 号土坑出土遺物観察表	第 14 表	F P 定量結果
	(SK01・17)		43
	39		

写真目次

写真 1	試料及び実体顕微鏡写真.....	44
------	------------------	----

図版目次

図版 1	1 調査区全景 (合成、東から)	図版 5	1 SD14 完掘 (東から)
図版 2	1 SD01・04・05・14, SK04 完掘 (北西から)		2 SD14 土層断面 (南西から)
	2 SD01 完掘 (東から)		3 SK01 完掘 (北から)
	3 SD01 土層断面 A (西から)		4 SK01 土層断面 (北から)
	4 SD01 土層断面 B (西から)		5 SK02 完掘 (西から)
	5 SD04 完掘 (南から)		6 SK02 土層断面 (東から)
図版 3	1 SD04 土層断面・遺物出土状況 (北から)		7 SK03 完掘 (南から)
	2 SD04 遺物出土状況 (東から)		8 SK03 土層断面 (北から)
	3 SD03・04・05・06 完掘 (南東から)	図版 6	1 SK04 完掘 (北から)
	4 SD06 土層断面 (北から)		2 SK04 土層断面 (南から)
	5 SD07 完掘 (南東から)		3 SK04 遺物出土状況 (南から)
	6 SD07 土層断面 (南東から)		4 SK05 完掘 (北から)
	7 SD07 遺物出土状況 (西から)		5 SK05 土層断面 (西から)
図版 4	1 SD08 土層断面 (南西から)		6 SK06 土層断面 (南から)
	2 SD09 土層断面 (南から)		7 SK06 遺物出土状況 (南東から)
	3 SD10 土層断面 (北西から)		8 SK07 完掘 (東から)
	4 SD10 完掘 (2 区調査時、南から)	図版 7	1 SK07 土層断面 (南から)
	5 SD08・SD11 完掘 (東から)		2 SK09 完掘 (北から)
	6 SD11 土層断面 (南西から)		3 SK09 土層断面 (北から)
	7 SD12・13 完掘 (西から)		4 SK10 土層断面 (南から)
	8 SD14 土層断面 (南から)		5 SK11 土層断面 (南から)
			6 SK12 土層断面 (南から)
			7 SK13 完掘 (西から)
			8 SK13 土層断面 (西から)

図版 8

- 1 SK14 完掘 (西から)
- 2 SK15 土層断面 (北から)
- 3 SK16 土層断面 (西から)
- 4 SK17 完掘 (南から)
- 5 SK17 土層断面 (南から)
- 6 SK18 完掘 (南から)
- 7 SK18 土層断面 (南から)
- 8 SK19 土層断面 (北から)

図版 9

- 1 SK20・P38 土層断面 (東から)
- 2 SK21 土層断面 (東から)
- 3 SK22 完掘 (北西から)
- 4 SK22 土層断面 (北西から)
- 5 SK23 土層断面 (北から)
- 6 SK24・SK28 完掘 (南東から)
- 7 SK25 土層断面 (西から)
- 8 SK26 土層断面 (西から)

図版 10

- 1 SK27 土層断面 (西から)
- 2 SK28 土層断面 (西から)
- 3 SK30 土層断面 (南から)
- 4 調査風景 (東から)
- 5 調査風景 (東から)
- 6 調査風景 (北から)
- 7 SD05 出土遺物 口縁部
- 8 SD05 出土遺物 内面

図版 11

- 第 1 号溝状遺構出土遺物 (SD01)
- 第 3 号溝状遺構出土遺物 (SD03)
- 第 4 号溝状遺構出土遺物 (SD04)

図版 12

- 第 4 号溝状遺構出土遺物 (SD04)
- 第 5 号溝状遺構出土遺物 (SD05)
- 第 7 号溝状遺構出土遺物 (SD07)
- 第 9 号溝状遺構出土遺物 (SD09)
- 第 13 号溝状遺構出土遺物 (SD13)

図版 13

- 第 1 号土坑出土遺物 (SK01)
- 第 2 号土坑出土遺物 (SK02)
- 第 4 号土坑出土遺物 (SK04)
- 第 6 号土坑出土遺物 (SK06)
- 第 15 号土坑出土遺物 (SK15)
- 第 17 号土坑出土遺物 (SK17)
- 第 33 号ピット出土遺物 (P33)

第 1 章 調査に至る経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯

令和元年 5 月、事業者から戸田市教育委員会（以下、「市教育委員会」という。）に対し、戸田市上戸田二丁目 25 番 3、6 の一部における店舗・共同住宅建設事業計画及び埋蔵文化財の取り扱いについて相談があった。

市教育委員会では、事業計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地に所在しており、開発工事中に埋蔵文化財が発見される可能性が高いため、事業者に対し工事着手前に試掘確認調査を実施するように指導した。

これを受け、令和元年 7 月 5 日に事業者から市教育委員会に対し試掘確認調査の依頼書が提出され、試掘確認調査を実施することとなった。

試掘確認調査は、市教育委員会が令和元年 7 月 22 日・23 日に実施し、弥生時代後期から古墳時代前期の溝状遺構、土坑、ピットとこれに伴う土師器、平安時代の須恵器を確認した。

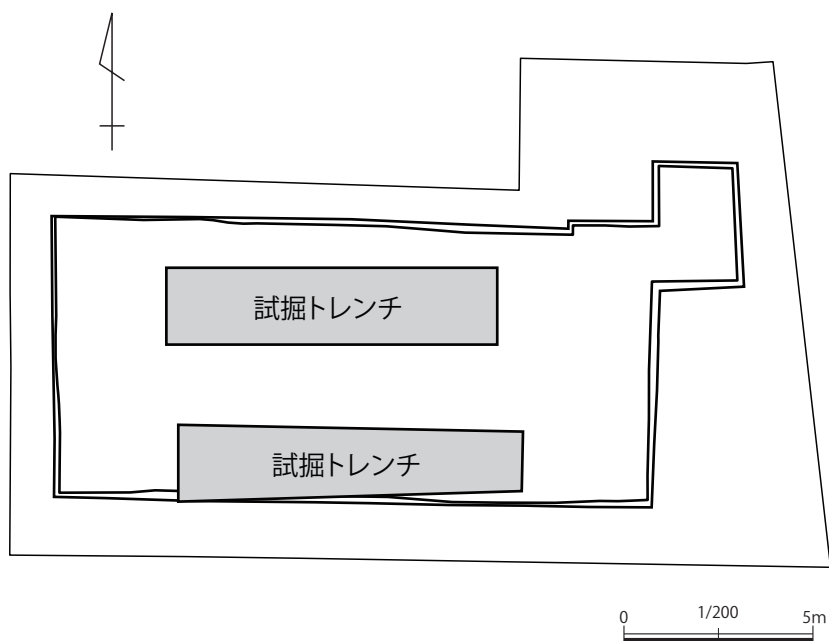
その後、事業者、市教育委員会間で埋蔵文化財の保存について協議をもち、柱状改良などで埋蔵文化財の破壊を免れない建物建設予定地については記録保存のための緊急発掘調査、それ以外については現状保存を実施することで合意した。

令和元年 7 月 8 日、事業者から文化財保護法第 93 条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出され、令和 2 年 12 月 21 日付け戸教生第 1599 号にて県教育委員会教育長宛に進達した。

これを受けて、県教育委員会から事業者に対し、令和 3 年 1 月 12 日付け戸教生文第 4 - 1547 号で、申請地内における工事着手前に発掘調査を実施するよう指示があった。

また、事業者は市教育委員会に対し、令和 2 年 12 月 21 日付で発掘調査の依頼書を提出し、また令和 2 年 12 月 23 日付け戸教生第 1593 号にて 2 者による「店舗・共同住宅建設予定地にかかる埋蔵文化財の取扱いに関する協定書」を締結した。

そして、市教育委員会から県教育委員会宛に、文化財保護法第 99 条の規定に基づき、令和 3 年 1 月 7 日付け戸教生第 1635 号により埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、前谷遺跡第 10 次発掘調査を実施することとなった。



第 1 図 遺構確認調査トレンチ図

第2節 発掘調査と整理作業の経過

1 発掘調査

前谷遺跡第10次調査は、令和3年1月12日から2月12日まで実施した。調査面積は126.91㎡である。1月12日に発掘現場の仮囲いをし、発掘機材・重機・プレハブ・仮設トイレを搬入した後、調査区を設定した。調査区は3区に分割し、西側を1区、北東側を2区、南東側を3区とし、1区から順に調査した。表土掘削は重機で行い、掘削残土は調査区内に仮置きした。また、同日、基準点測量及び測量基準杭の打設を行った。13日からは発掘作業員を動員し、重機で遺構確認面まで掘削した後、検出された遺構から順次調査を開始した。人力による遺構確認を行い、周溝状遺構や溝状遺構は土層観察ベルトを設定しながら掘削を進めた。また、遺構ごとに写真撮影、断面図の作成、トータルステーションによる測量、遺物の取り上げを適宜行った。22日に全景写真撮影を行い、1区の調査を終了した。25日に1区の埋め戻し及び2区の表土掘削を実施し、遺構検出を行った後、26日から遺構調査を開始した。2月1日に全景写真撮影を行った後、グリッドE-1にて基本層序の確認を行い、2区の調査を終了した。2日に2区の埋め戻しと並行して3区の表土掘削及び遺構検出を行った。3日から遺構調査を開始し、8日に全景写真撮影を行い、全ての遺構調査が完了した。9日に重機による埋め戻し・整地を行った。10日に重機・プレハブの搬出を行い、12日に仮設トイレの搬出、発掘機材・出土遺物の撤収を行い、発掘調査の全ての業務が完了した。

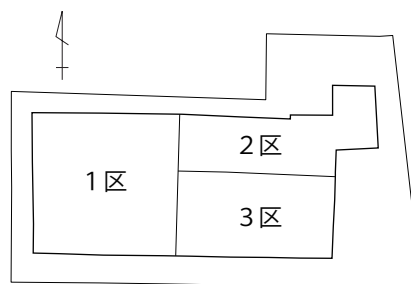
発掘調査での写真撮影は、デジタル一眼レフカメラ NikonD750 を使用し、JPEG、RAW (NEF) 形式にて撮影した。遺構の平面図作成は、株式会社 CUBIC 遺構くんを使用し、土層断面図は手実測にて行った。

2 整理作業

本調査に係る出土品及び図面等の整理作業、報告書作成は令和3年2月15日から同年8月31日まで、大成エンジニアリング株式会社府中事務所にて実施した。

発掘調査にて出土した遺物は、洗浄・註記・接合を経て、分類・集計等の基礎整理を行った。その後、報告書に掲載する遺物を抽出し、実測図作成・拓影採取を行った。採取した拓影はスキャナにてコンピュータに取り込み、Adobe Photoshopにてデジタルデータ化した。遺物実測図や土層断面図は拓影と同様にスキャナでコンピュータに取り込み、デジタルデータ化した後、Adobe Illustratorにてデジタルトレースを行った。

遺物写真は、Nikon D810 を使用して JPEG 形式にて撮影した。全てのデータが完成した後、版下は、Adobe Illustrator 及び InDesign にて作成し、INDD 形式ファイルにて入稿した。



第2図 調査区図

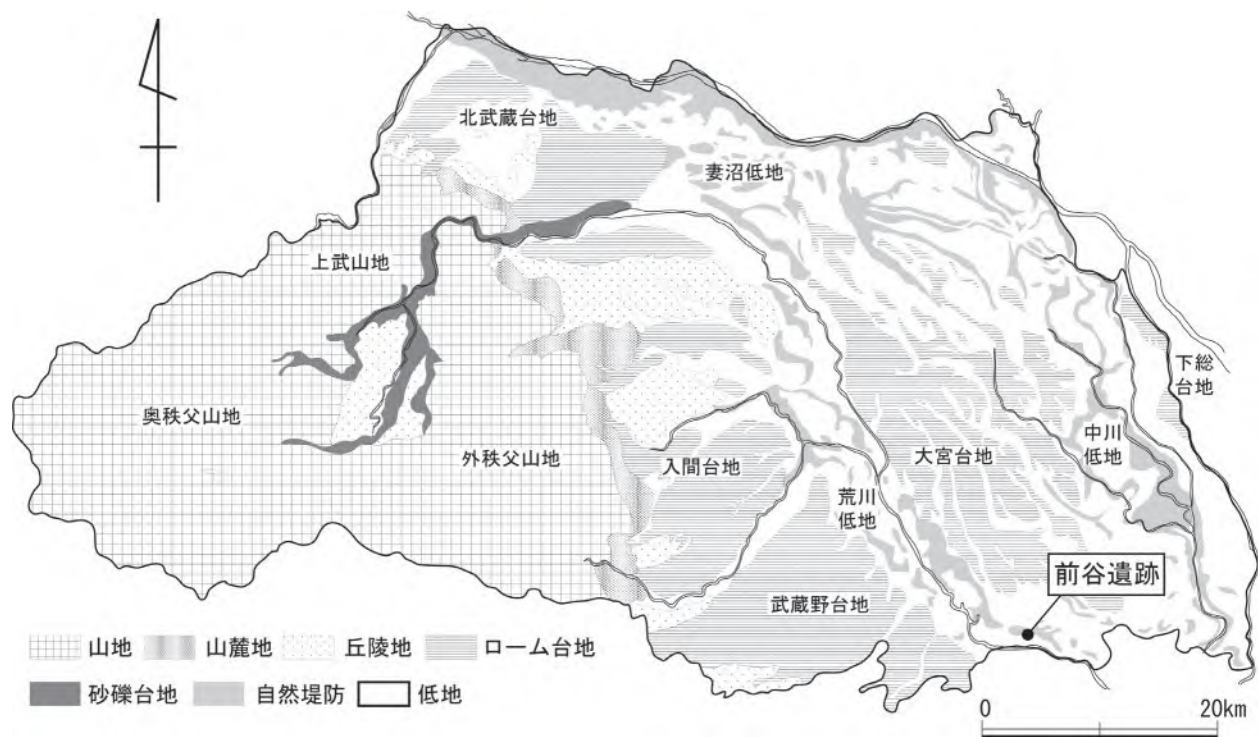
第2章 周辺環境と遺跡・調査の概要

第1節 地理的環境

戸田市は、埼玉県最南端部に位置し、東西約6.0km、南北約3.0km、面積18.19km²の東西に細長い形状を呈する。北はさいたま市、東は蕨市及び川口市にそれぞれ地続きで接し、西の朝霞市及び和光市、南の東京都板橋区及び北区とは、荒川を隔てて接している。市域には、国道17号線(旧中山道)や新大宮バイパスが南北に走り、首都高速5号線、東京外郭環状道路、JR埼京線の開通により、交通の利便性が高まり、急激な市街地化が進んでいる。都心に近い立地のため、工場や流通センターが数多く所在する。

戸田市の地形は、約2万年前の最終氷期に形成された開析谷を、利根川等の河川が運搬した土砂で充填してできた平坦な沖積低地(荒川低地)に位置している。荒川低地の下流には標高3mほどの微高地が発達し、市内では中央部を西は美女木から上戸田を通り、東は川口市まで荒川に沿って分布し、この微高地の南北に低地が裾のように広がる。この微高地は自然堤防とする説もあるが、荒川右岸に微高地が確認できないことや、形状が団子状を呈していることから浅谷もしくは海成段丘との指摘もある。

市内の地層は、戸田市本町付近では地下50mの地点に開析谷の基底礫層があり、谷を軟弱な沖積層が充填している。沖積層の上部2mから3mの層は戸田・蕨地域ではよくみることができ黄褐色・灰白色のシルト質粘土層で、戸田市においては遺跡の検出面としている層である。この層は岩質が均一である点や、微低地にはヨシ・マコモ等の水辺植物の遺体からなる泥炭層が挟在していることから、荒川低地を流れていた旧利根川が中川低地に東遷し、デルタ的環境から流水の影響の少ない



第3図 埼玉県の地形

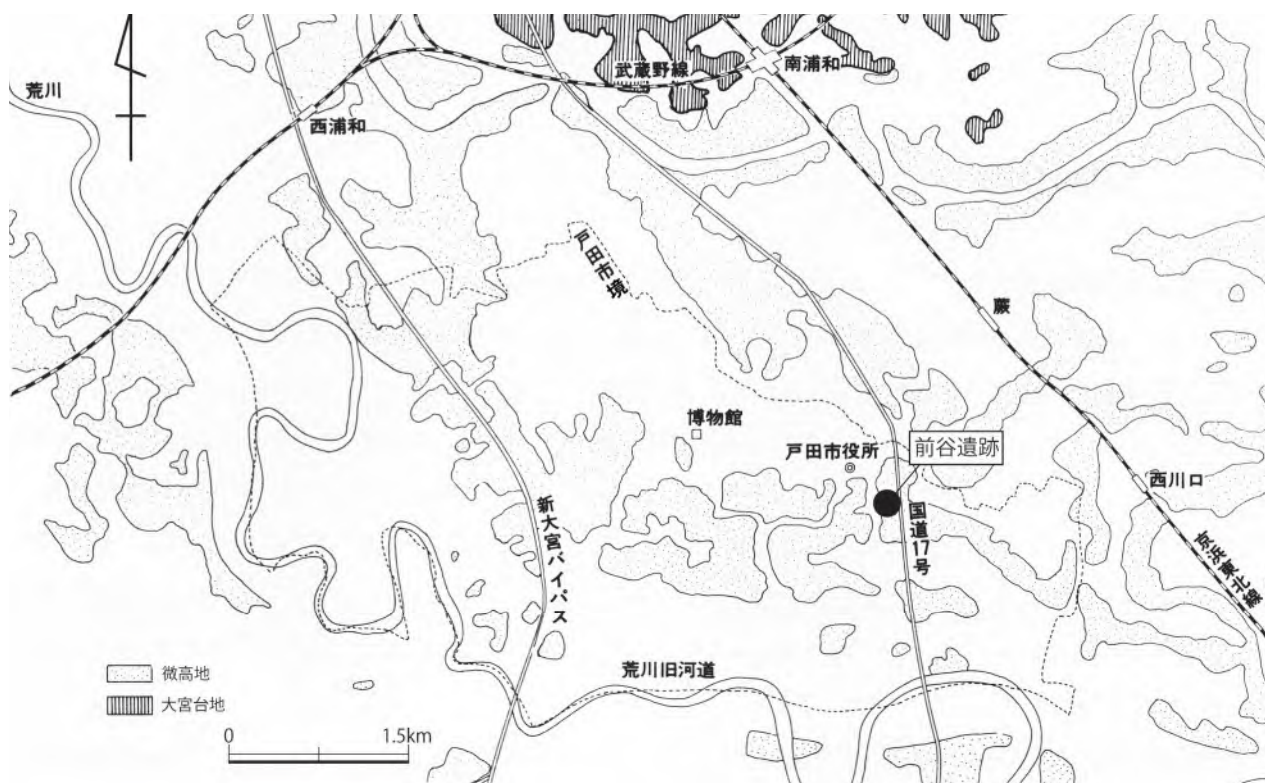
湖沼・潟的な環境に移行した後に形成された層である。形成時期については、泥炭層の炭素年代が $1640 \pm 60\text{yBP}$ とされることから、弥生時代末から古墳時代前期の時期にあたり、市内に初めて集落が形成された当時は微高地の周囲には湖沼・潟的な環境が広がっていたとみられる。

第2節 歴史的環境

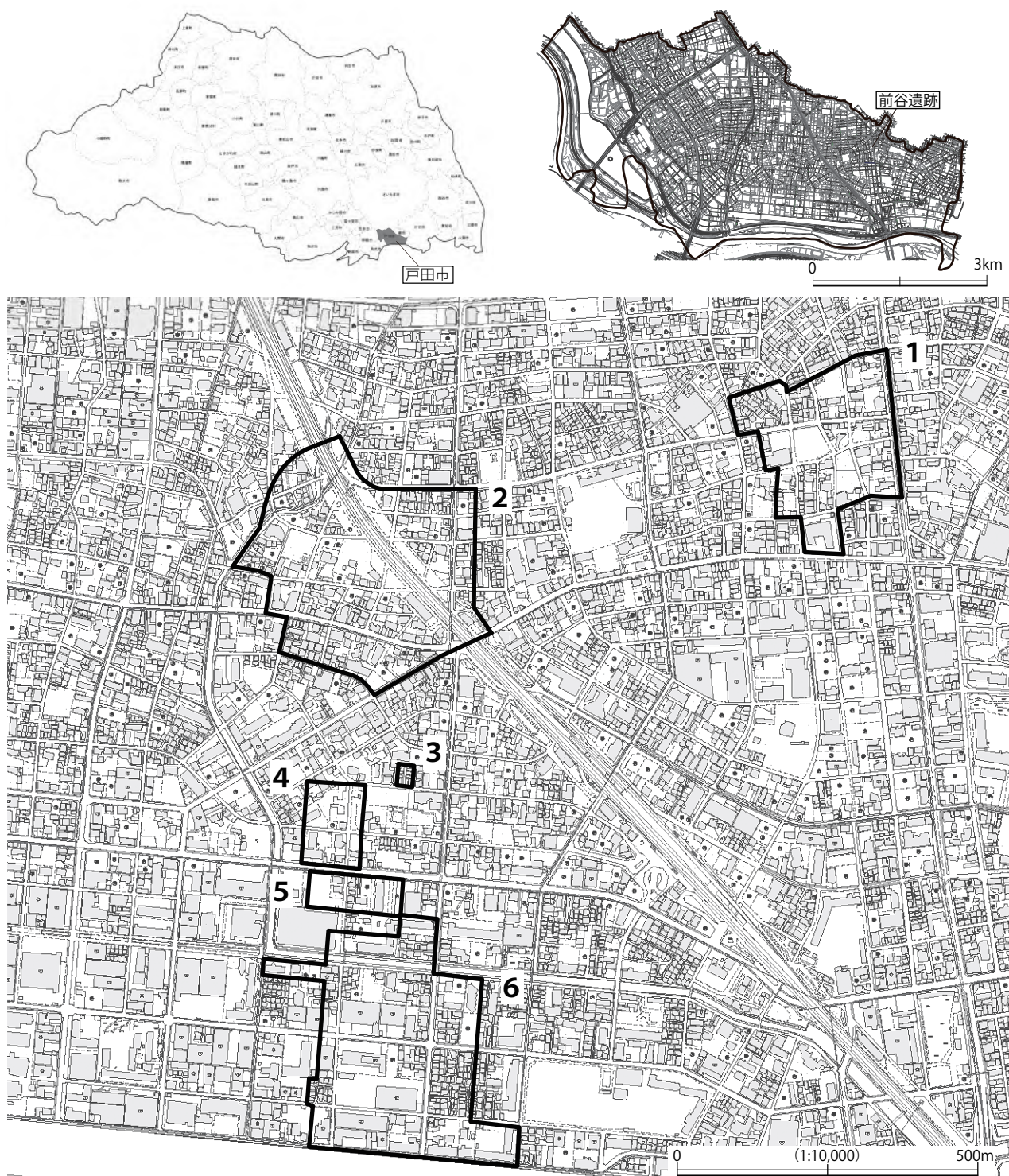
戸田市では、現在までのところ旧石器時代の遺構・遺物は確認されていない。縄文時代に帰属する遺跡も確認されていないが、縄文時代前期後葉から後期中葉までの土器片が検出されている。前期では、堤外から前期後葉諸磯a式の破片資料1点が出土しており、本町からは前期末のほぼ完形の十三菩提式深鉢形土器が出土している。また、戸田市文化会館の建設中に、含礫砂層から縄文時代前期から中期の頃の化石人骨が見つかった。人骨の周囲には丸木舟とみられる木屑等もみつかり、この時期の戸田市域が海進の影響を受けていたことが分かる。中期は、鍛冶谷・新田口遺跡・前谷遺跡や南原遺跡等で勝坂式・阿玉台式や加曽利E式期の土器片が検出されている。後期は、鍛冶谷・新田口遺跡では、堀之内式、加曽利B式の土器片が出土しており、堤外からも同型式期に帰属する土器片が出土している。

縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての遺構・遺物は確認されていないが、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭になると、市域内の微高地上に遺跡が形成されるようになる。

弥生時代後期末から古墳時代前期では、前谷遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、南町遺跡、南原遺跡、上戸田本村遺跡及び根木橋遺跡で遺構・遺物が検出されている。この中でも昭和51年(1976)に埼玉県選定重要遺跡に選定された鍛冶谷・新田口遺跡



第4図 戸田市域の地形



第5図 前谷遺跡及び周辺の遺跡位置図

第1表 前谷遺跡周辺遺跡の概要

NO.	遺跡名	所在地	種別	主な時代	立地
1	前谷遺跡	戸田市上戸田2丁目	集落跡・城館跡	弥生後期・古墳前期・平安・鎌倉・南北朝・室町	微高地
2	鍛冶谷・新田口遺跡	戸田市上戸田3・5丁目、本町3丁目、大字新曽	集落跡	弥生後期・古墳前期	微高地
3	大前遺跡	戸田市本町3丁目	集落跡	古墳前期・平安・南北朝・室町	微高地
4	上戸田本村遺跡	戸田市本町3丁目	集落跡・円墳	古墳後期	微高地
5	南町遺跡	戸田市南町	集落跡	古墳前期	微高地
6	南原遺跡	戸田市南町	集落跡・円墳	弥生後期・古墳前/後期・奈良・平安・鎌倉	微高地

は、当該期の方形周溝墓（周溝状遺構）群や集落跡、木器の出土等から全国的に有名である。上戸田本村遺跡では、第2次及び第3次調査では、環濠と思われる溝状遺構と溝の東部に密集する竪穴建物跡群を検出していることから、上戸田本村遺跡周辺が当該期の環濠集落であった可能性が高い。中期の遺構・遺物が検出された遺跡は南原遺跡第2次調査B区で竪穴建物跡3棟、第9次調査で井戸跡1基、第10次調査で竪穴建物跡1棟と土坑2基が確認されたのみである。

古墳時代後期は、上戸田本村遺跡や南原遺跡周辺で群集墳が形成される時期である。上戸田本村遺跡内には、「くまん塚」と呼ばれた円墳が所在し、そこから横穴式石室の石材の一部と直刀2振が出土している。また、上戸田本村遺跡では鬼高期の竪穴建物跡2棟、馬形埴輪や人物埴輪、円筒埴輪が出土した古墳周溝が1基検出されている。南原遺跡では、第1次調査で人物埴輪、円筒埴輪等が出土した円墳1基、第2次調査A区で円形周溝墓（円墳）1基、第3次調査D区で鬼高式期の竪穴建物跡1棟と屋外竈1基、第4次調査で円形周溝墓（円墳）2基、6次調査で円形周溝墓（円墳）1基、第8・9次調査で馬形埴輪、人物埴輪、家形埴輪、円筒埴輪等が出土した古墳周溝が2基検出されている。第12次調査では、人物埴輪、鶏形埴輪、円筒埴輪が出土した古墳周溝が1基検出されている。

平安時代は、南原遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、前谷遺跡で竪穴建物跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑群、柵列跡、畝状遺構が検出されている。

中世は、市の西部からさいたま市の南西部がかつて佐々目郷に当たり、鎌倉時代から戦国時代にかけて鶴岡八幡宮の社領であった。当該期は、大前遺跡や前谷遺跡、南原遺跡、南町遺跡及び美女木八幡社脇遺跡で掘立柱建物跡、溝状遺構、井戸跡等が検出されている。

近世は、市の大半の村が幕府の直轄領となり、徳川家の鷹場として使用されていたことがわかっている。また、五街道の一つである中山道の整備に伴い、荒川を渡る「戸田の渡し」が板橋宿と蕨宿を結ぶ交通の要所として機能していた。当該期は鍛冶谷・新田口遺跡第9次調査で溝状遺構や井戸跡が、美女木八幡社脇遺跡では美女木八幡社を廻っていた堀の跡が検出されている。

第3節 遺跡・調査の概要

前谷遺跡は、JR埼京線戸田公園駅から北東約700mの埼玉県戸田市上戸田二丁目地内に所在する。遺跡周辺には、「櫛構（とうがまえ）」、「竹ノ内」、「左衛門屋敷」、「雑色」、「元蕨」等の地名が古くから残っている。中山道蕨宿の成立が元蕨からの移住に伴うことが、戸田・蕨の近世文書で確認でき、中世には同地に六斎市等が開かれていたとみられ、また土塁の一部であった可能性のある地膨れ状の地形が残存していたことから、「蕨城」がこの地域に存在していた可能性が指摘されている。

本遺跡は、昭和47年（1972）の第1次発掘調査から、本調査を含めて10回にわたる発掘調査が実施されている。

第1次発掘調査は、昭和47年8月23日から9月6日までの期間で、店舗建設に伴う緊急発掘調査として市教育委員会が実施した。検出した遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の周溝状遺構2基と平安時代から中世の溝状遺構8条等である。遺物は、周溝状遺構から複合口縁を持つ壺形土器、台付甕形土器、広口

壺形土器、高坏形土器等が出土している。第3号溝から9世紀代に比定できる灰釉陶器、須恵器、土師器等が検出され、第4号溝は、断面形状が薬研状を呈しており、中世城館の堀であった可能性が指摘されている。

第2次発掘調査は、平成19年（2007）2月13日から3月20日までの期間で、共同住宅建設に伴う緊急発掘調査として戸田市遺跡調査会が実施した。検出した遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の周溝状遺構2基、平安時代の掘立柱建物跡1棟、溝状遺構3条、中世の溝状遺構2条、井戸跡2基、土坑1基、その他時期不明であるが平安時代から中世に帰属する可能性がある柵列跡4列、土坑4基、ピット43基である。出土遺物は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の土器、平安時代の瓦塔片、土師器、須恵器、中世の陶器、漆器、板碑、その他土製紡錘車、砥石等である。これらのなかでも詳細な時期・産地は不明であるが、第5号溝状遺構から出土した線刻画が施された須恵器瓶の破片資料は、ほかに類例が少なく、特筆できる。

第3次発掘調査は、平成23年（2011）12月1日から平成24年（2012）1月31日までの期間で、戸建分譲住宅建設に伴う緊急発掘調査として、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。検出した遺構は古墳時代前期の周溝状遺構6基、井戸跡1基、土坑10基、平安時代の土坑37基、井戸跡3基、溝状遺構1条、ピット59基、中・近世の溝状遺構4条、井戸跡1基等である。遺物は、複合口縁を持つ壺形土器、甕形土器、台付甕形土器、無頸壺、8・9世紀の東金子、南比企及び未野産の須恵器、中世の常滑焼、近世の天目茶碗等が出土している。

第4次発掘調査は、平成23年12月26日から平成24年1月18日までの期間で戸建専用住宅建設に伴う緊急発掘調査として、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。検出した遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の周溝状遺構1基、溝状遺構1条、平安時代の溝状遺構3条を検出した。出土遺物は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の土器、平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦塔片、中世の陶器等を検出した。

第5次発掘調査は、平成28年（2016）6月1日から6月30日までの期間で個人住宅建設に伴う緊急発掘調査として戸田市教育委員会が実施した。検出した遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の周溝状遺構4基、溝状遺構1条、平安時代の溝状遺構1条、土坑2基、井戸跡2基、その他時期不明のピット11基を検出した。遺物は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の土師器、平安時代の須恵器、ロクロ土師器、中世の陶器片を検出した。

第6次発掘調査は、平成29年（2017）4月17日から5月31日までの期間で個人住宅建設に伴う緊急発掘調査として戸田市教育委員会が実施した。弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の周溝状遺構4基、土坑1基、平安時代から中世相当の溝状遺構5条、土坑21基、井戸跡4基を検出した。出土遺物は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の土師器、平安時代の須恵器、ロクロ土師器、中近世の陶器片が出土した。

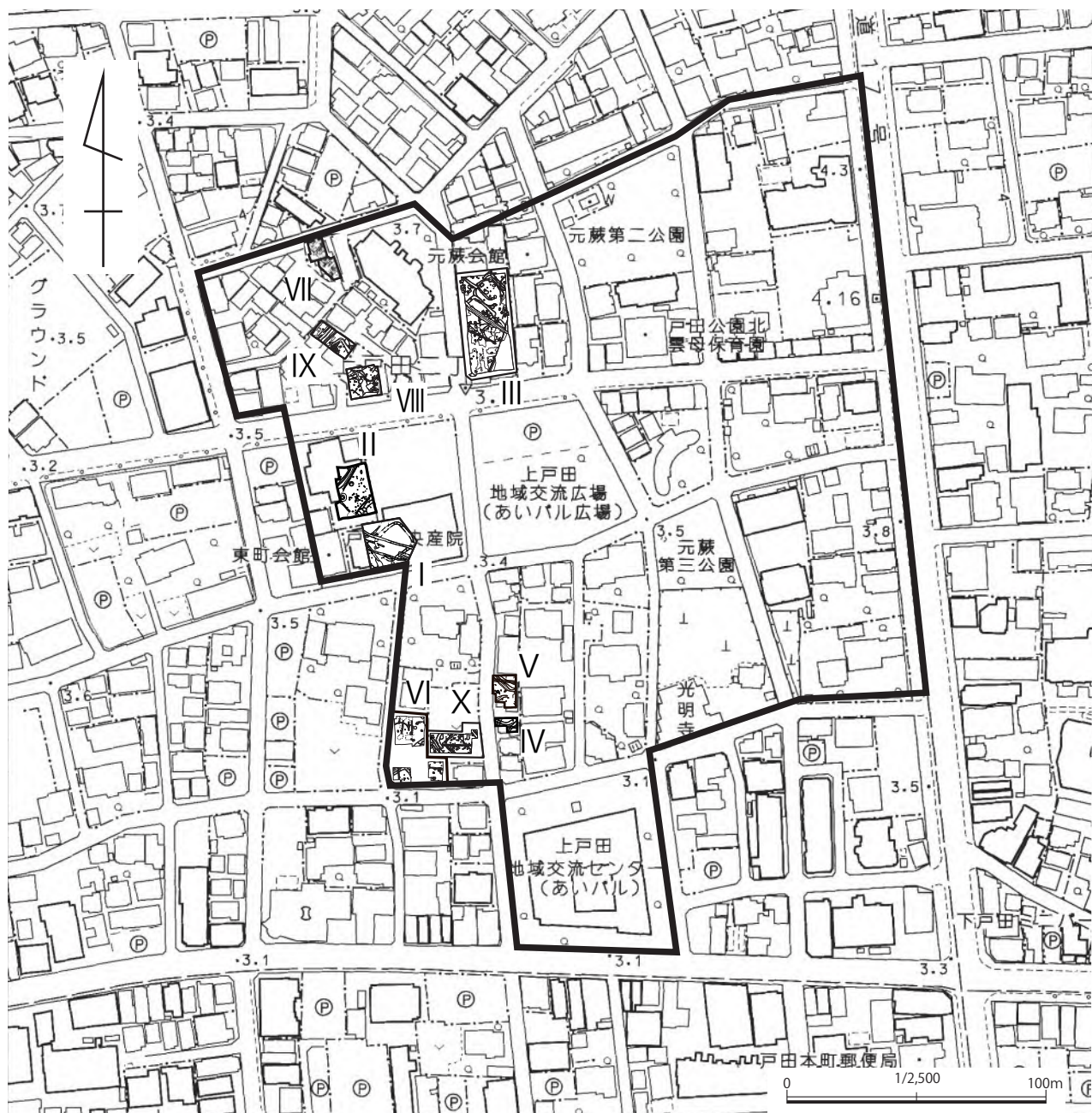
第7次発掘調査は、令和元年（2019）12月2日から12月20日までの期間で戸建専用住宅建設に伴う緊急発掘調査として戸田市教育委員会が実施した。検出した遺構は、平安時代から中世までの畝状遺構17条、区画溝3条、土坑26基、その他時期不明のピット23基を検出した。出土遺物は、古墳時代前期の土師器、平安

時代の土師器、須恵器、ロクロ土師器が出土した。このうち畝状遺構は平安時代の畑作遺構として戸田市内では初めて確認された。

第8次発掘調査は、令和2年（2020）5月8日から6月1日までの期間で共同住宅建設に伴う緊急発掘調査として戸田市教育委員会が実施した。検出した遺構は、平安時代の柵列跡1列、溝状遺構1条、井戸跡1基、土坑2基、ピット4基、中世の溝1条、土坑4基、近世の土坑6基、ピット12基、時期不明の性格不明遺構1条、ピット42基を検出した。出土遺物は、弥生土器、古墳時代前期の土師器、平安時代の土師器、須恵器、ロクロ土師器、陶器、砥石が出土した。

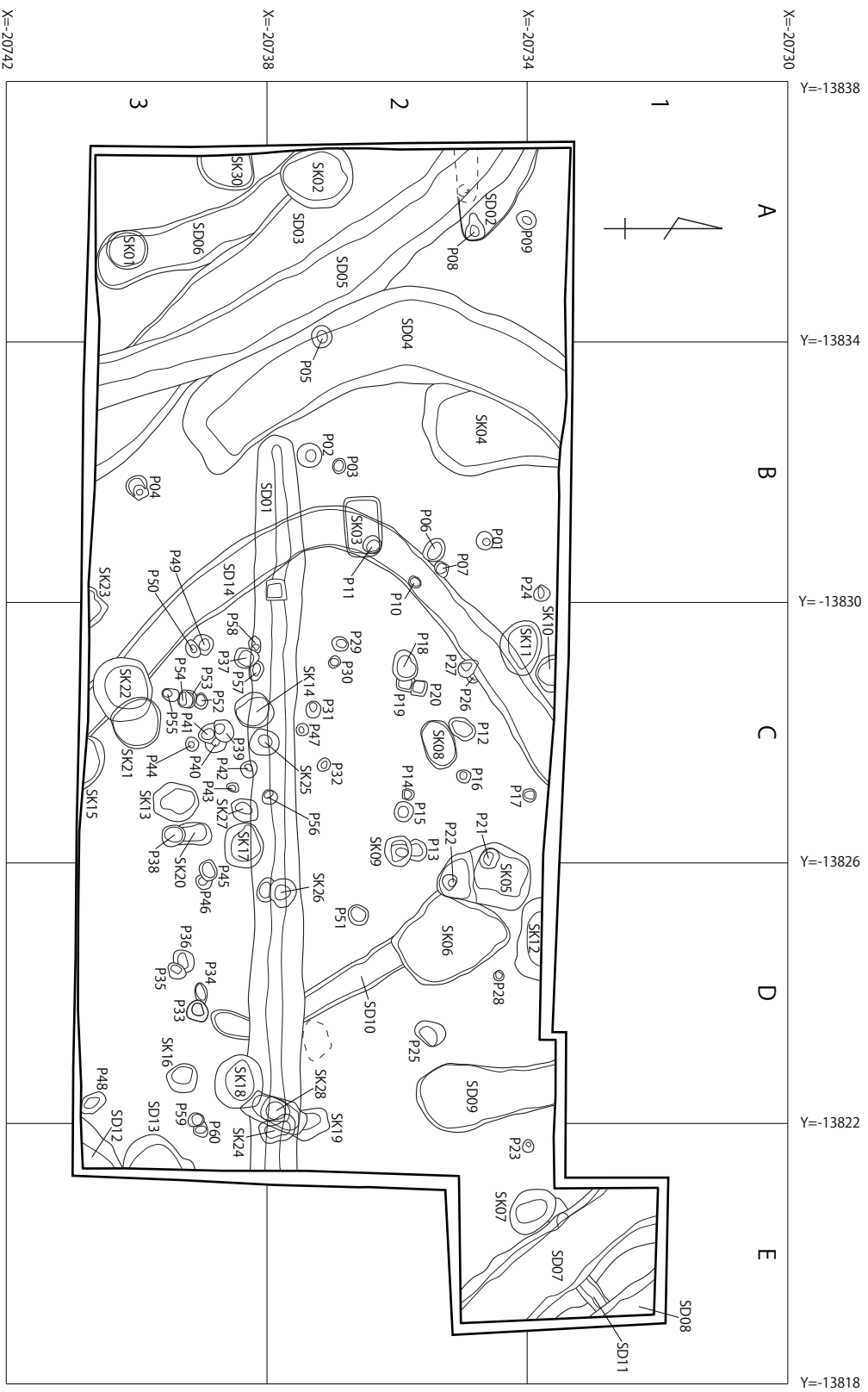
第9次発掘調査は、令和3年（2021）1月12日から2月12日までの期間で共同住宅建設に伴う緊急発掘調査として戸田市教育委員会が実施した。検出した遺構は、弥生時代の周溝状遺構1基、ピット1基、平安時代の溝状遺構3条、時期不明の溝状遺構6条、土坑5基、ピット4基を検出した。出土遺物は、弥生土器、古墳時代前期の土師器、平安時代の土師器、須恵器、土師質土器、陶器が出土した。周溝状遺構は、残存状況のよい壺、高坏等が多く出土しており、方形周溝墓の可能性が高い。

本調査は、第10次発掘調査となる。令和3年（2021）1月12日から2月12日までの期間で店舗・共同住宅建設に伴う緊急発掘調査として戸田市教育委員会が実施した。検出した遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代前期では周溝状遺構に復元可能な溝状遺構8条、土坑7基である。これまでの調査で当該期の竪穴建物跡が1棟も検出されていないことは特筆できる。出土遺物は弥生土器、土師器の他、繊細な装飾が施された弥生土器のミニチュアが完形で出土している。平安時代から中世では溝状遺構6条、井戸跡1基、土坑11基である。出土遺物は東金子・南比企産の須恵器、中世陶器、石帯（丸鞆）等が出土している。近世では井戸跡1基、土坑9基である。出土遺物は瀬戸・美濃系陶磁器、肥前系陶磁器、江戸在地系のかわらけ小皿や焙烙、銭貨の寛永通宝等が出土している。その他、ピット60基を検出したが、遺物はほとんど出土してなく、多くが時期不明である。



- I 第1次調査 (1972) : 戸田市教育委員会調査 (伊藤 1978)
- II 第2次調査 (2007) : 戸田市教育委員会調査 (岩井 2014)
- III 第3次調査 (2011) : 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査 (赤熊 2012)
- IV 第4次調査 (2011~2012) : 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査 (岩井 2015)
- V 第5次調査 (2016) : 戸田市教育委員会調査 (長澤 2018)
- VI 第6次調査 (2017) : 戸田市教育委員会調査 (吉田 2019)
- VII 第7次調査 (2019) : 戸田市教育委員会調査 (今井・辻 2020)
- VIII 第8次調査 (2020) : 戸田市教育委員会調査 (今井・諸星 2020)
- IX 第9次調査 (2021) : 戸田市教育委員会調査 (未報告)
- X 第10次調査 (2021) : 戸田市教育委員会調査 【本調査】

第6図 前谷遺跡調査区位置図



第7図 調査区全体図

第4節 基本土層

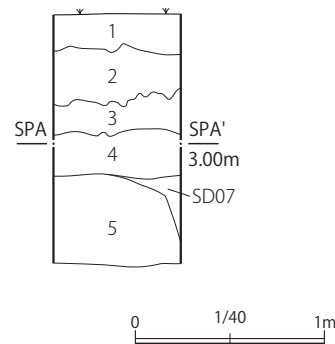
基本土層はE-1グリッドにて確認し、地表面下約1.34 mまでの土層を確認し、5層に区分した。層位はいずれも概ね水平堆積を呈している。

現地表面の標高は3.60 m前後を測る。1、2層はともに表土攪乱層であり、1層は本調査区の東側で確認された。3層はにぶい黄褐色土で近世以降の耕作土である。4層は黒褐色土で弥生後期後半以降の遺物が混入する遺物包含層で、調査区内では部分的に残存する。5層はにぶい黄橙色のシルト層で、自然堆積層である。本調査区では5層上面を遺構確認面とし、標高は2.80 m前後（地表面下0.90 m）を測る。

また、本調査地点で実施されたボーリング調査では、地表面から0.50 mまでが暗茶褐色の盛土、0.50～1.50 mまでが黄褐灰色の耕作土、1.50～3.80 mまでが暗褐灰色の粘土質シルトで沖積第1粘性土層、3.80～9.80 mまでが暗灰色の細砂層で沖積砂質土層の含水層である。

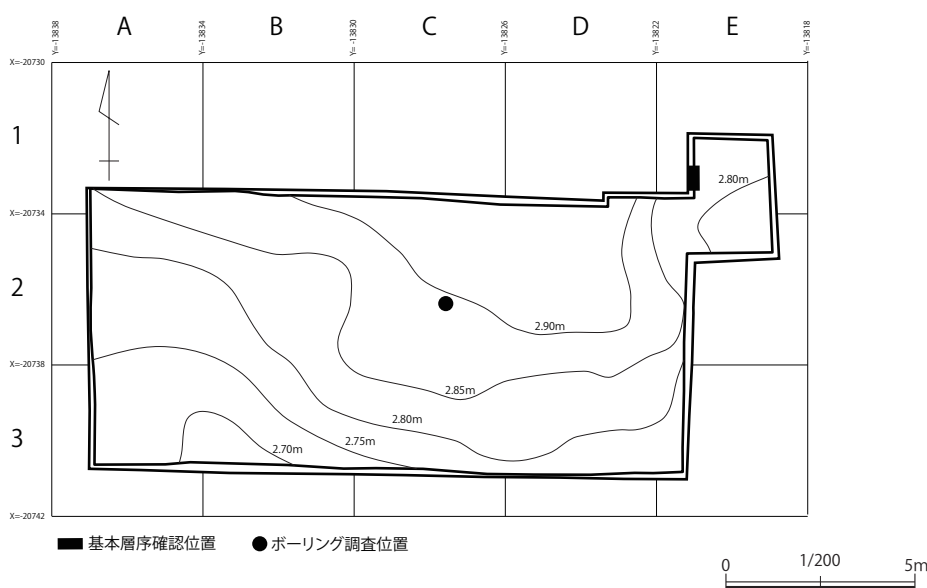
本調査で確認した基本土層と、ボーリング調査では自然堆積層の検出位置が異なる。ボーリング調査による自然堆積層の検出位置は本調査で検出した溝状遺構の深さと一致する。このように、自然堆積層の検出位置のずれは、ボーリング調査が溝状遺構の範囲で記録したことによるものと考えられる。

等高線は自然堆積層である5層上面で記録した。標高2.70～2.90 mであり、ほぼ平坦であるが、北から南へ緩やかに下る傾斜が認められる。この自然堆積は湖沼もしくは干潟に伴う自然堆積層であるが、遅くとも弥生後期後半には形成されたと推定される。



- 1 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) 締り、粘性あり。表土。
- 2 灰黄褐色シルト (10YR6/2) 締りあり、粘性なし。盛土。
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 締りあり、粘性なし。耕作土。
- 4 黒褐色土 (7.5YR3/2) 締りやや強く、粘性あり。
- 5 にぶい黄橙色シルト (10YR7/3) 締り強く、粘性なし。

第8図 基本土層図



第9図 等高線図及び基本土層確認位置、グリッド配置図

第 3 章 検出された遺構と遺物

第 1 節 弥生時代後期後半から古墳時代前期

1 溝状遺構（周溝状遺構に復元可能なものを含む）

第 3 号溝状遺構－SD03

遺構（第 10 図 図版 3）

位置：A・B－2・3 グリッド。重複関係：SK02、SD05 に切られ、SD06 を切る。平面形・規模：両端が北西・南東方向の調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。調査区内では概ね直線状を呈する。検出状況から周溝状遺構である可能性が考えられる。長さ 7.70 m、上端幅 1.12～1.14 m、下端幅 0.82～0.93 m、確認面からの深さは 0.28 m 前後である。断面形は逆台形を呈する。主軸方位：N－42°－W。覆土：1 箇所覆土を観察した。4 層に分層し、自然堆積であると考えられる。遺物（第 12 図、第 2 表、図版 11）

出土状況：本遺構からは 53 点、1478.6 g の遺物が出土した。弥生土器 8 点、129.7 g、土師器 45 点、1348.9 g である。これらのうち、3 点を図示した。

時期

出土遺物から、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭と推定される。

第 4 号溝状遺構－SD04

遺構（第 10 図 図版 2・3）

位置：A・B－1～3 グリッド。重複関係：SD05、SK04 を切る。平面形・規模：北側が調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。調査区内では弧状を呈し、周溝状遺構であると考えられる。長さ 4.98 m、上端幅 0.83～1.49 m、下端幅 0.65～1.00 m、確認面からの深さは 0.68～0.75 m 前後である。断面形は逆台形で、上部が外傾している。主軸方位：N－36°－W。覆土：1 箇所覆土を観察した。5 層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物（第 14 図、第 2・3 表、図版 11・12）

出土状況：本遺構からは 97 点、2687.6 g の遺物が出土した。弥生土器 42 点、1557.4 g、土師器 50 点、1061.3 g、須恵器 3 点、50.3 g、焼成粘土塊 2 点、18.6 g である。これらのうち、9 点を図示した。5 は弥生壺の底部である。壺の内面はみえないため通常は赤彩されないが、5 は内外面ともに赤彩されている。特に内面にしっかりとした赤彩が認められ、外面の赤彩と比較しても内面の方が良好に残存していることから、欠損後に赤彩された可能性が高い。この場合、装飾的な目的ではなく、実用的な目的で赤彩化したと考えられ、漆パレットとして用いられたものと推測される。底部には木葉痕がみられる。6 は弥生壺の底部である。外面に赤彩が施され、底部には木葉痕がみられる。胎土の様相から 2 と同一個体であると考えられる。

時期

出土遺物から、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭と推定される。

第5号溝状遺構－SD05

遺構（第10図 図版2・3）

位置：A・B－2・3グリッド。重複関係：SD02、SD04に切られ、SD03を切る。平面形・規模：両端が北西・南東方向の調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。調査区内では緩やかな弧状を呈する。長さ6.20m、上端幅0.53～0.96m、下端幅0.34～0.67m、確認面からの深さは0.65～0.87m前後である。断面形は逆台形を呈する。主軸方位：N－33°－W。覆土：1箇所覆土を観察した。4層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物（第15図、第3表、図版12）

出土状況：本遺構からは24点、998.8gの遺物が出土した。弥生土器1点、10.8g、土師器22点、947.5g、瓦（近代）1点、40.5gである。これらのうち、4点を図示した。12は土師器の鉢で、完形である。外面は口縁直下まで横位及び縦位にハケメが施されている。鉢は本来口縁部まで工具による調整はされないため、壺を転用したものと推測される。しかし、口縁部に欠損の痕跡はみられず、直線的であり、調整が施されていることが窺える。また、内面には横位及び斜位にヘラミガキが施され、焼成前調整の痕跡がみられる。すなわち、鉢の形に成形されたのは焼成前の段階であり、欠損後に転用されたものではない。当初は壺として作られていたが、製作の途中で内面と口縁を調整して鉢へと作り替えられた可能性が考えられる。

時期

出土遺物から、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭と推定される。また、出土遺物のうち瓦（近代）は攪乱からの流れ込みであると考えられる。

第6号溝状遺構－SD06

遺構（第10図 図版3）

位置：A－2・3グリッド。重複関係：SD03、SK01、SK02に切られる。平面形・規模：北側をSD03、SK02に切られるため、全体の形状は不明である。長さ3.20m、上端幅0.70～0.87m、下端幅0.48～0.62m、確認面からの深さは0.25～0.29m前後である。断面形は逆台形を呈する。主軸方位：N－20°－W。覆土：1箇所覆土を観察した。3層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは2点、11.6gの遺物が出土した。弥生土器1点、4.6g、土師器1点、7.0gである。

時期

出土遺物から、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭と推定される。

第7号溝状遺構－SD07

遺構（第11図 図版3）

位置：E－1・2グリッド。重複関係：SD11に切られる。平面形・規模：両端が北西方向及び南東方向の調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。長さ3.65m、上端幅1.04～1.35m、下端幅0.69～0.82m、確認面からの深さは0.55～0.67m前後である。断面形は逆台形を呈する。検出状況から周溝状遺構である可能性が

考えられる。主軸方位：N - 37° - W。覆土：1箇所覆土を観察した。8層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物（第16図、第3表、図版12）

出土状況：本遺構からは30点、840.2 gの遺物が出土した。弥生土器8点、81.0g、土師器22点、759.2 gである。これらのうち、2点を図示した。15は土師器の甗で、底部の一部である。底部には刺突穿孔がみられ、焼成前にヘラナデした後、内外面双方から3箇所穿孔したことが窺える。貫通していない孔もあるが、貫通している孔は複数の孔が重なって一つの大きな孔を形成している。

時期

出土遺物から、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭と推定される。

第8号溝状遺構 - SD08

遺構（第11図 図版4）

位置：E - 1グリッド。重複関係：SD11に切られる。平面形・規模：北東側の大半が調査区外へと延び、確認範囲が狭小であるため、全体の形状は不明である。長さ1.27 m、上端幅0.58 m、下端幅0.42 m、確認面からの深さは0.40 m前後である。断面形は逆台形を呈すると思われる。主軸方位：N - 37° - W。覆土：北壁面で覆土を観察した。3層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは3点、35.3 gの遺物が出土した。弥生土器1点、18.9 g、土師器2点、16.4 gである。

時期

出土遺物から、弥生時代後期後半から古墳時代前期と推定される。

第10号溝状遺構 - SD10

遺構（第11図 図版4）

位置：D - 2・3グリッド。重複関係：SD01、SK06に切られる。平面形・規模：平面形は南端がわずかに屈曲する溝状を呈する。長さ3.04 m、上端幅0.33～0.49 m、下端幅0.25～0.38 m、確認面からの深さは0.06～0.15 mである。断面形は皿状を呈する。主軸方位：N - 30° - W。覆土：2箇所覆土を観察した。単層で、自然堆積であると考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

覆土から、弥生時代後期後半から古墳時代前期と推定される。

第14号溝状遺構 - SD14

遺構（第13図 図版2・4・5）

位置：B - 2・3、C - 1～3グリッド。重複関係：P07、P10、P11、P26を切り、SD01、SK03、SK11、SK21、SK22、P06、P27に切られる。平面形・規模：両端が調査区外へ延びているため、全体の規模は不明である。調査区内ではやや丸みを帯びたL字状に屈曲し、周溝状遺構のコーナー部であると考えられる。上端幅0.53～0.75

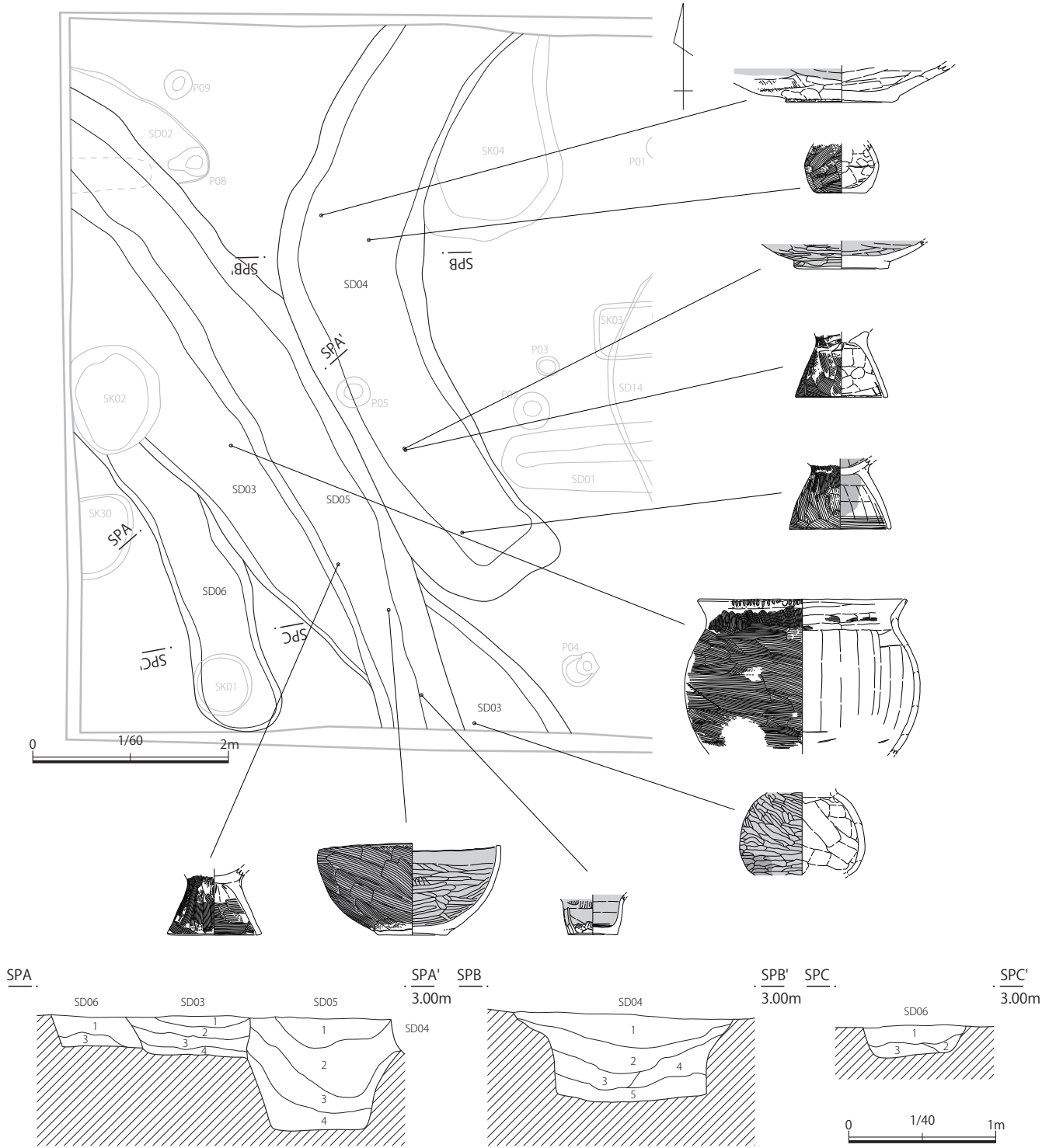
m、下端幅 0.35 ~ 0.56 m、確認面からの深さは 0.17 ~ 0.30 m である。断面形は逆台形を呈する。主軸方位：N - 37° - W。覆土：4箇所を観察し、2箇所を図示した。3層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは土師器 10 点、78.1 g が出土した。

時期

出土遺物から、弥生時代後期後半から古墳時代前期と推定される。



第 10 図 第 3・4・5・6号溝状遺構実測図 (SD03・04・05・06)

SD03 土層説明 (SPA-SPA')

- | | | |
|-------------------|-----------|--------------------------|
| 1 暗褐色土 (7.5YR3/3) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色粒子を多量含む。 |
| 2 暗褐色土 (7.5YR3/3) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色粒子、黄褐色土ブロック径1~2cmを含む。 |
| 3 暗褐色土 (7.5YR3/3) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径2~3cmを多量含む。 |
| 4 黒褐色土 (7.5YR3/2) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色粒子を含む。 |

SD04 土層説明 (SPB-SPB')

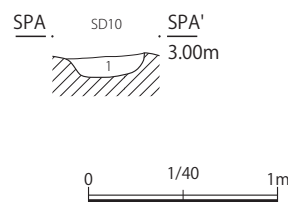
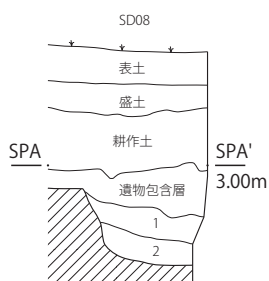
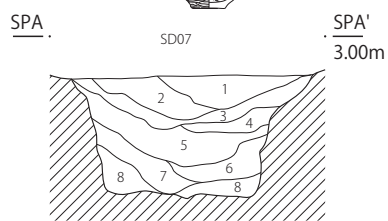
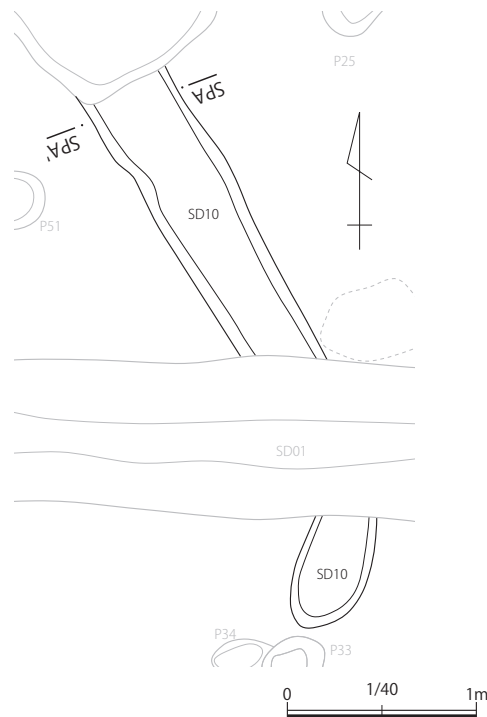
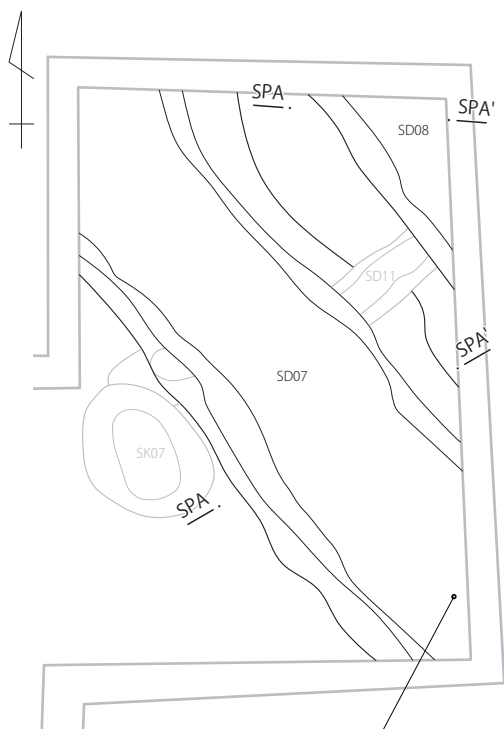
- | | | |
|-------------------|-----------|----------------------------------|
| 1 黒褐色土 (7.5YR2/2) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色粒子、黄褐色土ブロック径3~5cmを多量含む。 |
| 2 黒褐色土 (7.5YR2/2) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色粒子を多量含む。 |
| 3 黒褐色土 (7.5YR2/2) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径2~3cmを多量含む。 |
| 4 黄褐色土 (10YR5/6) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径5cmを多量、黒色土ブロック径5cmを含む。 |
| 5 黒褐色土 (10YR2/3) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径1~2cmを含み、鉄分が多く層位内に堆積する。 |

SD05 土層説明 (SPA-SPA')

- | | | |
|--------------------|-----------|---------------------------|
| 1 褐色土 (7.5YR4/4) | 粘性、締まりあり。 | 黒色土ブロック径2~3cmを多量、黒色粒子を含む。 |
| 2 褐色土 (7.5YR4/4) | 粘性、締まりあり。 | 黒色土ブロック径3~5cmを含む。 |
| 3 灰褐色土 (7.5YR4/2) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径3~5cmまばらに含む。 |
| 4 灰白色粘土 (7.5YR8/1) | 粘性、締まりあり。 | 黒色土をラミナ状に交互に堆積する。 |

SD06 土層説明 (SPA-SPA', SPC-SPC')

- | | | |
|-------------------|-----------|----------------------|
| 1 暗褐色土 (7.5YR3/3) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色粒子を多量含む。 |
| 2 黒褐色土 (7.5YR3/2) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色粒子を含む。 |
| 3 暗褐色土 (7.5YR3/3) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径0.5~1cmを含む。 |



SD07 土層説明 (SPA-SPA')

- | | | |
|---------------------|-----------|--|
| 1 黒褐色土 (7.5YR3/1) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色粒子、黄褐色土ブロック径1cm、炭化物ブロック径1cmをまばらに含む。 |
| 2 黒褐色土 (7.5YR3/1) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色粒子、黄褐色土ブロック径1cmを多量含む。 |
| 3 黒褐色土 (7.5YR3/1) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色粒子、炭化物ブロック径1cmを含む。 |
| 4 黒褐色土 (7.5YR3/1) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色粒子、炭化物ブロック径1cmを多量含む。 |
| 5 黒褐色土 (7.5YR3/1) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色粒子、炭化物ブロック径1cmを多量含む、鉄分堆積、黄褐色土ブロック径0.5cmをまばらに含む。 |
| 6 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) | 粘性、締まりあり。 | 地山の黄褐色土堆積中に黒褐色土ブロック径2~3cmをまばらに含む。 |
| 7 黒褐色土 (7.5YR3/1) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色粒子、黄褐色土ブロック径0.5~1cmを多量含む、鉄分が堆積する。 |
| 8 黒褐色土 (7.5YR3/1) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径2~3cmを含む。 |

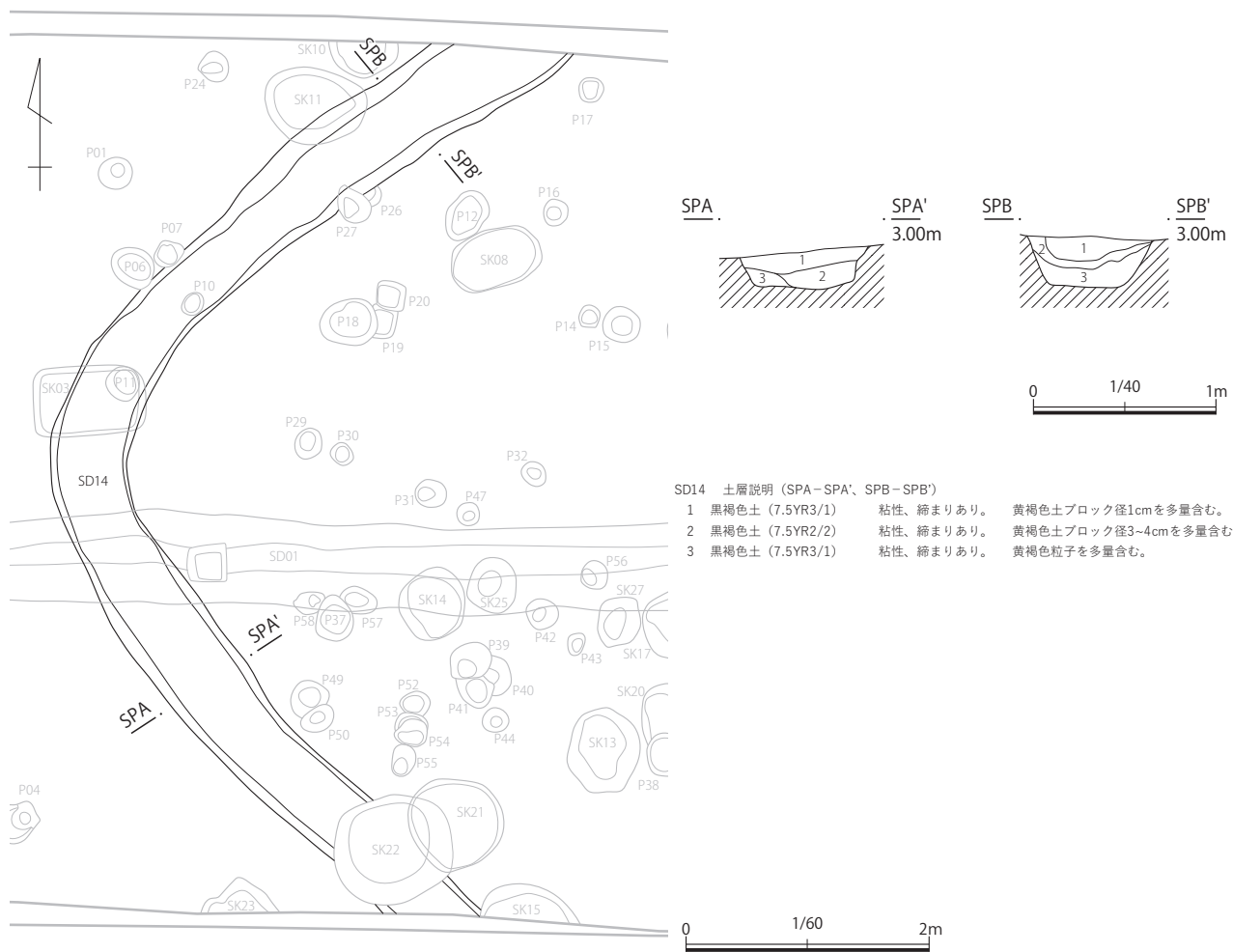
SD08 土層説明 (SPA-SPA')

- | | | |
|-------------------|-----------|--|
| 1 黒褐色土 (7.5YR2/2) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径1~2cmを多量含む、炭化物ブロック径1cmまばらに含む。 |
| 2 黒褐色土 (7.5YR2/2) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径0.5cm、炭化物ブロック径1cmを含む。 |

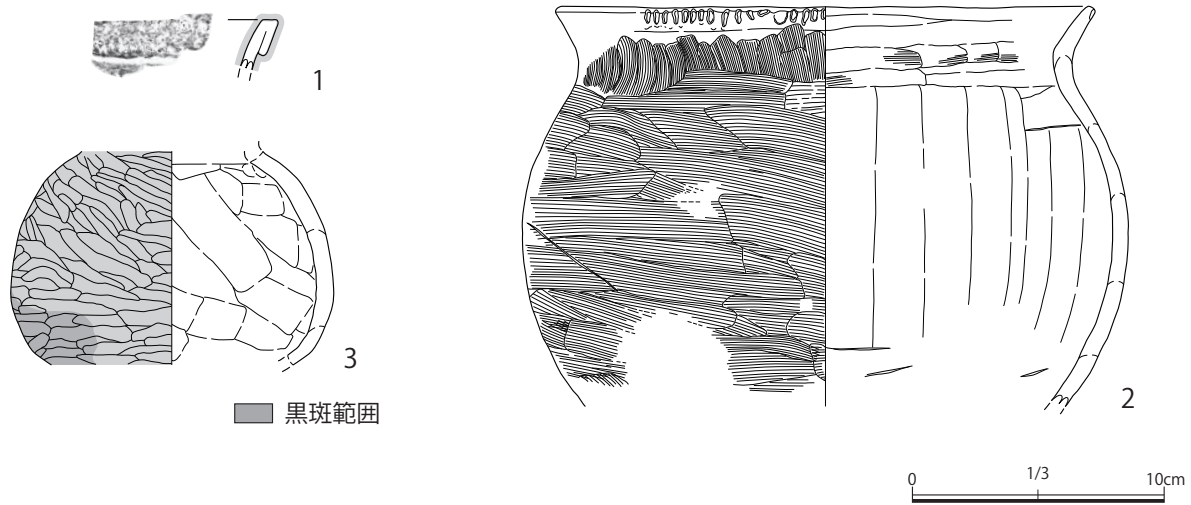
SD10 土層説明 (SPA-SPA')

- | | | |
|-------------------|-----------|-----------|
| 1 黒褐色土 (7.5YR2/2) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色粒子を含む。 |
|-------------------|-----------|-----------|

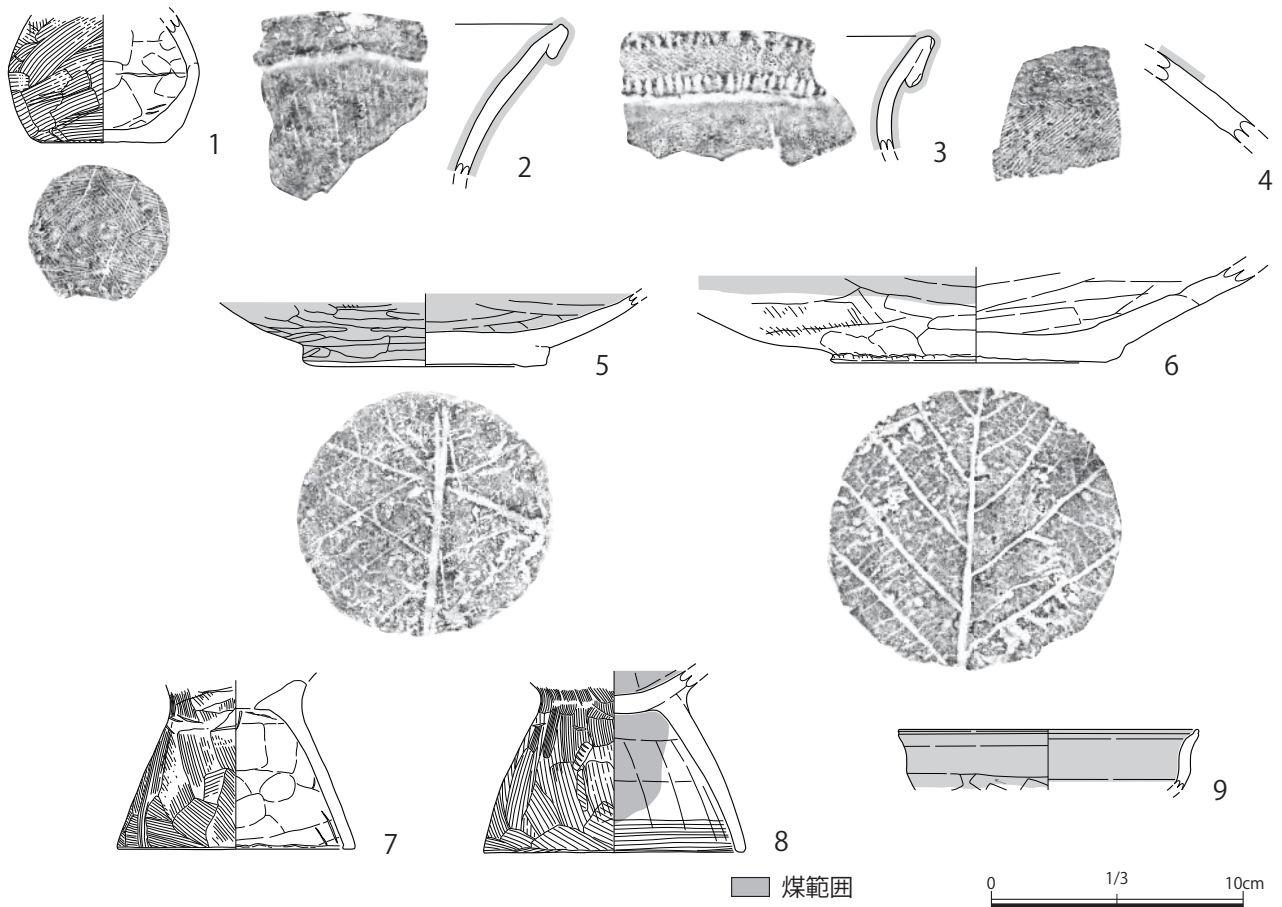
第11図 第7・8・10号溝状遺構実測図 (SD07・08・10)



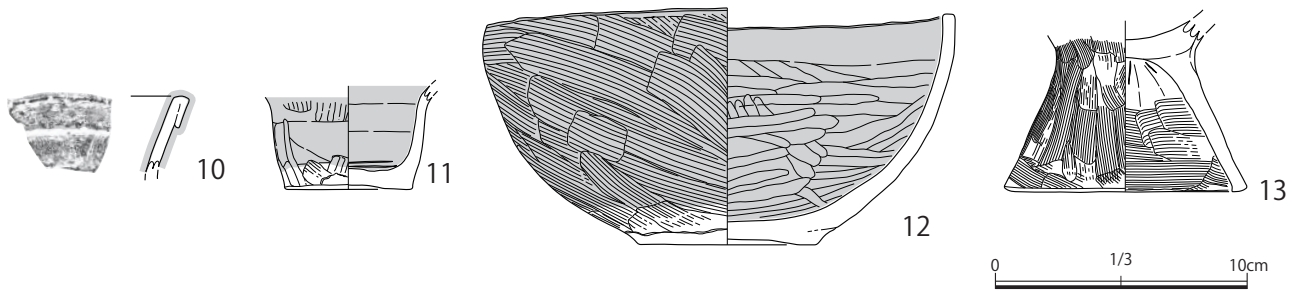
第12図 第14号溝状遺構実測図 (SD14)



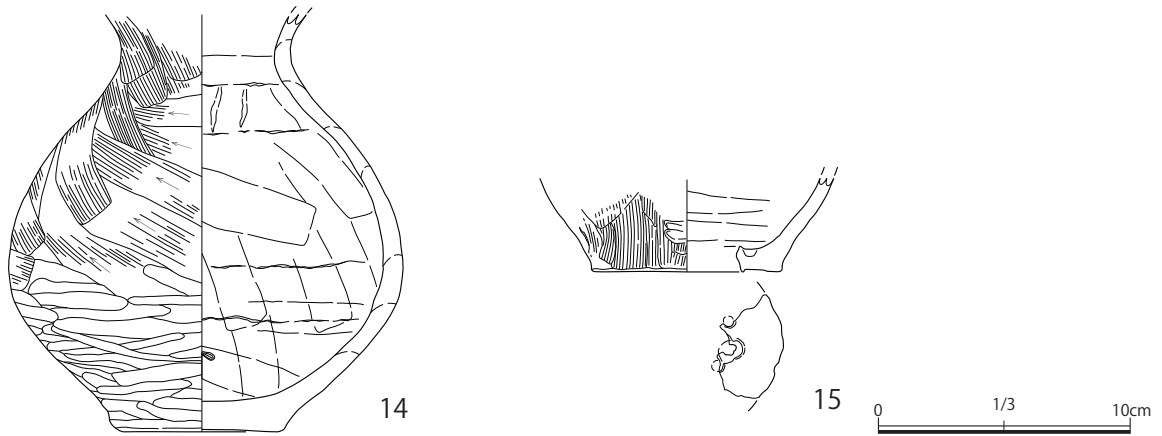
第13図 第3号溝状遺構出土遺物実測図 (SD03)



第 14 图 第 4 号溝状遺構出土遺物実測図 (SD04)



第 15 图 第 5 号溝状遺構出土遺物実測図 (SD05)



第 16 图 第 7 号溝状遺構出土遺物実測図 (SD07)

第2表 第3・4号溝状遺構出土遺物観察表 (SD03・04)

挿図番号 図版番号	遺構 番号	種別	部位	口径器 高底径 (mm)	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
13-1	SD03	土師器	口縁	—	8.7	口縁部／内外面：ヨコナデ／口唇部：指でつまんでヨコナデ	1～2mm砂粒やや多量 1mm前後赤褐色粒子少量	やや軟	橙色(5YR6/6)	内外面赤彩
11-4		壺		>21						
13-2	SD03	土師器	口縁 ～ 胴部	*210 >159	229.0	外面：口唇部に5mm程度の棒状工具による連続押圧装飾・頸部目の細かいハケメ(縦位)・胴部ハケメ(横位)／内面：口縁部ナデ(横位)・胴部ナデ(横位)後、ヘラナデ(縦位)・下部ナデ	1mm以下～2mm砂粒少量 1～3mm褐色粒子やや多量 1mm以下白色粒子微量 1mm以下雲母微量 1mm以下石英微量	良	外面:灰黄褐色(10YR5/2) 内面:にぶい橙色(7.5YR7/4)	
11-5		甕 (台付甕)		—						
13-3	SD03	土師器	胴部	— >85	138.5	外面：ヘラミガキ(横位・斜位)／内面：ヘラナデ(横位)後、頸部指ナデ(横位)	2mm以下砂粒少量 1mm以下白色粒子微量 1mm以下褐色粒子微量 1mm以下石英微量 1mm以下角閃石微量	良	外面:にぶい橙色(7.5YR4/6) 内面:にぶい褐色(7.5YR6/3) 赤彩部:赤褐色(2.5YR4/6) 黒斑部:黒褐色(2.5Y3/1)	外面赤彩
11-6		壺		最大径 123						
14-1	SD04	弥生土器	胴部 ～ 底部	— >51	82.2	外面：ハケメ(横位・斜位)／内面：ヘラナデ及び指ナデ／外底：ハケメ	1～2mm乳白色粒子やや多量 1～2mm砂粒少量 1～2mm褐色粒子少量 1mm以下石英微量	良	褐灰色(10YR5/1) にぶい黄橙色(10YR7/3)	外面黒斑あり 外底の線木葉痕の可能性あり
12-1		小形壺		54						
14-2	SD04	弥生土器	口縁	*200 >60	43.6	口縁部内外面：ヨコナデ／外面：ハケメ(縦位)後、粗いミガキ／内面：ヘラミガキ(横位)	1mm前後砂粒少量 1mm前後褐色粒子少量 1mm以下石英微量 1mm以下雲母微量	良	にぶい橙色(7.5YR7/4) 赤彩部:明赤褐色(2.5YR5/6)	内外面赤彩
12-2		壺		—						
14-3	SD04	弥生土器	口縁	*250 >45	51.2	口縁部外面：縄文を施し、口唇部と折り返し下部にヘラ状工具によるキザミ押圧／外面：頸部ハケメ(縦位)及びナデ／内面：ヘラナデ(横位)／口唇部：ヨコナデ	1～2mm砂粒少量 1～2mm白色粒子少量 1mm以下褐色粒子微量 1mm以下石英微量 1mm以下雲母微量	良	にぶい橙色(7.5YR7/4) 赤彩残存箇所:橙色(5YR6/6)	内外面赤彩 内面及び口唇部に稜あり
12-3		壺		—						
14-4	SD04	弥生土器	胴部	— >48	36.4	外面：S字状結線文を横位に施文。これより上部はヘラナデ(横位)後、赤彩を施し、これより下部は無節L字斜縄文／内面：ヘラナデ(横位)及びナデ(縦位・横位)	1mm以下赤褐色粒子微量 1mm以下白色粒子微量 1mm以下石英極微量 1mm以下角閃石極微量	良	にぶい橙色(7.5YR6/4) 赤彩部:赤褐色(2.5YR4/6)	外面S字状区画に赤彩
12-4		壺		—						
14-5	SD04	弥生土器	底部	— >29	292.5	外面：ヘラナデ(横位)／内面：ヘラナデ(横位)及びナデ／外底：木葉痕	1～3mm乳白色粒子・赤褐色粒子やや多量 1～4mm砂粒少量 1mm以下雲母極微量 1mm以下石英極微量 1mm以下角閃石極微量	良	淡赤橙色(2.5YR7/4) 内面赤彩部:明赤褐色(2.5YR5/6) 外面赤彩部:にぶい赤褐色(5YR5/4)	内外面赤彩 欠損後漆パレットとして転用カ 外面一部強いミガキ
11-7		壺		97						
14-6	SD04	弥生土器	底部	— >38	563.0	外面：ハケメ(縦位)後、ヨコナデ／内面：ヘラナデ(横位)及びナデ／外底：木葉痕	1～2mm砂粒少量 1～2mm褐色粒子少量 1～2mm乳白色粒子少量 1mm以下雲母微量 1mm以下石英微量	良	にぶい黄橙色(10YR7/3) 赤彩部:にぶい赤褐色(5YR5/4)	外面赤彩
11-8		壺		115						
14-7	SD04	土師器	台部	— >67	68.5	外面：ハケメ(斜位)・甕部との接合部ハケメ及びナデ(縦位・横位)／内面：ヘラナデ(横位)及びナデ・指頭押捺	1mm以下砂粒微量 1mm以下石英微量 1mm以下褐色粒子微量	良	灰黄褐色(10YR5/2) にぶい橙色(7.5YR6/4)	
12-5		台付甕		*94						
14-8	SD04	土師器	台部	— >72	227.0	外面：2種のハケメ工具を使用。台部：ハケメ(縦位)・台部下：ハケメ(横位)・接合部：細いハケメ(縦位)／内面下部：ヨコナデ／その他：ヘラナデ(縦位・横位)／内底：ヘラナデ、ナデ	1～2mm砂粒少量 1～2mm赤褐色粒子少量 1mm以下白色粒子微量 1mm以下雲母微量 1mm以下石英微量	良	橙色(5YR6/6) にぶい橙色(7.5YR6/4)	
12-6		台付甕		104						

第3表 第4・5・7号溝状遺構出土遺物観察表 (SD04・05・07)

挿図番号 図版番号	遺構 番号	種別	部位	口径器高 底径 (mm)	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
14-9	SD04	土師器	口縁 ～ 体部	* 128 >24 —	7.5	内面～外面口縁部：ヨコナデ／外面 下部：ヘラケズリ（横位）	1 mm以下砂粒少量 1 mm以下石英微量 緻密	良	明赤褐色(2.5YR5/6)	内面～外面下部にかけて 赤彩 口唇部に沈線を伴 う鋭い稜あり 古墳時代後期 比企型坏
12-7		坏								
15-10	SD05	弥生土器	口縁	— >30 —	10.9	口縁部：ハケメ（横位・斜位）／口 唇部：ハケメ（横位）／外面：ハケ メ（縦位、一部横位あり）／内面： ハケメ（横位）	1～2 mm乳白色粒子少量 1 mm以下砂粒微量 1 mm以下石英微量 1 mm以下雲母微量 緻密	良	にぶい赤褐色 (2.5YR5/4) 黒褐色(5YR3/1)	内外面赤彩
12-8		壺								
15-11	SD05	弥生土器	腰部 ～ 底部	— >41 51	48.6	外面：ハケメ調整（縦位・斜位） 後、ヨコナデ／内面：ヘラナデ（横 位）及びナデ／底部無調整	1～2 mm褐色粒子やや多 量 1～2 mm赤褐色粒子やや 多量 1 mm以下砂粒微量 1 mm以下雲母微量 1 mm以下石英微量 緻密	良	灰黄褐色(10YR5/2) 赤彩部:にぶい赤褐色 (2.5YR4/4)	内面～外面下部赤彩 内面付着物あり
12-9		壺								
15-12	SD05	土師器	完形	185 94 72	578.5	外面：ハケメ（横位・斜位）／口唇 ～内面口縁：ヨコナデ／内面：ヘラ ミガキ（横位・斜位）／底部ヘラケ ズリ	1～2 mm砂粒少量 1～2 mm褐色粒子少量 1 mm以下雲母微量 1 mm以下石英微量 1 mm以下角閃石微量 やや粗	良	にぶい橙色(7.5YR7/4) 赤彩部:明赤褐色 (2.5YR5/6)	内外面赤彩 壺から鉢への転用
12-10		壺・鉢								
15-13	SD05	土師器	台部	— >68 * 96	139.9	外面臺部下部：ハケメ（縦位）後、 台部と合成／外面接合部：粘土を付 け足し、ハケメ調整（縦位）／外面 台部最下部：ハケメ（横位）／内面 上部：ヘラナデ及びナデ／内面下 半：ハケメ（横位）	1～2 mm乳白色粒子やや 多量 1 mm以下砂粒微量 1 mm以下雲母微量 1 mm以下角閃石微量 やや粗	良	にぶい赤褐色(5YR5/4) にぶい褐色(7.5YR5/4)	
12-11		台付壺								
16-14	SD07	弥生土器	頸部 ～ 底部	— >165 67	529.5	外面：頸部ハケメ（縦位・斜位）、 上半部ハケメ（横位・斜位）、下半 部粗いヘラミガキ（横位）／内面ヘ ラ（ハケメカ）ナデ（縦位・横位）	1～3 mm砂粒やや多量 1～2 mm赤褐色粒子少量 1 mm以下雲母微量 緻密	良	にぶい黄褐色(10YR7/3) 橙色(7.5YR7/6)	内面下部に靱圧痕あり 弥生後期末
12-11		壺								
16-15	SD07	土師器	底部	— >37 * 75	28.7	外面：ハケメ（縦位）、一部ハケメ （縦位）後ナデ／内面：ヘラナデ （横位）／底部：ヘラナデ後、内外 面からの刺突穿孔	1～2 mm白色粒子少量 1～2 mm褐色粒子少量 1 mm以下雲母微量 1 mm以下石英微量 密	良	褐灰色(7.5YR4/1) にぶい黄褐色(10YR6/3)	内面に黒斑あり 底部に 三箇所穿孔、貫通してい ない孔もあり
12-12		甌								

2 土坑

第4号土坑－SK04

遺構（第17図 図版6）

位置：B－1・2グリッド。重複関係：SD04に切られる。平面形・規模：確認範囲から楕円形と推定される。長軸1.56 m、短軸1.28 m、深さ0.37 mである。断面形は逆台形である。主軸方位：N－13°－W。覆土：1箇所を観察した。4層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物（第19図、第4・5表、図版13）

出土状況：本遺構からは85点、1054.0gの遺物が出土した。弥生土器32点、734.6 g、土師器50点、284.7 g、土器1点、6.1 g、自然遺物2点、28.6 gである。1は弥生壺のミニチュアである。器高は8 cm程度だが、折り返し口縁部のLR斜縄文や、肩部のS字状結節、円形浮文など、繊細な装飾が施されている。外面は赤彩されているが、肩部のS字状結節区画内のみ赤彩されていない。

時期

弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭と推定される。

第 8 号土坑－ SK08

遺構（第 17 図）

位置：C－2 グリッド。重複関係：なし。平面形・規模：平面形は楕円形を呈する。長軸 0.77 m、短軸 0.47 m、深さ 0.06 m である。断面形は皿状である。主軸方位：N－69°－E。覆土：1 箇所を観察した。単層で、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構から遺物は出土していない。

時期

覆土から弥生時代後期後半から古墳時代前期と推定される。

第 11 号土坑－ SK11

遺構（第 17 図 図版 7）

位置：C－1・2 グリッド。重複関係：SD14 を切る。平面形・規模：平面形は楕円形を呈する。長軸 0.84 m、短軸 0.62 m、深さ 0.32 m である。断面形は逆台形である。主軸方位：N－73°－W。覆土：1 箇所を観察した。3 層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは 8 点、32.6g の遺物が出土した。土師器 6 点、29.2 g、須恵器 2 点、3.4 g である。

時期

出土遺物から古墳時代前期と推定される。

第 12 号土坑－ SK12

遺構（第 18 図 図版 7）

位置：D－1・2 グリッド。重複関係：なし。平面形・規模：北側が調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。長軸 1.27 m、短軸 0.40 m 以上、深さ 0.23 m である。断面形は逆台形である。主軸方位：不明。覆土：北壁面で観察した。単層で、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構から遺物は出土していない。

時期

覆土から古墳時代前期と推定される。

第 13 号土坑－ SK13

遺構（第 18 図 図版 7）

位置：C－3 グリッド。重複関係：なし。平面形・規模：平面形は楕円形を呈する。長軸 0.69 m、短軸 0.58 m、深さ 0.18 m である。断面形は逆台形である。主軸方位：N－9°－W。覆土：1 箇所を観察した。単層で、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは土師器 4 点、19.1g が出土した。

時期

出土遺物から、古墳時代前期と推定される。

第 23 号土坑－ SK23

遺構（第 18 図 図版 9）

位置：B・C－3 グリッド。重複関係：南側が調査区外へ延びる。平面形・規模：平面形は残存範囲から不整形と推定される。長軸 0.65 m、短軸 0.29 m、深さ 0.09 m である。断面形は逆台形である。主軸方位：不明。覆土：西壁面で覆土を観察した。単層で自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは土師器 3 点、4.4g が出土した。

時期

出土遺物から弥生時代後期後半から古墳時代前期と考えられる。

第 27 号土坑－ SK27

遺構（第 18 図 図版 10）

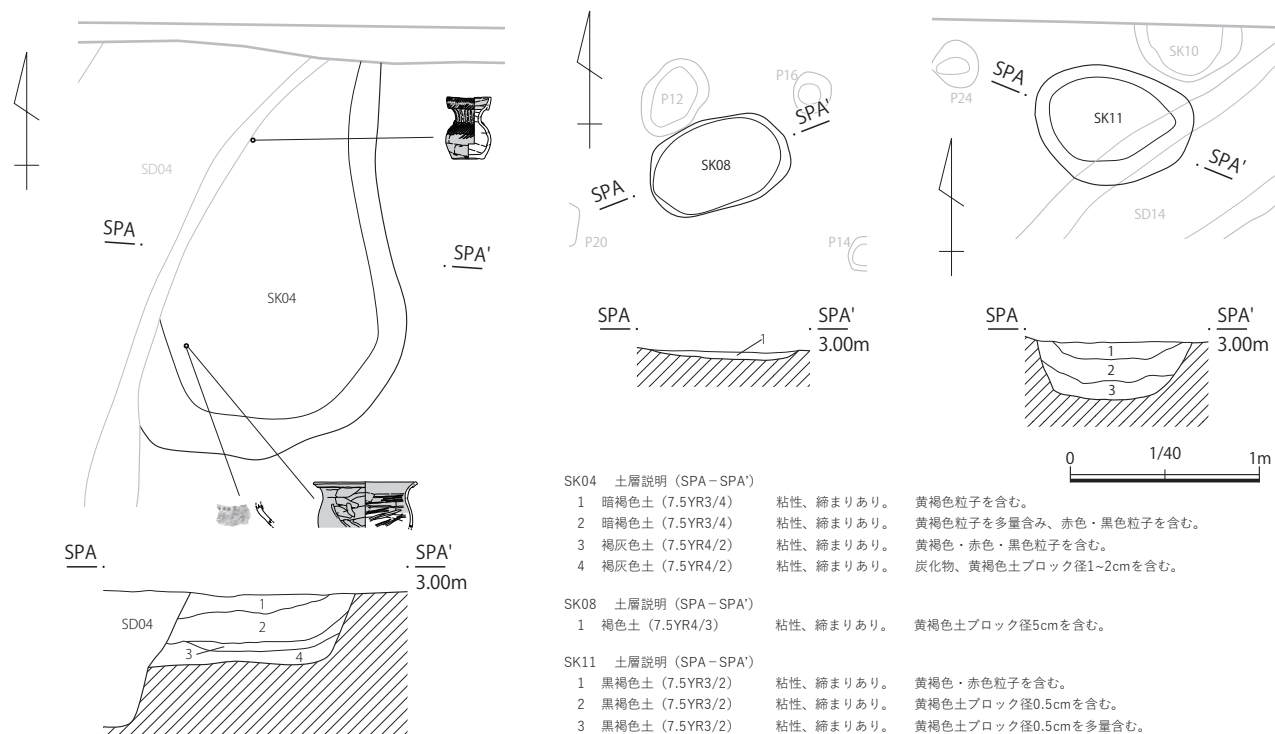
位置：C－3 グリッド。重複関係：SD01 に切られる。平面形・規模：平面形は楕円形を呈する。長軸 0.42 m、短軸 0.39 m、深さ 0.21 m である。断面形は逆台形である。主軸方位：不明。覆土：1 箇所を観察した。単層で、自然堆積であると考えられる。

遺物

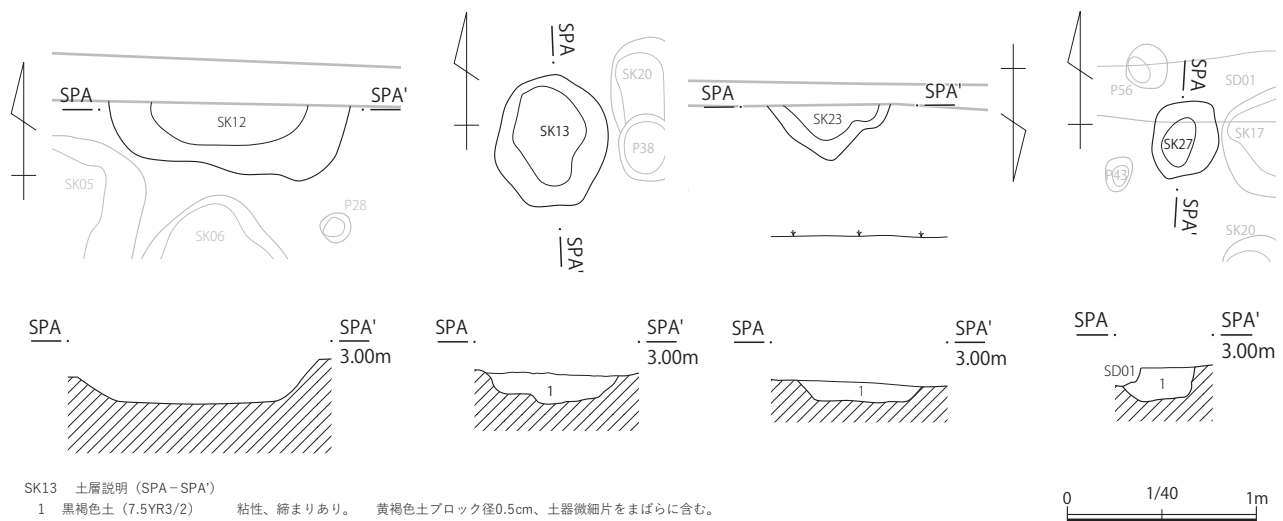
出土状況：本遺構から遺物は出土していない。

時期

覆土から、弥生時代後期後半から古墳時代前期と考えられる。

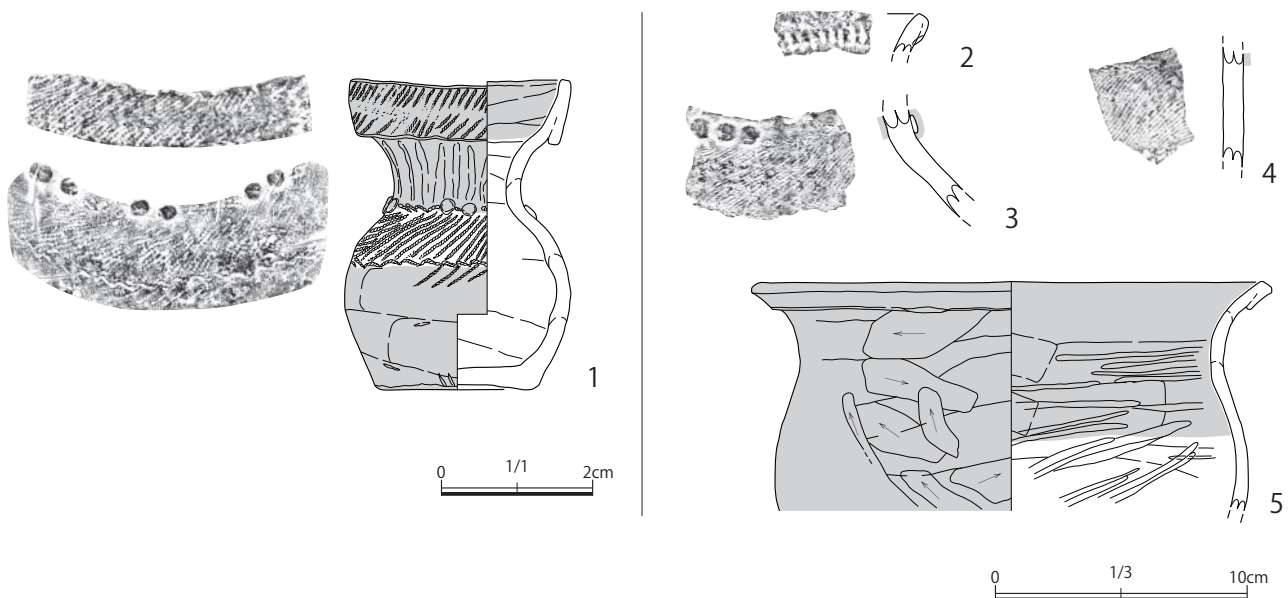


第 17 図 第 4・8・11 号土坑実測図 (SK04・08・11)



- SK13 土層説明 (SPA-SPA')
- 1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性、締まりあり。黄褐色土ブロック径0.5cm、土器微細片をまばらに含む。
- SK23 土層説明 (SPA-SPA')
- 1 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性なし、締まりあり。黒色土ブロック径1cmを中量含む。
- SK27 土層説明 (SPA-SPA')
- 1 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性なし、締まりあり。黄褐色土ブロック径0.5~1cm、黒色土ブロック径1cmを多量含む。

第18図 第12・13・23・27号土坑実測図 (SK12・13・23・27)



第19図 第4号土坑出土遺物実測図 (SK04)

第4表 第4号土坑出土遺物観察表 (SK04) (1)

挿図番号 図版番号	遺構 番号	種別	部位	口径 器高 底径 (mm)	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
19-1	SK04	弥生土器	完形	58	125.2	外面口縁部：LR斜縄文／外面頸部 ヘラミガキ（縦位）／外面肩部：S 字状結節を横位に2条施文。上の1 条を施文後、径4mm前後の円形浮文 2単位4方向に施す。S字状結節区 画内にLR斜縄文充填／外面胴部： ヘラナデ（横位）・ヨコナデ・粗い ヘラミガキ・赤彩／外底：粗いヘラ ミガキ／内面：ヘラナデ（横位）・ ヨコナデ	1~2mm赤色粒子少量 1~2mm白色粒子少量 1~2mm砂粒少量 1mm以下石英微量 1mm以下雲母微量 1mm以下角閃石微量	良	にぶい橙色(7.5YR6/4) 赤彩部:明赤褐色 (2.5YR5/6)	外面赤彩
13-4				ミニチュア (壺)						

第5表 第4号土坑出土遺物観察表 (SK04) (2)

挿図番号 図版番号	遺構 番号	種別	部位	口径 器高 底径 (mm)	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
19-2	SK04	弥生土器	口縁	—	7.1	口縁下部をキザミ施文で押圧	1～2mm赤褐色粒子やや多量 1mm以下雲母微量 1mm以下石英微量 1mm以下砂粒微量	良	にぶい橙色(7.5YR6/4)	赤彩不明 器面摩滅
13-5		壺		>16						
19-3	SK04	弥生土器	頸部 ～ 肩部	—	50.9	外面：横位縄押しS字状線、その上に径7mm前後の粘土貼り付け連続装飾・肩部縄文／内面：ヘラナデ(横位)	1mm前後砂粒少量 1mm前後赤色粒子少量 1mm以下石英微量	良	にぶい橙色(7.5YR6/4) 赤彩部:赤褐色 (2.5YR4/6)	内外面頸部赤彩
13-6		壺		>43						
19-4	SK04	弥生土器	胴部	—	23.0	外面：S字結節区画内縄文施文・上部ヘラミガキ(横位)／内面：ヘラナデ(縦位・横位)及び指ナデ	1mm以下赤色粒子微量 1mm以下白色粒子微量 1mm以下雲母微量 1mm以下角閃石微量	良	にぶい褐色(7.5YR5/3) 黒斑部:黒色(7.5YR2/1) にぶい赤褐色 (2.5YR4/3)	外面赤彩 外面黒斑あり
13-7		壺		>48						
19-5	SK04	弥生土器	口縁 ～ 胴部	*200	111.1	口縁部～内面頸部：ヨコナデ／外面：ヘラケズリ(縦位・横位)／内面：ヘラナデ(横位)後、粗いヘラミガキ(横位)	1～2mm砂粒少量 1～2mm褐色粒子少量 1mm以下石英微量 1mm以下雲母微量 1mm以下角閃石微量	良	にぶい橙色(7.5YR6/4) 赤彩部:赤褐色 (2.5YR4/6) 黒斑:(N1.5/0)	内面黒斑あり
13-8		広口壺		>91						

第2節 平安時代から中世

1 溝状遺構

第1号溝状遺構－SD01

遺構(第20図 図版2)

位置:B～E－2・3グリッド。重複関係:SK14、SK17、SK18、P37、P42に切られ、SD10、SD14、SK19、SK24、SK25、SK26、SK27、SK28、SK29、P56、P57、P58を切る。平面形・規模:東西にほぼ直線状に検出され、東側は調査区外へ延びる。長さは11.43m、上端幅0.55～0.86m、下端幅0.13～0.28m、確認面からの深さは0.37m前後である。断面形はV字形を呈する。主軸方位:N－90°－W。覆土:3箇所を覆土を観察し、2箇所を図示した。3層に分層し、自然堆積であると考えられる。遺物(第22図、第6表、図版11)

出土状況:本遺構からは106点、369.0gの遺物が出土した。弥生土器4点、28.5g、土師器72点、185.4g、須恵器23点、86.6g、中世陶器3点、52.5g、石製品1点、5.1g、瀬戸・美濃系陶器2点、3.1g、自然遺物1点、7.8gである。これらのうち、3箇所を図示した。1は須恵器の甕である。胎土に白色粒子が含まれていることから、産地は東金子であると考えられる。3は丸靱である。灰白色～乳白色を呈している。石材は玉髓と言われる粗製の瑠璃でできている(石材については、第4章自然科学分析を参照)。欠損しているため、残存しているのは半分以下である。表面は鏡面研磨が施され光沢を有するが、側面・裏面には光沢がなく、研磨の程度を部位によって変えていることが窺える。裏面には横並びに2孔一対の留め穴が開いており、完形であれば2箇所、計4孔開いているものと推定される。この穴は裏面から入り裏面から出る「潜り穴式」になっている。

時期

出土遺物から、中世と推定される。

第2号溝状遺構－SD02

遺構（第21図）

位置：A－1・2グリッド。重複関係：攪乱に切られ、SD05、P08を切る。平面形・規模：西側が調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。長さ1.47 m、上端幅0.20～1.22 m、下端幅0.15～1.19 m、確認面からの深さは0.08 m前後である。断面形は皿状を呈する。主軸方位：N－59°－W。覆土：1箇所を観察した。単層で自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは11点、24.4 gの遺物が出土した。土師器7点、12.9 g、須恵器1点、1.1 g、中世陶器1点、4.8 g、土器2点、5.6 gである。

時期

出土遺物から、平安時代から中世と推定される。

第9号溝状遺構－SD09

遺構（第21図 図版4）

位置：D－1・2、E－2グリッド。重複関係：なし。平面形・規模：北側が調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。長さ2.20 m、上端幅0.72～1.06 m、下端幅0.58～0.96 m、確認面からの深さは0.14～0.18 mである。断面形は逆台形を呈する。主軸方位：N－9°－W。覆土：1箇所を覆土を観察した。3層に分層し、自然堆積と思われる。

遺物（第23図、第6表、図版12）

出土状況：本遺構からは土師器16点、117.0 gが出土した。これらのうち、1点を図示した。

時期

出土遺物から、平安時代と推定される。

第11号溝状遺構－SD11

遺構（第21図 図版4）

位置：E－1グリッド。重複関係：SK07に切られ、SD07、SD08を切る。平面形・規模：確認範囲が狭小であるため、全体の形状は不明である。長さ1.72 m、上端幅0.25～0.35 m、下端幅0.13～0.19 m、確認面からの深さは0.19～0.34 mである。断面形はU字形を呈する。主軸方位：N－53°－E。覆土：1箇所を覆土を観察した。2層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構から遺物は出土していない。

時期

覆土及び重複関係から、平安時代から中世頃と推定される。

第12号溝状遺構－SD12

遺構（第21図 図版4）

位置：D・E－3グリッド。重複関係：SD13を切る。平面形・規模：規模：南東側の大半が調査区外へと延び、確認範囲が狭小であるため、全体の形状は不明であ

る。長さ 0.93 m、上端幅 0.57 m、下端幅 0.34 m、確認面からの深さは 0.46 m 前後である。断面形は逆台形を呈すると思われる。

主軸方位：不明。覆土：東壁面で覆土を観察した。2層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは土師器 2 点、36.7 g が出土した。

時期

覆土から、平安時代と推定されるが、弥生時代後期後半から古墳時代前期の可能性もある。

第 13 号溝状遺構－SD13

遺構（第 21 図 図版 4）

位置：E－3 グリッド。重複関係：SD12 に切られる。

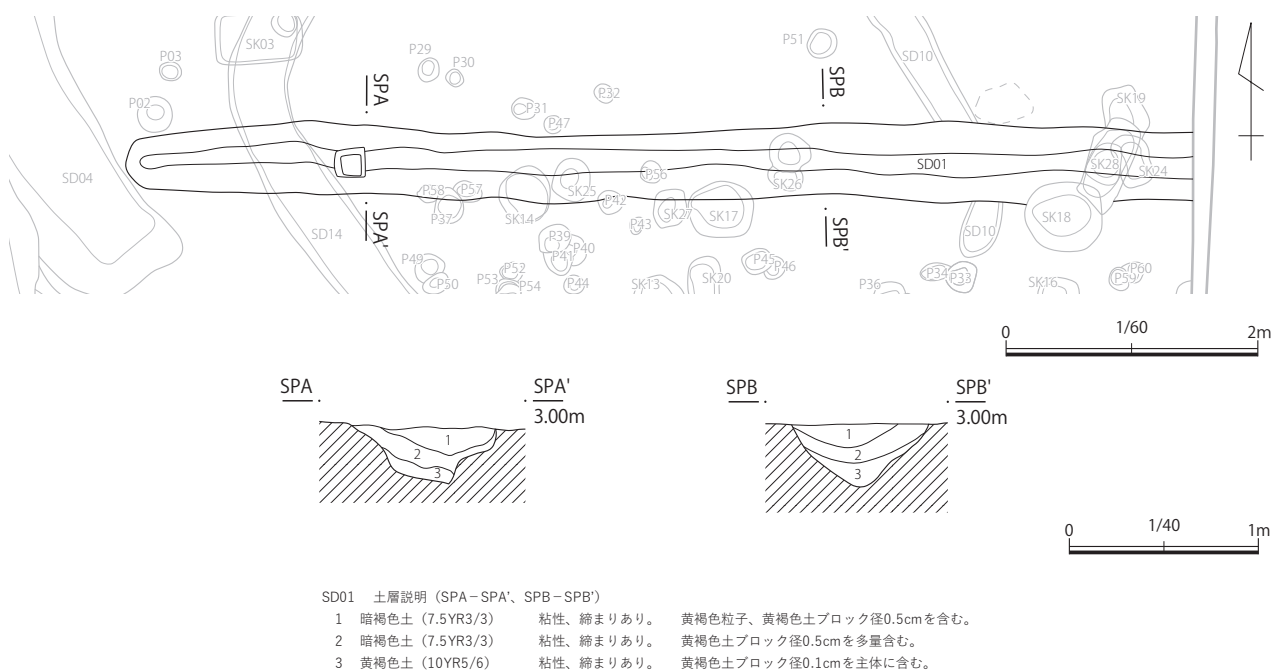
平面形・規模：東壁面にて一部分を検出し、確認範囲が狭小であるため全体の形状は不明である。長軸、短軸ともに 0.90 m、確認面からの深さは 0.27 m 前後である。下端はコーナー部分のため計測不可。断面形は逆台形を呈すると思われる。主軸方位：不明。覆土：東壁面で覆土を観察した。単層で、自然堆積であると考えられる。

遺物（第 23 図、第 6 表、図版 12）

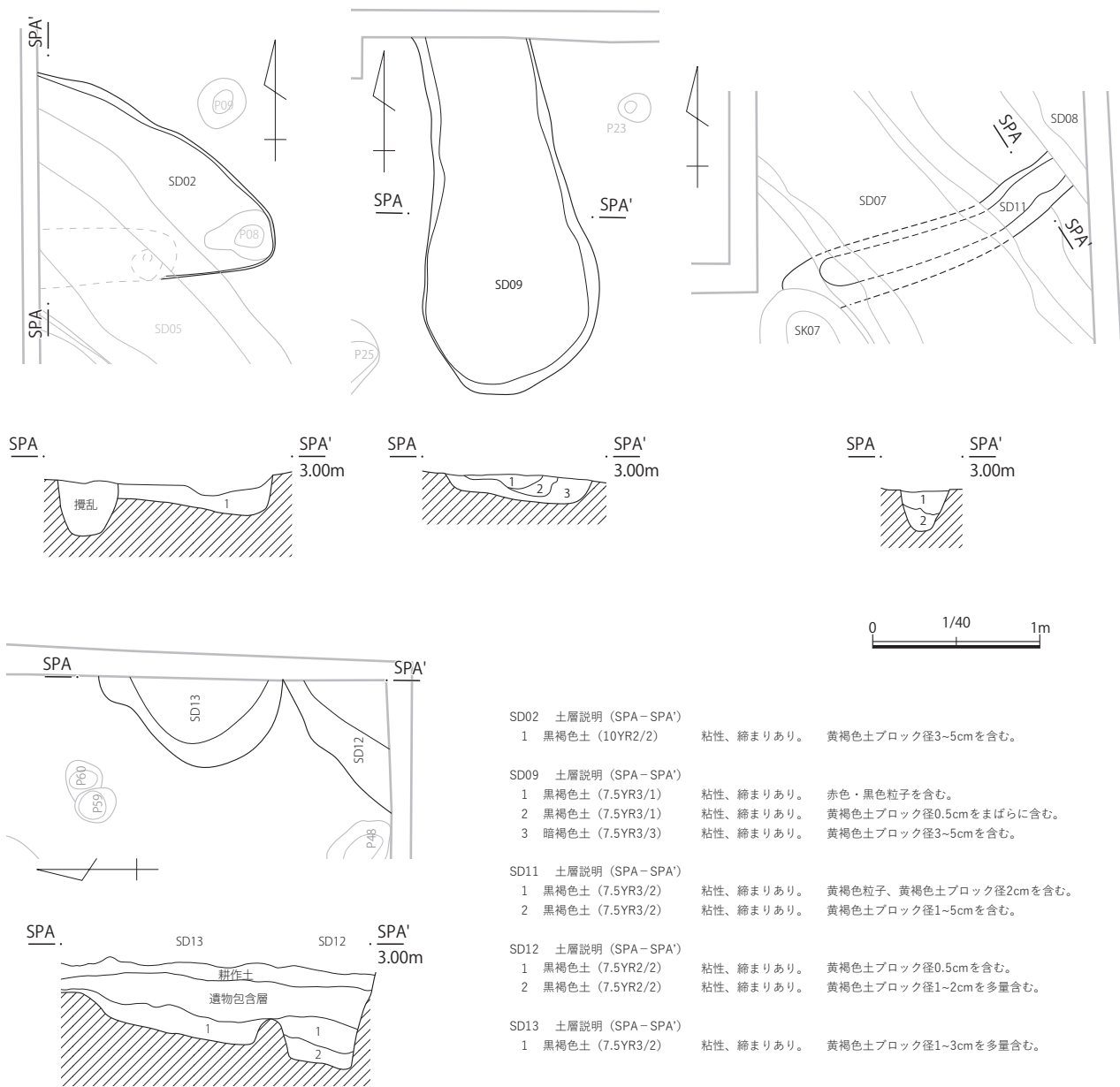
出土状況：本遺構からは土師器 2 点、42.8 g が出土した。これらのうち、1 点を図示した。

時期

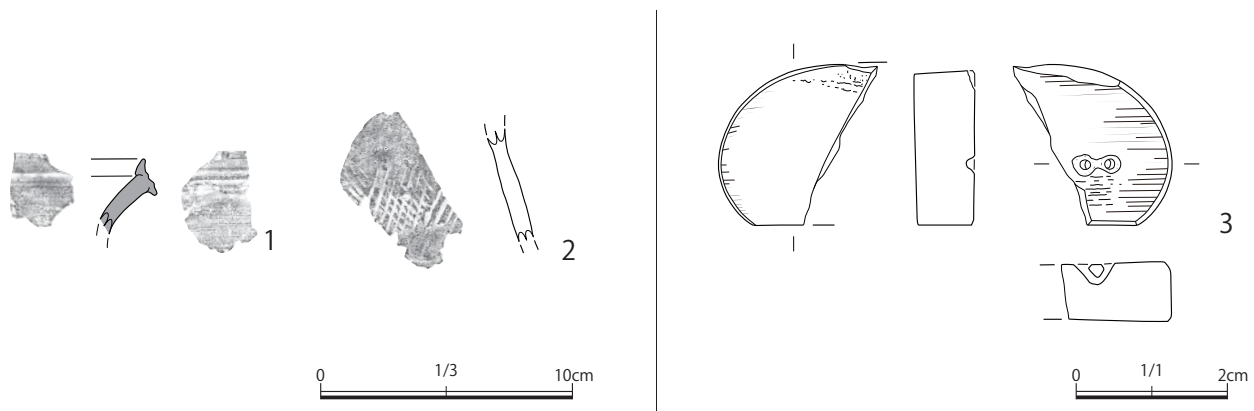
覆土から、平安時代と推定されるが、弥生時代後期後半から古墳時代前期の可能性もある。



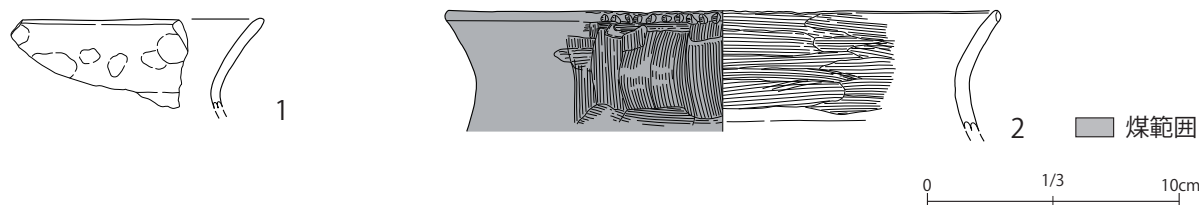
第 20 図 第 1 号溝状遺構実測図 (SD01)



第21図 第2・9・11・12・13号溝状遺構実測図 (SD02・09・11・12・13)



第22図 第1号溝状遺構出土遺物実測図 (SD01)



第23図 第9・13号溝状遺構出土遺物実測図 (SD09・13)

第6表 第1・9・13号溝状遺構出土遺物観察表 (SD01・09・13)

挿図番号 図版番号	遺構 番号	種別	部位	口径器 高底径 (mm)	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
22-1	SD01	須恵器	口縁部	—	9.2	ロクロ成形/口唇部貼り付け	1mm以下白色粒子少量 1mm前後淡褐色粒子微量	良	灰色(N5/0)	東金子産
11-1		甕		>31						
22-2	SD01	炆器	胴部	>45	30.6	輪積み/回転成形/外面:タタキ/ 内面:ヘラナデ	1mm前後白色粒子微量	良	外面:灰褐色(7.5YR4/2) 内面:褐灰色(10YR5/1)	中世陶器
11-2		甕		—						
22-3	SD01	石製品	—	>21.0	5.1	—	—	—	灰白色(N8/)	玉髓
11-3		石帯丸柄		>21.0						
23-1	SD09	土師器	口縁	*220	15.3	内外面:ヨコナデ/外面:指ナデ痕 多く残存	1mm以下雲母やや多量 1mm以下角閃石微量	良	橙色(7.5YR6/6)	武蔵型甕
12-13		甕		>35						
23-2	SD13	土師器	口縁	*218	34.0	口唇部:3~4mm程度のハケメ工具 による連続押圧のキザミ装飾/外 面:口唇部下ハケメ(横位)・頸部 ハケメ(縦位)・肩部ハケメ(横 位)/内面:ハケメ(横位)・頸部 下部ヘラナデ(横位)	1~2mm乳白色粒子少量 1mm以下雲母微量 1mm以下赤色粒子微量	良	にぶい黄橙色(10YR6/4) 灰黄褐色(10YR4/2)	外面全体にスス付着 キ ザミの中にハケメ痕あり 弥生時代後期後半から古 墳時代前期初頭
12-14		甕		>48						

2 井戸跡

第15号土坑—SK15^{註1}

遺構 (第24図 図版8)

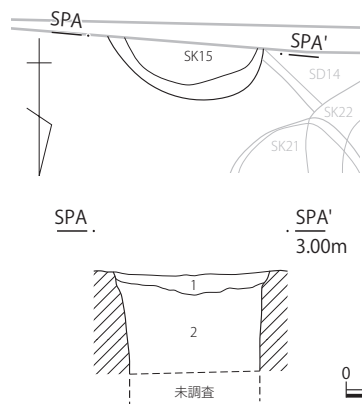
位置:C-3グリッド。重複関係:SD14に切られる。平面形・規模:南側が調査区外へ延びるため全体の平面形は不明であるが、残存範囲から円形を呈すると考えられる。長軸0.82m、短軸0.29m以上である。深さは遺構確認面から0.54mまで調査を行った。なお、含水層までの断ち割り調査は隣接地への安全確保のため未実施である。断面形は円筒形である。主軸方位:円形のため不明。覆土:1箇所を観察した。2層に分層し、混入物や堆積状況から人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物 (第25図、第7表、図版13)

出土状況:本遺構からは21点、134.2gの遺物が出土した。弥生土器3点、17.0g、土師器15点、66.2g、須恵器2点、39.8g、産地不明の陶器1点、11.2gが出土している。

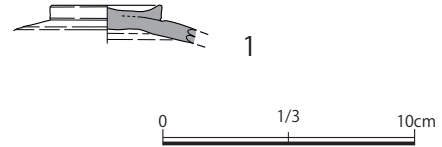
時期

出土遺物から、平安時代から中世と推定される。



SK15 土層説明 (SPA-SPA')

- 1 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性、締まりあり。黄褐色粒子、黄褐色土ブロック径0.5cm、土器微細片、赤色土ブロック径0.5cmを含む。
- 2 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性、締まりあり。黄褐色土ブロック径0.5cm、赤色土ブロック径0.5cmを含む。



第 24 図 第 15 号土坑実測図 (SK15)

第 25 図 第 15 号土坑出土遺物実測図 (SK15)

第 7 表 第 15 号土坑出土遺物観察表 (SK15)

挿図番号	遺構番号	種別	部位	口径器高底径 (mm)	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
25-1	SK15	須恵器	摘み部	— >15	37.1	ロクロ成形/つまみ部貼り付け/回転ナデ	1~2mm砂粒少量 1~2mmチャート少量 1mm以下白色針状物質少量	良	灰色(N4/0)	南比企産 銅鏡蓋模倣
13-10		蓋		44						

3 土坑

第 3 号土坑 - SK03

遺構 (第 26 図 図版 5)

位置：B-2 グリッド。重複関係：SD14、P11 を切る。平面形・規模：平面形は長方形で、長軸 0.93 m、短軸 0.57 m、深さ 0.07 m である。断面形は皿状である。主軸方位：N-88°-E。覆土：1 箇所を観察した。2 層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは 5 点、7.0g の遺物が出土した。土師器 4 点 4.8 g、須恵器 1 点 2.2 g である。

時期

出土遺物から、平安時代と推定される。

第 5 号土坑 - SK05

遺構 (第 26 図 図版 6)

位置：C・D-1・2 グリッド。重複関係：SK06、P21、P22 を切る。平面形・規模：平面形は不整形を呈する。長軸 1.41 m、短軸 1.08 m、深さ 0.25 m である。断面形は逆台形である。また、底面には凹凸がみられ、植栽痕とも考えられる。主軸方位：N-3°-E。覆土：1 箇所を観察した。4 層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構から遺物は出土していない。

時期

覆土から、中世以降と考えられる。

第 6 号土坑－SK06

遺構（第 26 図 図版 6）

位置：D－2 グリッド。重複関係：SK05 に切られ、SD10 を切る。平面形・規模：平面形は不整形を呈する。長軸 1.59 m、短軸 1.28 m、深さ 0.21 m である。断面形は逆台形である。主軸方位：N－32°－W。覆土：1 箇所を観察した。4 層に分層した。遺物（第 28 図、第 8 表、図版 13）

出土状況：本遺構からは 31 点、573.0g の遺物が出土した。土師器が 24 点、78.2 g、須恵器が 5 点、39.4 g、炆器が 1 点、419.0 g、焼礫が 1 点、36.4 g 出土している。これらのうち、1 点を図示した。1 は捏鉢であり、中世前期の所産と考えられる。

時期

覆土及び出土遺物から、平安時代から中世前期と考えられる。

第 9 号土坑－SK09

遺構（第 27 図 図版 7）

位置：C・D－2 グリッド。重複関係：P13 を切る。平面形・規模：平面形は楕円形を呈する。長軸 0.47 m、短軸 0.42 m、深さ 0.31 m である。断面形は U 字形で、西側に 1 段のテラスを伴う。主軸方位：不明。覆土：1 箇所を観察した。3 層に分層し、人為的な埋め戻しであると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは 6 点、45.8g の遺物が出土した。土師器 4 点、7.0 g、須恵器 1 点、5.0 g、瀬戸・美濃系の陶器 1 点、33.8 g である。

時期

遺物から、中世から江戸時代と推定される。

第 18 号土坑－SK18

遺構（第 27 図 図版 8）

位置：D－3 グリッド。重複関係：SD01、SK28 を切る。平面形・規模：平面形は楕円形を呈する。長軸 0.93 m、短軸 0.74 m、深さ 0.33 m である。断面形は楕円形である。主軸方位：N－85°－W。覆土：1 箇所を観察した。単層で、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは 6 点、25.6g の遺物が出土した。土師器が 4 点、7.6 g、中世陶器 2 点、18.0 g である。

時期

出土遺物から、中世と推定される。

第 19 号土坑－SK19

遺構（第 27 図 図版 8）

位置：D・E－2 グリッド。重複関係：SK28 に切られる。平面形・規模：平面形は不整長方形を呈する。長軸 0.57 m 以上、短軸 0.39 m、深さ 0.23 m である。断面形は U 字形である。主軸方位：N－18°－W。覆土：1 箇所を観察した。3 層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは4点、9.7gの遺物が出土した。土師器3点、8.6g、須恵器1点、1.1gである。

時期

出土遺物から、平安時代と推定される。

第24号土坑－SK24

遺構（第27図 図版9）

位置：D・E－2・3グリッド。重複関係：SD01、SK28に切られる。平面形・規模：平面形は楕円形を呈する。長軸0.56m、短軸0.36m、深さ0.43mである。断面形は皿形である。主軸方位：N－18°－W。覆土：1箇所を観察した。3層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは3点、58.8gの遺物が出土した。土師器2点、7.4g、中世陶器1点、51.4gである。

時期

出土遺物から、平安時代から中世と考えられる。

第25号土坑－SK25

遺構（第27図 図版9）

位置：C－2・3グリッド。重複関係：SD01に切られる。平面形・規模：平面形は不整形を呈する。長軸0.46m、短軸0.41m、深さ0.52mである。断面形はU字形である。主軸方位：円形のため不明。覆土：1箇所を観察した。3層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは土師器2点、11.5gが出土した。

時期

出土遺物及び覆土から、平安時代から中世と考えられる。

第26号土坑－SK26

遺構（第27図 図版9）

位置：D－2・3グリッド。重複関係：SD01に切られる。平面形・規模：平面形は不整形を呈する。長軸0.61m、短軸0.47m、深さ0.41mである。断面形はU字形で、南側に1段のテラスを伴う。主軸方位：N－12°－E。覆土：1箇所を観察した。2層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは土師器2点、3.3gが出土した。

時期

出土遺物及び覆土から、平安時代から中世と考えられる。

第 28 号土坑－ SK28

遺構（第 27 図 図版 10）

位置：D・E－2・3 グリッド。重複関係：SD01、SK24 に切られ、SK19 を切る。
平面形・規模：平面形は不整長方形を呈する。長軸 1.04 m、短軸 0.48 m、深さ 0.50 m である。断面形は逆台形である。主軸方位：N－25°－E。覆土：1 箇所を観察した。3 層に分層し、人為的な埋戻しであると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構から遺物は出土していない。

時期

覆土から、平安時代から中世と考えられる。

第 30 号土坑－ SK30

遺構（第 27 図 図版 10）

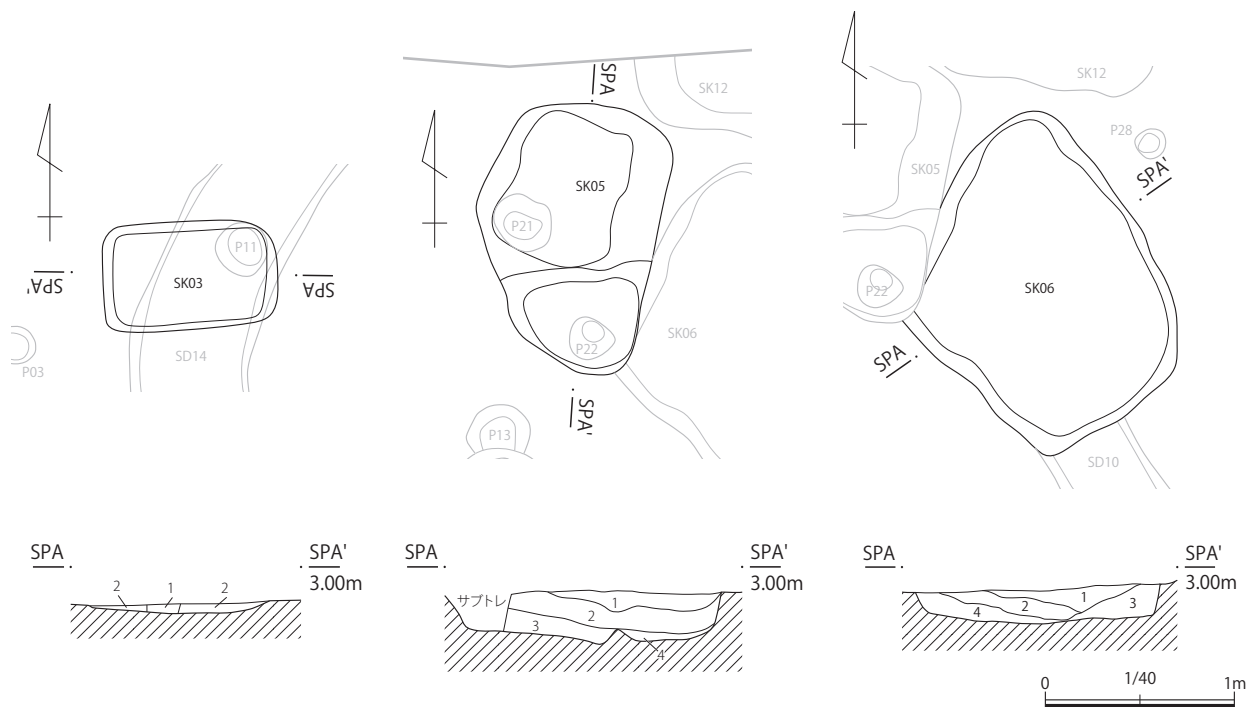
位置：A－3 グリッド。重複関係：なし。平面形・規模：西側が調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。長軸 0.85 m、短軸 0.55 m 以上、深さ 0.11 m である。断面形は皿形である。主軸方位：不明。覆土：1 箇所を観察した。単層で、自然堆積であると考えられる。

遺物

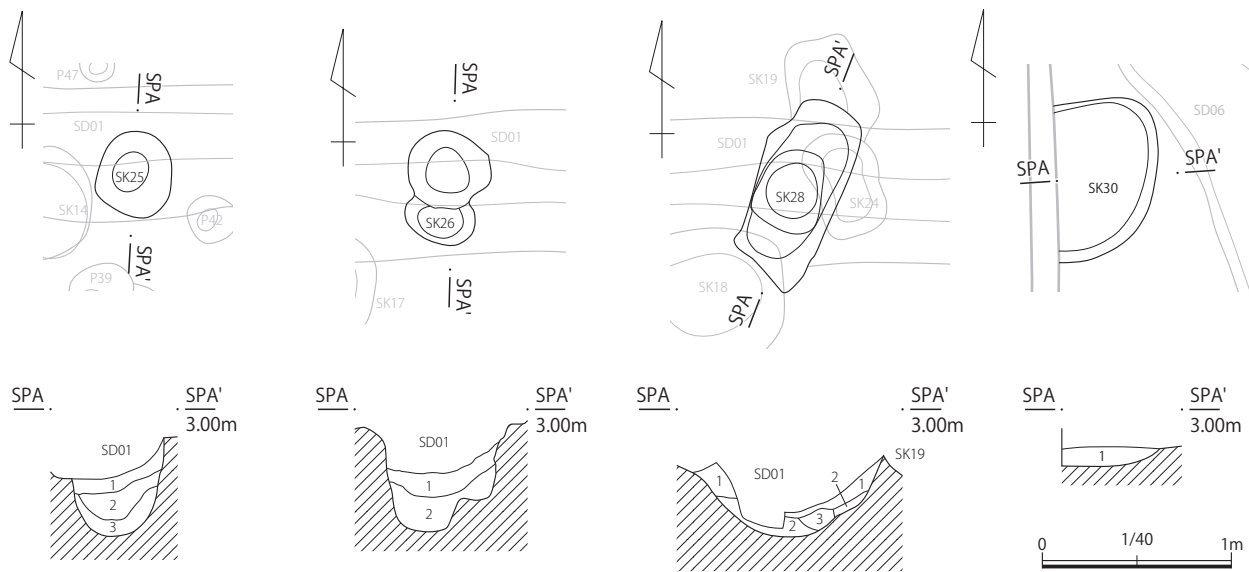
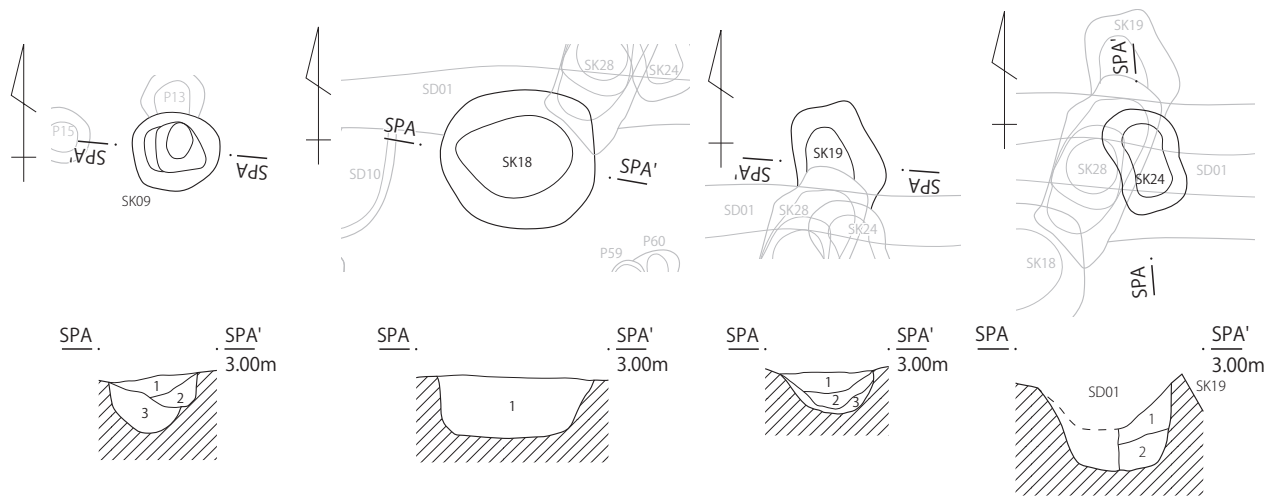
出土状況：本遺構からは 12 点、39.1g の遺物が出土した。土師器 11 点、38.0 g、須恵器 1 点、1.1 g である。

時期

出土遺物から、平安時代と推定される。



第 26 図 第 3・5・6 号土坑実測図 (SK03・05・06)



SK03 土層説明 (SPA-SPA')

- | | | |
|-------------------|-----------|---------------|
| 1 暗褐色土 (7.5YR3/3) | 粘性、締まりあり。 | 地山粒子を含む。 |
| 2 灰褐色土 (5YR4/2) | 粘性、締まりあり。 | 砂粒、地山粒子を多量含む。 |

SK05 土層説明 (SPA-SPA')

- | | | |
|-------------------|-----------|--------------------------------------|
| 1 暗褐色土 (7.5YR3/3) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径1cm、赤色粒子、土器片を含み、炭化物粒子を多量含む。 |
| 2 暗褐色土 (7.5YR3/3) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径1cmをまばらに含み、赤色粒子、炭化物粒子を含む。 |
| 3 暗褐色土 (7.5YR3/3) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径黄褐色土ブロック径2cmを含む。 |
| 4 暗褐色土 (7.5YR3/3) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径3cmを多量含む。 |

SK06 土層説明 (SPA-SPA')

- | | | |
|-------------------|-----------|--------------------------|
| 1 黒褐色土 (7.5YR2/2) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色・赤色・黒色粒子を含む。 |
| 2 黒褐色土 (7.5YR2/2) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色・赤色・黒色粒子を多量含む。 |
| 3 黒褐色土 (7.5YR2/2) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径0.5~1cmをまばらに含む。 |
| 4 黒褐色土 (7.5YR2/2) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径0.5~1cmを多量含む。 |

SK09 土層説明 (SPA-SPA')

- | | | |
|------------------|-----------|--------------------|
| 1 褐色土 (7.5YR4/3) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径1~2cmを含む。 |
| 2 褐色土 (7.5YR4/3) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色粒子を含む。 |
| 3 褐色土 (7.5YR4/3) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径1cmを多量含む。 |

SK18 土層説明 (SPA-SPA')

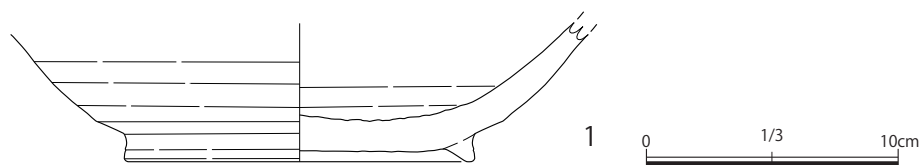
- | | | |
|------------------|-----------|--------------------|
| 1 褐色土 (7.5YR4/3) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径1cmを多量含む。 |
|------------------|-----------|--------------------|

SK19 土層説明 (SPA-SPA')

- | | | |
|-------------------|-----------|--|
| 1 黒褐色土 (7.5YR3/1) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径0.5cm、炭化物ブロック径0.5cm、土器微細片を含む。 |
| 2 黒褐色土 (7.5YR3/1) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径1cm、炭化物ブロック径1cmをまばらに含む。 |
| 3 黒褐色土 (7.5YR3/1) | 粘性、締まりあり。 | 黄褐色土ブロック径1cmを含む。 |

第27図 第9・18・19・24・25・26・28・30号土坑実測図 (SK09・18・19・24・25・26・28・30)

- SK24 土層説明 (SPA-SPA)
 1 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性、締まりあり。 黄褐色粒子、黄褐色土ブロック径0.5cmを少量含む。
 2 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性、締まりあり。 黄褐色土ブロック径1~2cmを含む。
- SK25 土層説明 (SPA-SPA)
 1 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性、締まりあり。 黄褐色粒子、黄褐色土ブロック径0.5cmを含み、土器微細片を含む。
 2 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性、締まりあり。 黄褐色・黒色粒子を含む。
 3 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性、締まりあり。 黄褐色土ブロック径0.5~1cmを多量含む。
- SK26 土層説明 (SPA-SPA)
 1 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性、締まりあり。 黄褐色土・炭化物ブロック径0.5cmをまばらに含む。
 2 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性、締まりあり。 黄褐色土ブロック径1cmを多量含む。
- SK28 土層説明 (SPA-SPA)
 1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性、締まりあり。 黄褐色・黒色・橙色粒子を含み、土器微細片を含む。
 2 黒色土 (7.5YR2/1) 粘性、締まりあり。 黄褐色土、黄褐色粒子を多量含む。
 3 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性、締まりあり。 黄褐色土ブロック径3~5cmが集中堆積する。
- SK30 土層説明 (SPA-SPA)
 1 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性、締まりあり。 黄褐色粒子含む。



第 28 図 第 6 号土坑遺物実測図 (SK06)

第 8 表 第 6 号土坑出土遺物観察表 (SK06)

挿図番号 図版番号	遺構 番号	種別	部位	口径 器高 底径 (mm)	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
28-1	SK06	炆器	腰部 ~	— >65	419.0	ロクロ成形/高台貼り付け前に底部 付近回転ヘラケズリ、高台部回転ナ デ	1~2mm白色粒子少量 1~2mm砂粒少量 1~2mm石英少量 1~2mmチャート少量	良	褐灰色(10YR5/1)	山茶碗窯系 中世前期
13-9		捏鉢	底部	138						

第 3 節 近世

1 井戸跡

第 2 号土坑—SK02^{註 1}

遺構 (第 29 図 図版 5)

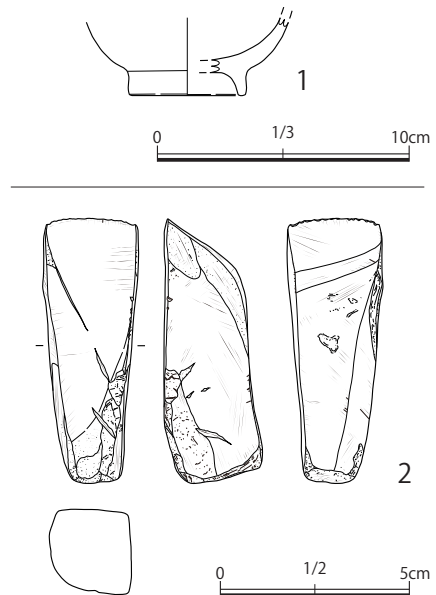
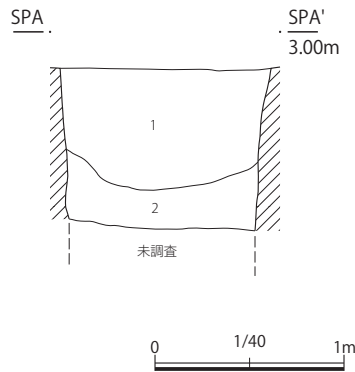
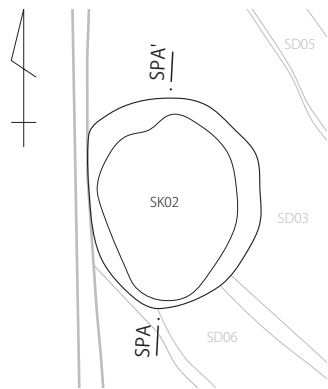
位置：A-2 グリッド。重複関係：SD03、SD06 を切る。平面形・規模：平面形はやや歪な円形で、長軸 1.11 m、短軸 0.91 m である。深さは遺構確認面から 0.91 m まで調査を行った。なお、含水層までの断ち割り調査は隣接地への安全確保のため未実施である。断面形は円筒形を呈し、壁面は垂直である。主軸方位：円形のため不明。覆土：1 箇所を観察した。2 層に分層し、混入物や堆積状況から人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物 (第 30 図、第 9 表、図版 13)

出土状況：本遺構からは 97 点、1059.5 g の遺物が出土した。土師器 21 点、92.4 g、須恵器 5 点、22.7 g、中世陶器 1 点、9.1 g、磁器 9 点、48.4g、陶器 15 点、121.4 g、炆器 5 点、42.6g、土器 14 点、111.7 g、石製品 1 点、183.2 g、礫 26 点、428.0 g である。

時期

土遺物のうち江戸時代の遺物が最も主体的であるため、本遺構は江戸時代に機能していたものと考えられる。肥前系陶器の銅緑釉輪剥皿や、呉器手碗が出土していることから、廃絶年代は 17 世紀後葉から 18 世紀前葉と推定される。また、出土遺物のうち土師器、須恵器、中世陶器は SD03、SD06 からの流れ込みと推定される。



SK02 土層説明 (SPA-SPA')

- 1 灰褐色土 (7.5YR4/2) 粘性、締まりあり。 黄褐色・赤色粒子、黄褐色土ブロック径1cmをまばらに含む。
- 2 灰褐色土 (7.5YR4/2) 粘性、締まりあり。 黄褐色・赤色粒子、黄褐色土ブロック径2cmをまばらに含む。

第29図 第2号土坑実測図 (SK02)

第30図 第2号土坑出土遺物実測図 (SK02)

第9表 第2号土坑出土遺物観察表 (SK02)

挿図番号 図版番号	遺構 番号	種別	部位	口径 器高 底径	重量 g	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
30-1	SK02	磁器	腰部	—	31.4	ロクロ成形	緻密	良	白色	肥前系
13-2		小碗	底部	>31 *46						
30-2	SK02	石製品	完形	長さ105 幅38 厚さ39	183.5	—	—	—	灰色(7.5Y6/1)	凝灰岩カ
13-3		摺石 砥石								

2 土坑

第1号土坑 - SK01

遺構 (第31図 図版5)

位置:A-3グリッド。重複関係:SD06と重複する。平面形・規模:平面形は円形で、長軸0.62m、短軸0.60m、深さ0.14mである。断面形は皿状である。主軸方位:円形のため不明。覆土:1箇所を観察した。単層で、自然堆積であると考えられる。遺物(第32図、第10表、図版13)

出土状況:本遺構からは5点、148.4gの遺物が出土した。土師器1点、1.4g、陶器1点、16.3g、磁器2点、57.6g、石製品1点、73.1gである。

時期

出土遺物のうち江戸時代の遺物が最も主体的であるため、本遺構は江戸時代に機能していたものと推定される。また、出土遺物のうち土師器はSD06からの流れ込みと推定される。

第7号土坑 - SK07

遺構 (第31図 図版6・7)

位置:E-1・2グリッド。重複関係:SD11を切る。平面形・規模:平面形は楕円形を呈する。長軸0.80m、短軸0.60m、深さ0.34mである。断面形はU字形である。主軸方位:N-50°-W。覆土:1箇所を観察した。3層に分層し、人為的な埋め戻しと思われる。

遺物

出土状況：本遺構からは陶磁器類など 13 点、47.3g の遺物が出土した。陶器 3 点、9.6 g、土器 6 点、10.0 g、金属製品 3 点、21.8 g、石製品 1 点、5.9 g である。

時期

出土遺物から江戸時代と考えられる。

第 10 号土坑－SK10

遺構（第 31 図 図版 7）

位置：C－1 グリッド。重複関係：なし。平面形・規模：平面形は北側が調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。長軸 0.57 m、短軸 0.30 m 以上、深さ 0.18 m である。断面形は U 字形である。主軸方位：不明。覆土：北壁面で観察した。2 層に分層し、人為的な埋め戻しであると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構から遺物は出土していない。

時期

覆土の様相及び北壁面の掘り込み位置から、江戸時代と推定される。

第 14 号土坑－SK14

遺構（第 31 図 図版 8）

位置：C－2・3 グリッド。重複関係：SD01 を切る。平面形・規模：平面形は不整円形を呈する。長軸 0.60 m、短軸 0.54 m、深さ 0.46 m である。断面形は逆台形である。主軸方位：不明。覆土：1 箇所を観察した。2 層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは土師器 2 点、5.2g が出土した。

時期

覆土の様相及び重複関係から江戸時代と考えられる。

第 16 号土坑－SK16

遺構（第 31 図 図版 8）

位置：D－3 グリッド。重複関係：なし。平面形・規模：平面形は不整円形を呈する。長軸 0.47 m、短軸 0.45 m、深さ 0.22 m である。断面形は逆台形である。主軸方位：不明。覆土：1 箇所を観察した。単層で、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは江戸在地系のかわらけ小皿 1 点、3.1g が出土した。

時期

出土遺物から、江戸時代と考えられる。

第 17 号土坑－SK17

遺構（第 31 図 図版 8）

位置：C・D－3 グリッド。重複関係：SD01 を切る。平面形・規模：平面形は不整円形を呈する。長軸 0.69 m、短軸 0.60 m、深さ 0.29 m である。断面形は逆台形

である。主軸方位：不明。覆土：1箇所を観察した。4層に分層し、人為的な埋め戻しであると考えられる。

遺物（第32図、第10表、図版13）

出土状況：本遺構からは12点、53.5gの遺物が出土した。土師器が7点、20.1g、須恵器1点、3.5g、瀬戸・美濃系の磁器1点、3.0g及び陶器1点、0.7g、銭貨（古寛永）1点2.1g、礫1点、24.1gが出土している。

時期

出土遺物から江戸時代と考えられる。

第20号土坑－SK20

遺構（第31図 図版9）

位置：C－3グリッド。重複関係：P38に切られる。平面形・規模：平面形は不整楕円形を呈する。長軸0.52m以上、短軸0.37m、深さ0.19mである。断面形は逆台形である。主軸方位：N－7°－W。覆土：1箇所を観察した。単層で、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構から遺物は出土していない。

時期

覆土から江戸時代と考えられる。

第21号土坑－SK21

遺構（第31図 図版9）

位置：C－3グリッド。重複関係：SK22を切る。平面形・規模：平面形はやや歪な円形を呈する。長軸0.77m、短軸0.76m、深さ0.13mである。断面形は皿状である。主軸方位：不明。覆土：1箇所を観察した。単層で、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構から遺物は出土していない。

時期

重複関係から江戸時代と推定される。

第22号土坑－SK22

遺構（第31図 図版9）

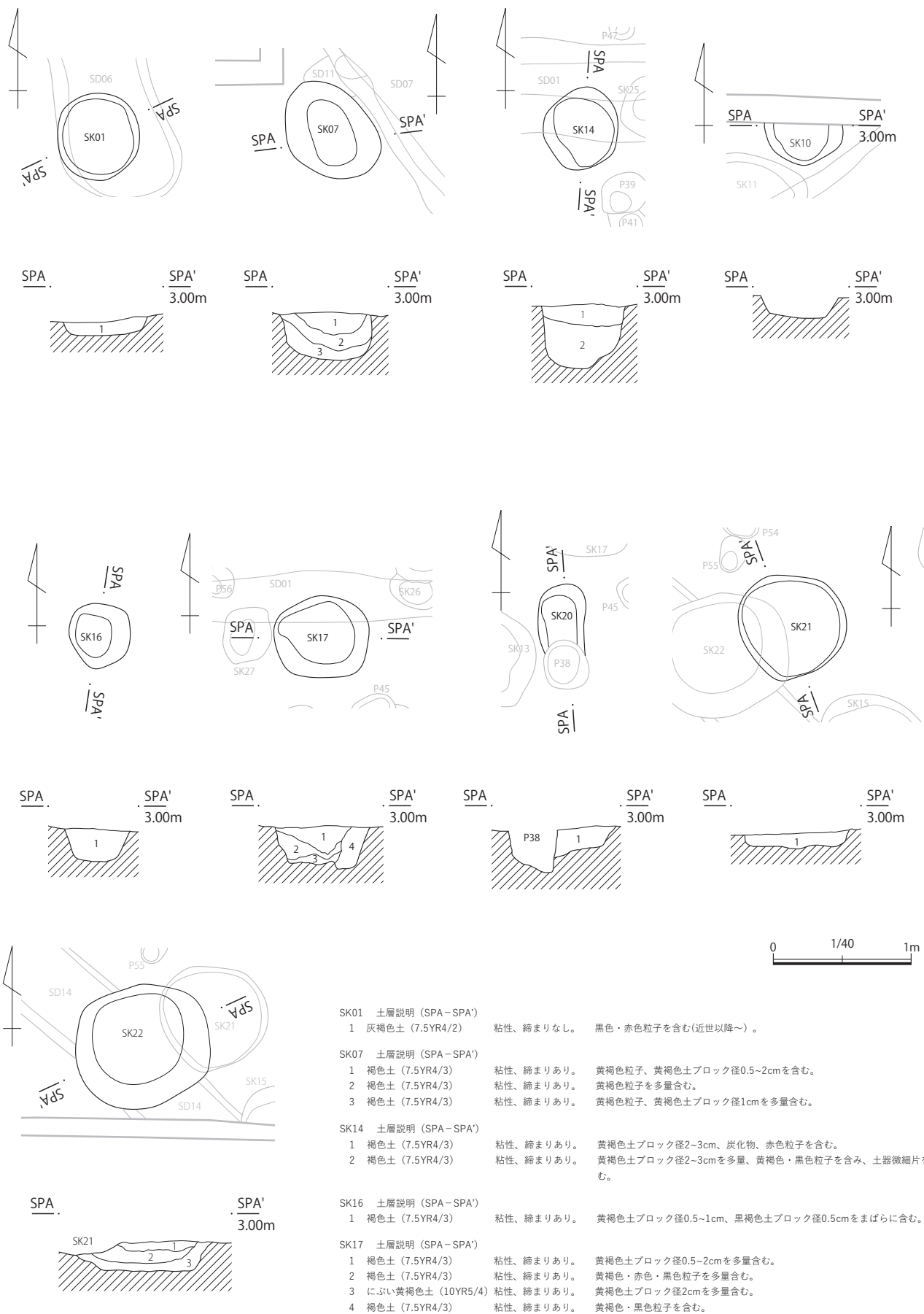
位置：C－3グリッド。重複関係：SD14を切り、SK21に切られる。平面形・規模：平面形はやや歪な円形を呈する。長軸1.02m、短軸0.91m、深さ0.25mである。断面形は逆台形状である。主軸方位：円形のため不明。覆土：1箇所を観察した。3層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは9点、68.5gの遺物が出土した。弥生土器1点、3.8g、土師器1点、5.6g、須恵器1点、4.4g、中世陶器1点3.5g、磁器1点、0.7g、陶器2点、11.1g、土器2点、39.4gである。

時期

出土遺物から江戸時代と考えられる。



第31図 第1・7・10・14・16・17・20・21・22号土坑実測図 (SK01・07・10・14・16・17・20・21・22)

SK20 土層説明 (SPA-SPA')

1 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性、締まりあり。黄褐色土ブロック径2~3cmを多量含む。

SK21 土層説明 (SPA-SPA')

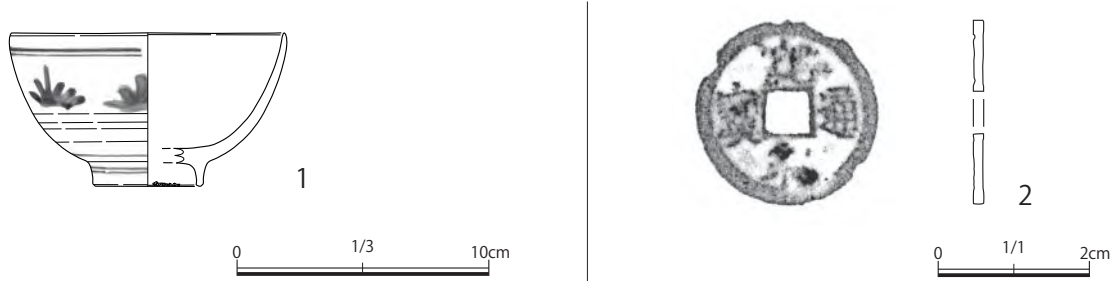
1 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性あり、締まりなし。黄褐色土ブロック径1cm、炭化物ブロック径1cmをまばらに含む。

SK22 土層説明 (SPA-SPA')

1 灰褐色土 (7.5YR5/2) 粘性あり、締まりなし。炭化物、黄褐色土ブロック径0.5cmを含む。

2 灰褐色土 (7.5YR5/2) 粘性あり、締まりなし。炭化物、黄褐色土ブロック径1~2cmを多量含む。

3 灰褐色土 (7.5YR5/2) 粘性あり、締まりなし。黄褐色粒子を含む。



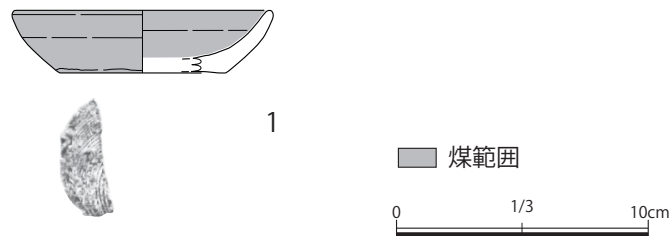
第 32 図 第 1・17 号土坑出土遺物実測図 (SK01・SK17)

第 10 表 第 1・17 号土坑出土遺物観察表 (SK01・17)

挿図番号 図版番号	遺構 番号	種別	部位	口径器高 底径 (mm)	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
32-1	SK01	磁器	口縁	* 108	54.1	ロクロ成形	緻密	良	白色	肥前系
13-1		中碗	底部	* 43						
32-2	SK17	金属製品	完形	高さ25	2.1	-	-	-	-	古寛永通宝
13-11		銭貨(銅)		幅25 厚さ1						

第 4 節 非掲載遺構出土遺物

本調査区では、60基のピットが検出された(第12表を参照)。列状に並ぶものや規格的に揃うものはなく、ほとんどは出土遺物を伴わないため、時期も不明なものが多い。また、覆土に関しても、ほとんどが単層である。それらの中で、第33号ピットから出土した土器のかわらけを1点図示した。



第 33 図 第 33 号ピット出土遺物実測図 (P33)

第 11 表 第 33 号ピット出土遺物観察表 (P33)

挿図番号 図版番号	遺構 番号	種別	部位	口径器高 底径 (mm)	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
33-1	P33	土器	口縁	* 101	25.7	ロクロ成形	1mm以下角閃石微量	良	黒色(5Y2/1)	口縁部から約1cm下に稜あり 内外面にタール状のスス附着
13-12		かわらけ	底部	* 65						

第12表 ピット計測表

(遺構重複関係については、>:本遺構が切る(新)、<:本遺構が切られる(旧)を示す)

遺構名	位置(グリッド)	平面形状	長軸長(m)	短軸長(m)	深さ(m)	遺構重複関係	備考
P01	B-2	円形	0.28	0.26	0.11		土師器
P02	B-2	円形	0.38	0.37	0.46		土師器、須恵器
P03	B-2	円形	0.23	0.20	0.11		土師器
P04	B-3	楕円形	0.36	0.32	0.13		
P05	A・B-2	円形	0.35	0.31	0.30	>SD04	土師器
P06	B-2	楕円形	(0.38)	0.31	0.12	>SD14	
P07	B-2	楕円形	0.23	(0.20)	0.55	<SD14	須恵器
P08	A-2	楕円形	0.42	0.29	0.16	<SD02	土師器
P09	A-1・2	円形	0.20	0.17	0.34		
P10	B-2	円形	0.19	0.18	0.18	<SD14	土師器
P11	B-2	円形	0.28	0.27	0.22	<SD14	
P12	C-2	楕円形	0.44	0.30	0.09		
P13	C-2	楕円形	0.32	(0.23)	0.16	<SK09	
P14	C-2	円形	0.18	0.18	0.10		
P15	C-2	円形	0.31	0.28	0.16		土師器、須恵器
P16	C-2	円形	0.21	0.21	0.35		
P17	C-1・2	楕円形	0.21	0.20	0.07		
P18	C-2	楕円形	0.48	0.38	0.18	>P19	陶器
P19	C-2	楕円形	(0.24)	(0.16)	0.23	<P18・P20	土師器、その他
P20	C-2	四角形	0.24	(0.24)	0.24	>P19	土師器、その他
P21	C・D-2	楕円形	0.32	0.28	0.18	<SK05	土師器
P22	D-2	楕円形	0.28	0.25	0.26	<SK05	
P23	E-1・2	楕円形	0.23	0.23	0.08		
P24	B-1	楕円形	0.24	0.24	0.39		
P25	D-2	楕円形	0.51	0.42	0.24		土師器
P26	C-2	楕円形	(0.14)	(0.13)	0.15	<SD14・P27	須恵器
P27	C-2	楕円形	0.34	(0.25)	0.41	>SD14	土師器
P28	D-2	円形	0.23	0.19	0.13		
P29	C-2	円形	0.24	0.23	0.09		
P30	C-2	楕円形	0.18	0.16	0.08		その他
P31	C-2	円形	0.26	0.22	0.16		
P32	C-2	円形	0.20	0.20	0.11		
P33	D-3	楕円形	0.33	0.30	0.25	>P34	土師器、その他
P34	D-3	楕円形	(0.34)	0.18	0.04	<P33	
P35	D-3	楕円形	0.29	0.24	0.08	>P36	土師器
P36	D-3	楕円形	0.35	0.31	0.12	<P35	その他
P37	C-3	楕円形	0.34	0.31	0.18	>SD01	
P38	C-3	楕円形	0.36	0.32	0.33	>SK20	
P39	C-3	楕円形	0.34	0.28	0.21	>P40・P41	
P40	C-3	楕円形	0.32	(0.22)	0.18	<P39・P41	土師器
P41	C-3	楕円形	(0.26)	(0.25)	0.16	>P41、<P39	土師器
P42	C-3	楕円形	0.25	0.24	0.13	>SD01	
P43	C-3	楕円形	0.17	0.16	0.24		須恵器
P44	C-3	円形	0.22	0.20	0.12		須恵器
P45	D-3	楕円形	0.30	0.25	0.16	>P46	
P46	D-3	楕円形	0.25	(0.16)	0.13	<P45	
P47	C-2	円形	0.18	0.18	0.10		
P48	D-3	楕円形	0.43	0.28	0.14		須恵器
P49	C-3	楕円形	0.31	(0.23)	0.26	<P50	土師器
P50	C-3	楕円形	0.29	0.19	0.10	>P49	土師器
P51	D-2	楕円形	0.34	0.25	0.07		
P52	C-3	楕円形	0.25	0.21	0.04	<P53	土師器
P53	C-3	四角形	0.18	(0.06)	0.10	>P52、<P54	土師器
P54	C-3	楕円形	0.25	0.24	0.13	>P53	
P55	C-3	楕円形	0.26	0.19	0.05		
P56	C-2・3	円形	0.23	0.22	0.49	<SD01	
P57	C-3	楕円形	0.32	(0.21)	0.25	<SD01	
P58	C-3	楕円形	(0.22)	0.19	0.24	<SD01	
P59	D・E-3	楕円形	0.24	0.21	0.09	>P60	
P60	D・E-3	楕円形	0.22	(0.20)	0.12	<P59	

第 13 表 遺物出土点数・重量一覧表

(本調査の弥生土器は土師器で、近世陶磁器、石製品、自然遺物等はその他で集計)
 (* SD03・05・06 は重複しており、帰属が不明な遺物に関しては一括取上とした)

遺構名	土師器		須恵器		中世陶器		その他		合計	
	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)
SD01	76	213.9	23	86.6	3	52.5	4	16.0	106	369.0
SD02	7	12.9	1	1.1	1	4.8	2	5.6	11	24.4
SD03	53	1,478.6							53	1,478.6
SD04	92	2,618.7	3	50.3			2	18.6	97	2,687.6
SD05	23	958.3					1	40.5	24	998.8
SD06	2	11.6							2	11.6
SD03・05・06	6	44.8							6	44.8
SD07	30	840.2							30	840.2
SD08	3	35.3							3	35.3
SD09	16	117.0							16	117.0
SD12	2	36.7							2	36.7
SD13	2	42.8							2	42.8
SD14	10	78.1							10	78.1
SK01	1	1.4					4	147.0	5	148.4
SK02	21	92.4	5	22.7	1	9.1	70	935.3	97	1,059.5
SK03	4	4.8	1	2.2					5	7.0
SK04	82	1,019.3					3	34.7	85	1,054.0
SK06	24	78.2	5	39.4			2	455.4	31	573.0
SK07							13	47.3	13	47.3
SK09	4	7.0	1	5.0			1	33.8	6	45.8
SK11	6	29.2	2	3.4					8	32.6
SK13	4	19.1							4	19.1
SK14	2	5.2							2	5.2
SK15	18	83.2	2	39.8			1	11.2	21	134.2
SK16							1	3.1	1	3.1
SK17	7	20.1	1	3.5			4	29.9	12	53.5
SK18	4	7.6			2	18.0			6	25.6
SK19	3	8.6	1	1.1					4	9.7
SK22	2	9.4	1	4.4	1	3.5	5	51.2	9	68.5
SK23	3	4.4							3	4.4
SK24	2	7.4			1	51.4			3	58.8
SK25	2	11.5							2	11.5
SK26	2	3.3							2	3.3
SK30	11	38.0	1	1.1					12	39.1
P01	2	9.3							2	9.3
P02	6	26.0	1	9.2					7	35.2
P03	1	7.9							1	7.9
P05	2	3.2							2	3.2
P07			2	15.9					2	15.9
P08	2	3.1							2	3.1
P10	1	11.6							1	11.6
P15	1	3.5	1	4.2					2	7.7
P18					1	1.6			1	1.6
P19	2	3.9					2	11.8	4	15.7
P20	3	4.4					1	24.2	4	28.6
P21	1	2.8							1	2.8
P25	1	25.0							1	25.0
P26			1	1.6					1	1.6
P27	1	4.5							1	4.5
P30							1	2.1	1	2.1
P33	4	3.8					2	27.5	6	31.3
P35	1	5.5							1	5.5
P36							1	2.1	1	2.1
P40	1	0.9							1	0.9
P41	2	8.0							2	8.0
P43			1	2.2					1	2.2
P44			1	0.9					1	0.9
P48			1	1.4					1	1.4
P49	1	4.2							1	4.2
P50	1	3.4							1	3.4
P52	1	1.1							1	1.1
P53	1	0.8							1	0.8
耕作土・ 遺物包含層	78	812.5	3	14.8			22	342.2	103	1,169.5
合計	637	8,884.4	58	310.8	10	140.9	142	2,239.5	847	11,575.6

第 4 章 自然科学分析

出土石帯（丸鞆）の石質について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

埼玉県戸田市上戸田二丁目 25 番 3、6 の一部に所在する前谷遺跡（第 10 次調査）より出土した石帯（丸鞆）の石質について、肉眼観察を行うとともに、非破壊での蛍光 X 線分析により、化学組成を調べ、石質の種類を明らかにした。以下にその結果を報告する。

1. 試料

試料は、前谷遺跡（第 10 次調査）より出土した石帯（丸鞆）1 点である。石帯は、平安時代から中世と推定される溝状遺構の SD01 より出土しており、長さ 21mm × 幅 21mm × 厚さ 8mm 程度の大きさで、灰白色～乳白色を呈し、やや透明感を有する。分析試料の外観は写真撮影を行い、写真 1 に示した。

2. 分析方法

(1) 肉眼観察

試料はルーペを用いて 10～20 倍で観察し、さらに実体顕微鏡を用いて 10～50 倍程度で観察を行なう。実体顕微鏡下で代表的な箇所については、写真撮影を行う。

(2) 蛍光 X 線分析

調査に用いた装置は、日本電子（株）製エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 (JSX-1000S) である。本装置は下面照射型の装置で、X 線管球は Rh を搭載する。測定条件は、管電圧：50kV、管電流：自動、測定時間：180 秒（live time）、コリメーター：9.0mm φ、真空雰囲気として、元素分析を実施する。

取得した特性 X 線スペクトルは元素定性を実施した後、成分形態を酸化物とした条件で FP 法（ファンダメンタルパラメーター法）を用いたスタンダードレス分析によって相対含有率（質量%）を求める。なお、算出された結果はあくまでも半定量的なものであることに留意されたい。

3. 結果

(1) 肉眼観察

試料は平板状を呈し、穿孔されている側は粗研磨、その裏側は鏡面研磨の仕上げがされている。鏡面研磨の面は、写真 1-2 の実体顕微鏡による拡大写真にみられるように、やや透明感のある灰白色を呈し、一部、褐色の水酸化鉄が脈状に分布している。試料の平板を垂直に切る破断面は、微細な凹凸を示す（写真 1-3）。構成鉱物の粒界は確認できないほど、細粒であることから、微細石英またはカルセドニーからなるとみられる。破断面は、局所的に微小な貝殻状断口が散見され、カルセドニーに一般に認められる性状を示す。

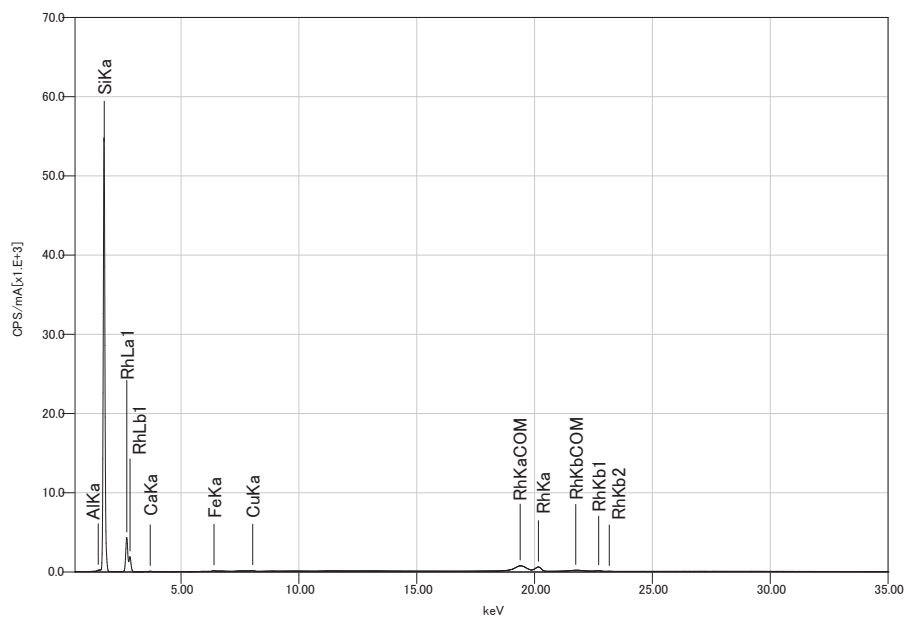
(2) 蛍光 X 線分析

蛍光 X 線スペクトルを第 34 図に、FP 定量結果を第 14 表に示す。分析から得られた化学組成は、SiO₂ が 99.7% と突出して高い値を示す。その他の成分としては、Al₂O₃ が 0.19%、CaO が 0.07%、Fe₂O₃ が 0.03%、CuO が 0.01% で検出される。

4. 考察

提供された石帯（丸靱）は、肉眼ではやや透明感のある灰白色～乳白色を呈しており、玉髓と鑑定される。実体顕微鏡観察では、構成粒子は微小で、粒界は確認できないが、微細石英 (SiO₂) 及びカルセドニー (SiO₂) からなるとみられる。蛍光 X 線分析から求められた化学組成は、SiO₂ が 99.7% と非常に高い値を示しており、玉髓を構成するシリカ鉱物の石英、カルセドニーの化学組成を反映していると理解される。

玉髓は、一般に岩石の孔隙を満たして球顆状、乳房状などをなして産するものや、層状チャートの一部を構成するものなどがあり、多様な地質に産出する。国内では、新第三紀の流紋岩、流紋岩質凝灰岩地帯に産することが多く、関東地域や周辺では、茨城県常陸大宮市の玉川流域や、新潟県三条市の五十嵐川流域、福島県に産するものなどが有名である。分析試料の産地を特定することは難しいが、比較的良質な玉髓とみられることから、玉髓の多産する地域のもので材料になっていると推測される。



第 34 図 蛍光 X 線スペクトル

第 14 表 FP 定量結果

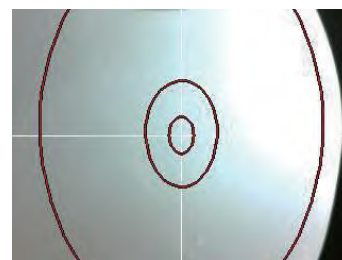
定量結果	原子番号	元素名	化学式	質量%	3σ	積分強度	Kレシオ	ライン	フィルタ
	13	Al	Al ₂ O ₃	0.19	0.017	4830	0.0008	K	ND
	14	Si	SiO ₂	99.70	0.147	5487302	0.4904	K	ND
	20	Ca	CaO	0.07	0.003	8451	0.0006	K	ND
	26	Fe	Fe ₂ O ₃	0.03	0.001	20917	0.0005	K	ND
	29	Cu	CuO	0.01	0.000	18933	0.0003	K	ND

写真1 試料及び実体顕微鏡写真



1. 分析試料 石帯（丸鞆）
※赤丸は蛍光X線分析の測定箇所

[測定画像]



[分析条件]

測定機器	JSX-1000S
管電圧	50 [KV]
管電流	0.065 [mA]
コリメーター	9.0 mm
分析時間	180 [sec]
一次フィルタ	ND
分析方法	FP法



2. 実体顕微鏡 研磨面

2mm



3. 実体顕微鏡 破断面

1mm

第5章 まとめ

第1節 第10次発掘調査の成果

前谷遺跡第10次調査では、弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構を主体とし、平安時代、中世、近世の遺構が重複して検出された。以下に、これまでの発掘調査の成果と比較・検討した上で、本調査地点の成果について考察する。

1. 弥生時代後期後半から古墳時代前期

本調査地点において、弥生時代後期後半から古墳時代前期に帰属すると考えられる遺構は、周溝状遺構と推定される溝状遺構8条、土坑7基が検出された。

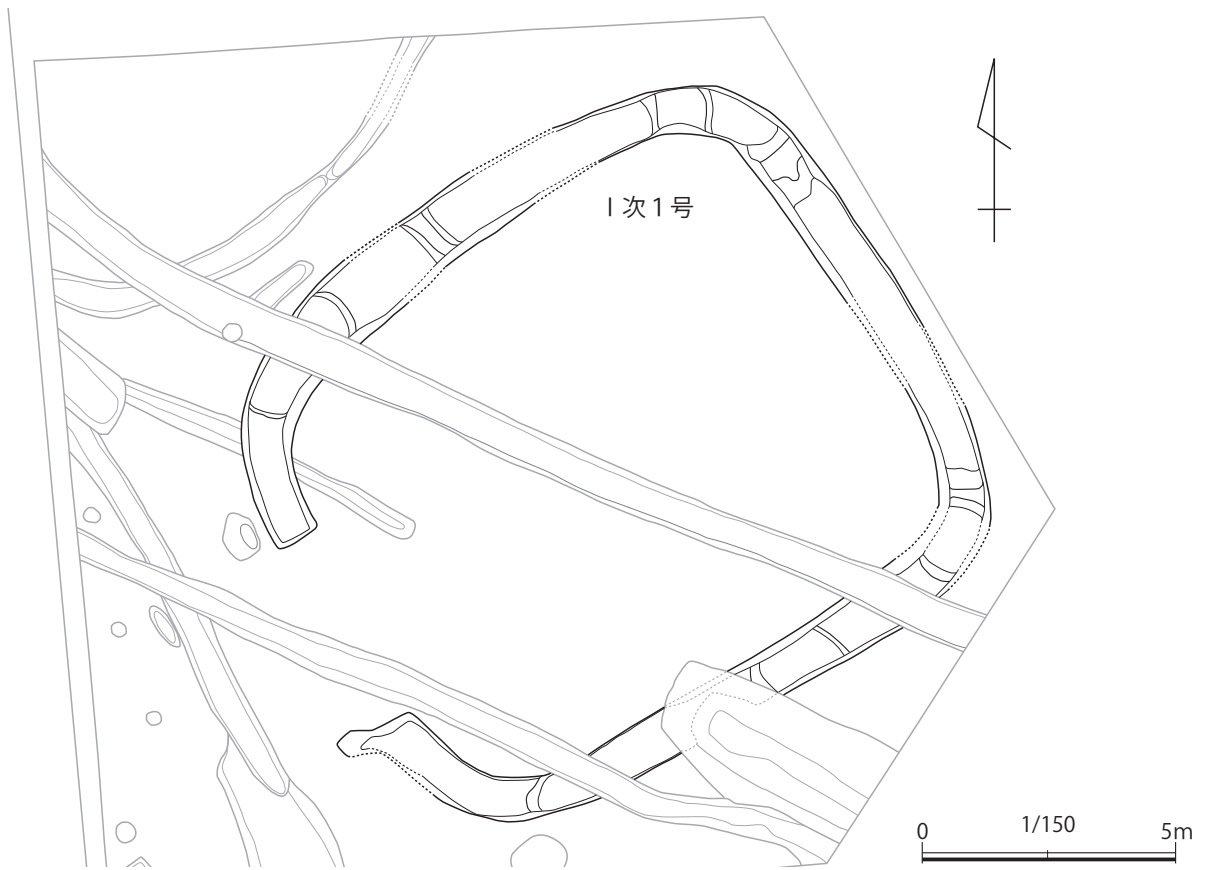
(1) 周溝状遺構

範囲が狭小のため、全様を確認できるものは1基もなかった。そのため、推測の域を出ない部分もあることを前提に考察していきたい。

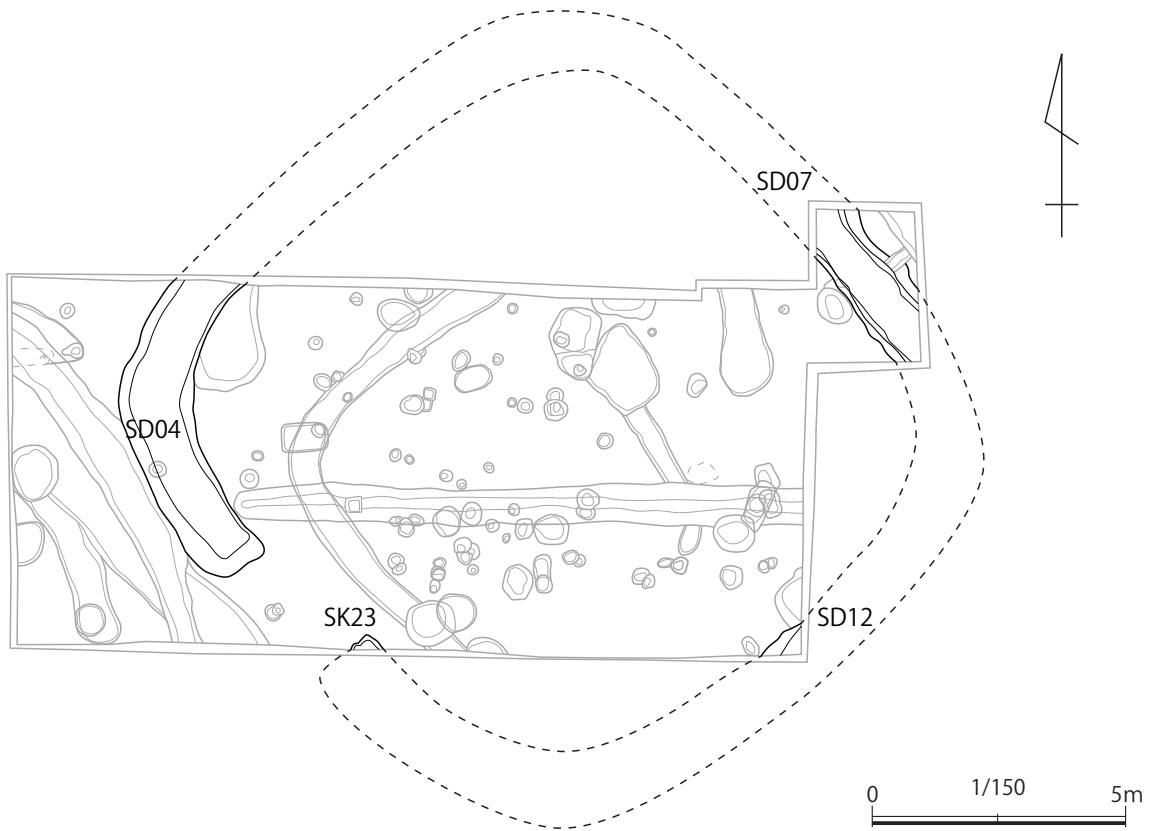
本遺跡のこれまでの調査で検出された周溝状遺構のうち、完全な平面形が確認できる第1次調査の第1号方形周溝墓（第35図）（以下、I次1号という）との比較を試みた結果、SD04はSD07と同一遺構の可能性が考えられる。I次1号の平面形を基にSD04とSD07を繋げると、ほぼ同形・同規模の周溝状遺構が復元でき、さらにSD12及びSK23も同一遺構である可能性が示唆される。SK23は周溝先端部にあたると考えられ、SD04・SD07と比較すると深さが浅いことや、遺物が出土していないことからやや疑念は残るが、あくまで仮説として述べておく。それぞれの遺構の規模や年代等の観点からみても違和感はみられない。こうして復元された周溝状遺構（SD04を主体とする周溝状遺構）は、南西に開口部を有する点でもI次1号と共通するため、両者には何らかの関連性があると推測される。その関連性を探るべく、それぞれの遺構の性格を考察していく。

周溝状遺構はこれまでに「方形周溝墓」として数多くの事例が報告・蓄積されてきたが、及川良彦氏（及川1998）や飯島義雄氏（飯島1998）によって建物の外部施設、いわば「住居」としての機能を有していた可能性が指摘された。それ以降、福田聖氏や長瀬出氏をはじめとした研究者らによって、既に報告された数多くの方形周溝墓の再検討が行われ、一定の成果があげられている。I次1号も福田氏（福田2014）によって再検討された方形周溝墓の一つである。

福田氏は方形周溝墓と周溝持建物（福田氏に倣い、周溝を伴う建物を「周溝持建物」と記す）の、それぞれにある程度の基準を定め、方形周溝墓については、「①方台部が直線的な辺を持つ。②平面形は全周、一隅切れ、四隅切れがある。③施設としての溝中土坑がある。④幅が1m以上、深さが50cmに満たないような広く浅いものは少ない。⑤壺の出土比率が高い。⑥出土土器の完形率が高い。⑦出土土器の出土位置がコーナーや陸橋部際、特定の周溝に偏る。⑧整然とした群構成をなす」の8点を認定する際の基準としている。また、周溝持建物については、「①周溝の辺の中央が切れる、またはそれに加えてコーナーの一つが切れる開口部を有する。②周溝内は13m前後、あるいは10m前後の規模をもつ。③遺構内から器種構成



第 35 図 第 1 次調査の第 1 号方形周溝墓



第 36 図 SD04 を主体とする周溝状遺構

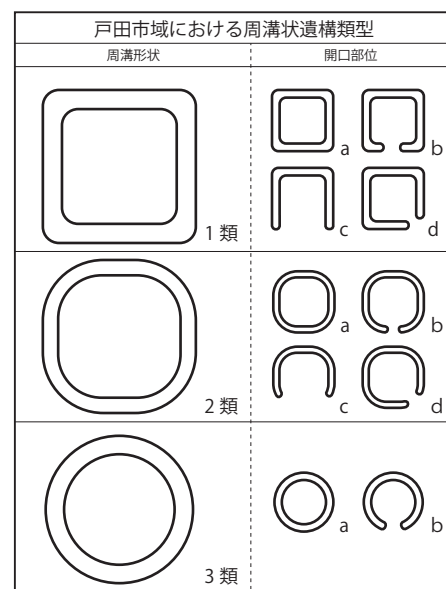
として壺に加えて甕が多く出土する。④周溝の幅と深さが相対的に狭く浅い」の4点を認定する際の基準としている。この基準に基づき、福田氏はI次1号の再検討を行い、平面形が不整形を呈し、一辺の中央が切れること（周溝持建物基準①）や、周溝区画内の規模が12.6 m（周溝持建物基準②）であること等から周溝持建物として認定している。

この基準に則り、SD04を主体とする周溝状遺構を考察していく（第36図）。I次1号と同様に、平面形は不整形で一辺の中央が切れる形状と推測され（周溝持建物基準①）、周溝内は約13.5 m（周溝持建物基準②）である。出土遺物の器種構成は、SD04において最も多いのが壺58点、1798.8 g、次いで甕27点407.6 gである。SD07においても同様で、最も多いのが壺16点、631.2 g、次いで甕12点、138.5 gである。SD12は甕1点27.4g、台付甕1点9.3gが出土し、SK23から遺物は出土していない。調査した範囲においては壺に加えて甕が多く出土しているといえる（周溝持建物基準③）。これらのことから、SD04を主体とする周溝状遺構も周溝持建物である可能性が高いように思われる。一方で、遺物の出土位置をみるとSD04においては開口部と東コーナー周辺に集中しているように見え、SD07においても遺物の出土位置は復元された周溝状遺構の西コーナーにあたと推測される。いずれも部分的な検出のため推測ではあるが、おおよそ開口部とコーナー周辺に遺物が集中している可能性は高いだろう（方形周溝墓基準⑦）。また、周溝の規模が幅1 m、深さ50cm以上（方形周溝墓基準④）であることも加味すると、方形周溝墓である可能性も否定できない。

先述のとおり、SD04を主体とする周溝状遺構とI次1号は規模・平面形が近似しており、開口部の方位も共通している。開口部の方位に関しては、岩井聖吾氏（岩井・坂上・山寄2013）による戸田市域における周溝状遺構の集成によると、最も多いのが南西で全体の約4割を占めている。さらに、南東が約3割、南が約1割と続き、南東から南西にかけておおよそ南向きに開口部を有するものが全体の約8割を占めている。岩井氏は、この傾向が戸田市域に限ったことではなく当該期の周溝に普遍的にみられる属性とし、「個々の周溝状遺構が「墓」であるか、「建物跡」であるかによって、その意味付けは大きく変わるが、日の出から南中を経て日の入りに至る太陽の日周運動に関係するものである可能性が考えられよう」と考察している。両者の関連性の有無はさておき、何らかの意図をもって南西に開口部を有する可能性は高いだろう。

その他、周溝状遺構と思われるSD03、SD05、SD06、SD08、SD10、SD14はいずれも確認範囲が狭小であるため、現段階では遺構性格や関連性等の考察には及ばない。

また、岩井氏による分類（第37図）に、今回の調査で検出された周溝状遺構を照らし合わせる。SD04を主体とする周溝状遺構は1類b種であると思われる。SD14は西コーナー部分が確認さ



第37図 戸田市域における周溝状遺構類型

れ、その平面形から1類に分類される。全体の形状や周溝先端部は不明のため、開口部位を特定することは困難である。それ以外の周溝状遺構は、これに関しても現段階では判断することができない。

(2) 土坑

土坑は、長軸規模が0.70 m前後のものが多くみられる。その中でもSK04は長軸1.56mを超える土坑で、弥生土器のミニチュアが完形で出土している。このミニチュアは器高8 cm程度と小さいながら、繊細な装飾が施されている点で注目に値する。また、底部から横転した状態で出土している点にも触れておきたい。方形周溝墓において、祭祀に用いられていた壺の役割の低下とともに登場した小型器種が、周溝下層から出土していることが立花実氏（立花1996）によって指摘されている。すなわち、SK04が周溝状遺構の一部だった場合、このミニチュアはSK04が方形周溝墓の一部であることを示す一つの根拠となりうる。

2. 平安時代から中世

本調査地点において、平安時代から中世に帰属すると考えられる遺構は溝状遺構6条、井戸跡1基、土坑11基が検出された。これまでの調査で、本遺跡地には当該期の集落があったと推定され、第2次及び第4次調査では瓦塔の一部が出土していることから集落内に仏堂施設が造営されていたと考えられている。

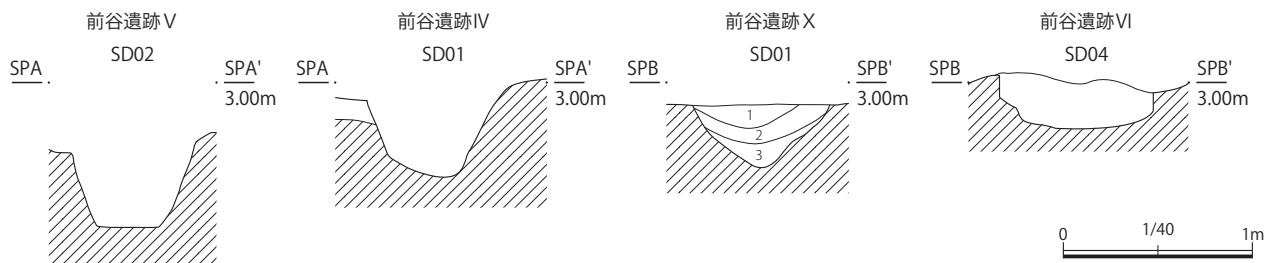
(1) 溝状遺構

SD01は東西方向に延びる直線状を呈している。本調査地点の周辺の調査成果（第38図）をみると、SD01と同様に東西方向に延びる溝が3条検出されている。第4地点のSD01、第5地点のSD02、第6地点のSD04である。また、第6地点においては、SD03が南北方向に延びている。現段階では接続は認められていないが、東西及び南北の軸を意識していることが窺える。『前谷遺跡VI』で吉田幸一氏（吉田2019）が考察しているように、これらは区画溝と考えられる。各当該遺構の推定時期にはやや差異が生じているものの、これらの溝は平安時代もしくは中世に帰属するものと思われる。

本調査地点のSD01からは、石製の丸軋、須恵器、中世陶器がある。丸軋は装飾具の一つであり、古代の官人が政務の際に着用する正装である束帯の一部として用いられた腰帯のうち、銚具（飾り具）が石製のものを石帯という。腰帯は中国の制にならい、官人の身分秩序を視覚化する役割を果たしていたとされる。

出土した丸軋は、田中広明氏の分類による無孔に分類される。無孔は垂孔が消滅した最終段階で、8世紀第Ⅲ四半期以降に出現し、10世紀第Ⅱ四半期に出土量のピークがみられる。表面は鏡面研磨が施され光沢を有するが、側面・裏面は研磨されているものの光沢はない。平尾政幸氏が「側面は表面と同等かそれ以下、裏面は側面と同等かそれ以下と、非常に単純な傾向が見いだせる」（平尾2000）と指摘するように、人の目に触れない部分ほど研磨の精度が低下する傾向にあることが窺われる。

平安時代初期、腰帯の素材に関する制限令が相次いで発令された。延暦15（796）年、新たな銭貨の鑄造を理由に銅製銚具に黒漆を塗った「烏油腰帯」の六位以下の



第 38 図 本調査地点の周辺の調査成果

着用が禁じられた（『日本後紀』延暦十五年十一月辛酉条）。ここで注目したいのが、この時点で既に存在していた黒色の石製銚具は禁止の対象にはならなかったことである。黒色の石帯が「烏油腰帯」の代替品として使用され始めたことを機に、銚具の材質が全面的に銅製から石製へと転換し、次第に多彩な色調を持つ石を使用した雑石腰帯が急激に増加していったと考えられている。雑石腰帯の増加を加速させた要因として、腰帯が国家から支給されるものではなく自ら準備するものであったことや、東西市で銅製腰帯が入手困難になる一方で雑石腰帯が入手しやすかったことが背景にあった。大同 2 年（807）には「雑石・中略・一切禁断者」という雑石の使用を禁止する記載がみられる（『日本後紀』弘仁元年九月丁未条）。これは上位者にのみ着用が限られていた翡翠や瑪瑙、紺玉等が用いられた玉帯との区別のためとされているが、この「雑石」に玉髓は含まれるのであろうか。玉髓と瑪瑙は構成粒子が共通しており、いずれも微細な石英及びモガナイトという水を含んだシリカ鉱物の粒子の集合体で、縞模様の発達しているものを瑪瑙、そうでないものを玉髓と区別している。出土した丸鞆に用いられている石材は、玉髓の生成過程で

瑪瑙まで変化していないものということが自然科学分析によって判明している。しかし、安易に瑪瑙よりも格下と判断することはできない。平尾氏が指摘しているように「石帯が使用されている時点では、おそらくその着用者にとって重要なのは鉱物学的な石種よりむしろその色合い」（平尾 2000）であると考えられるからである。五位以上の官人が身に着けていた腰帯には、白玉帯と金銀装腰帯がある。当時の白玉を特定することは難しいが、田中氏（田中 2003）は白玉帯と観察使の関連性を示唆した上で、地方の官衙等で大理石製や白蠟石製の白色を呈した石製銚具が出土していることや、観察使が地方へ度々出向していたことから、白玉が大理石や白蠟石といった白く輝く石材であったとしている。先述の平尾氏の指摘を受け、今回出土した丸軻の色合いをみると、白色を呈し、研磨された表面は光沢が強く、輝きがあると判断できるだろう。白玉帯は平安京をはじめ、多賀城跡（宮城県多賀城市）、大宰府跡（福岡県太宰府市）、武蔵国府跡（東京都府中市）といった官衙跡や、官衙に関連する遺跡から出土する傾向が窺える。しかし、注意すべき点は仮にこの丸軻が白玉であったとしても、本調査地に五位以上の官人が存在していた、すなわち官衙があったという根拠にはならない。なぜなら腰帯はあくまで着用者個人の身を表象するものであるため、遺跡全体の性格を表すものではないからである。

都から離れた地で五位以上の白玉帯が単独で出土する理由としては、石帯を身に着けた官人が儀式や執務にあたった地方官衙があった、地方で没した官人が石帯を身に着けたまま埋葬された、帯から外れた石銚を個人的に保有あるいは破棄した（田中 2018）などと考察されるほか、地方の竪穴建物跡から 1～2 点出土する場合には、石帯から石銚を外し集落の住人へ分配した（田中 2006）と考えられている。本調査では当該期の竪穴建物跡は検出されていないが、着用者以外の官位を持たない人が石銚を所持していた可能性も考えられることは留意すべきである。

（2）井戸跡

SK15 は素掘りのもので、時期は平安時代と推定される。本遺跡では当該期の井戸跡が計 14 基検出されており、第 2 次調査で中世 2 基、第 3 次調査で古墳時代から中・近世 5 基、第 5 次調査で平安時代 1 基、中世 1 基、第 6 次調査で平安時代 2 基、平安から中世 1 基、中世 1 基、第 8 次調査で平安時代 1 基である。

井戸が生活用水を得る施設であることを考えると、当該期の本遺跡周辺に人々が生活を営んでいたことを示す一つの根拠になりうる。

3. 成果と課題

今回の調査では弥生時代後期から近世にわたる多くの遺構・遺物を検出することができた。特に、細やかな装飾が施された弥生土器のミニチュアや、製作過程での転用と考えられる土師器の鉢など、類例が少ない遺物を検出できたことは大きな成果である。本遺跡全体を通して言えることだが、各調査範囲が狭小で遺構の全様を確認することができないため、性格や規模、帰属年代などが判断し難い状況にある。特に、周溝状遺構に関しては部分的な検出にとどまるケースがほとんどであり、判断に必要な要素を欠くのが現状である。引き続き発掘調査の成果を蓄積し、周辺の遺跡と照らし合わせながら、総合的に分析・研究する必要がある。（林ひかる）

第2節 総括

前谷遺跡第10次調査では、弥生時代後期から古墳時代前期の溝状遺構8条、土坑7基、平安時代から中世までの溝状遺構6条、井戸跡1基、土坑11基、近世の井戸跡1基、土坑9基を検出した。出土遺物は、弥生土器、古墳時代前期の土師器、平安時代の土師器、須恵器、石帯、陶磁器、近世土器、銭貨が出土し、弥生時代後期から近世までの変遷を明らかにすることができた。

弥生時代後期から古墳時代前期では溝状遺構8条を検出したのは大きな成果である。溝状遺構の内第4号溝状遺構、第14号溝状遺構は明確な屈曲があり、溝の先端が検出されているため周溝状遺構とみられる。調査地西側で行った第6次調査の調査区1南東側で検出された第2号周溝状遺構は北東から南西に伸び、それぞれ調査区外へ続くものの、本調査地点では延長線上に伸びる溝は確認できないことから屈曲しているとみられ、軸や規模などから第3号溝状遺構と同一遺構の可能性はある。

また、中世の区画溝とみられる第1号溝状遺構は、土地の区割りが行われた様相を示す遺構と考えられ、市内では中世以前のものには前谷遺跡でしか確認されておらず、重要なものである。

遺物としては、第4号土坑から出土したミニチュア土器は、壺型土器を精巧に模倣しており市内では類例がない。また第1号溝状遺構から出土した石帯は、市内で初めて確認されたもので、平安時代の遺構・遺物が少ない戸田市において、当該期の様相を知る上で貴重な成果である。

前谷遺跡の発掘調査は10次調査まで増え、各調査範囲は僅少であるが、遺跡の様相や各時期の集落状況について情報が蓄積され、隣接する遺跡との比較検討ができるようになってきている。

古墳時代前期までの集落では、近接する鍛冶谷・新田口遺跡や南原遺跡など同時期の遺跡と比較すると、竪穴建物が確認できないことが大きな特徴と言える。上記の遺跡と比べ調査面積が狭く、遺構を確認できていない可能性があるが、周溝状遺構は21基ほど確認されており、周溝状遺構を基本とする集落形態であるのは間違いない。

鍛冶谷・新田口遺跡では古墳時代の周溝状遺構からは器台・東海系高坏と一緒に弥生時代以来の伝統的文様壺が出土するが、竪穴建物からは伝統的文様壺の出土が少なく、器台・東海系高坏より後出する小型丸底埴が出土するため周溝状遺構と竪穴建物の関係は時期差とみられ、古墳時代前期中頃以降に集落の様相が変わるとみられている。

前谷遺跡では、現在のところ器台・東海系高坏がほとんど出土しておらず、また弥生時代後期のほぼ完形の壺型土器が出土していることを考えると、竪穴建物が確認できない要因は時期差によるものであり、弥生時代後期の集落形成後、古墳時代前期前半までに集落が廃絶し、鍛冶谷・新田口遺跡や南原遺跡に移った可能性が考えられる。

今後とも発掘調査による類例の増加や周辺遺跡との比較検討を通じて、前谷遺跡の集落の様相や生活形態などについて明らかにしていきたい。(今井源吾)

【註】

註1) 井戸跡(SE)と報告しているが、底面までの深度に関して断ち割り調査の未実施及び検土杖調査のみにとどまるため、遺構の種別、番号、略記号の変更を行わず、調査時点での遺構の種別、番号、略記号である「第2号土坑—SK02、第15号土坑—SK15」をそのまま使用した。

【引用・参考文献】

- 飯島義雄 1998「古墳時代における「周溝をもつ建物」の意義」『群馬県立歴史博物館紀要』第19号 pp.65-78
群馬県立歴史博物館
- 及川良彦 1998「関東地方の低地遺跡の再検討—弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡」を中心に—」『青山考古』第15号 pp.1-34 青山考古学会
- 高橋直樹・大木淳一 2015『石ころ博士入門』p.128 全国農村教育協会
- 立花実 1996「「方形周溝墓」出土の土器 南関東①神奈川県」『関東の方形周溝墓』山岸良二編 pp.179-208 同成社
- 田中広明 2003「腰帯の語る古代の官人社会」『地方の豪族と古代の官人—考古学が解く古代社会の権力構造—』pp.16-74 柏書房
- 田中広明 2006『国司の館—古代の地方官人たち—』学生社
- 田中広明 2018「東北地方北部出土の石帯とその背景」『尾駮の駒・牧の背景を探る』六ヶ所村「尾駮の牧」歴史研究会編 pp.43-62 六一書房
- 長瀬出 1999「方台部に建物址を伴う「周溝墓」について」『豊島馬場遺跡Ⅱ』北区埋蔵文化財調査報告第25集 pp.353-361 北区教育委員会
- 平尾政幸 2000「平安京の石製銚具とその生産」『研究紀要』第7号 pp.41-86 京都市埋蔵文化財研究所
- 福田聖 2000『方形周溝墓の再発見』ものが語る歴史3 同成社
- 福田聖 2014『低地遺跡からみた関東地方における古墳時代への変革』六一書房

(報告書)

- 塩野博・伊藤和彦 1978『前谷遺跡発掘調査概要』戸田市文化財調査報告XⅢ 戸田市教育委員会
- 岩井聖吾・坂上直嗣・山崎裕子 2013『南原遺跡XI』戸田市文化財調査報告XⅧ 戸田市教育委員会
- 岩井聖吾 2015『前谷遺跡IV』戸田市文化財調査報告XX 戸田市教育委員会
- 長澤有史 2018『前谷遺跡V』戸田市文化財調査報告XXⅦ 戸田市教育委員会
- 吉田幸一 2019『前谷遺跡VI』戸田市文化財調査報告XXⅧ 戸田市教育委員会
- 今井源吾・辻弘和 2020『前谷遺跡VII』戸田市文化財調査報告XXⅨ 戸田市教育委員会

写真図版



1 調査区全景（合成、東から）



1 SD01・04・05・14、SK04 完掘（北西から）



2 SD01 完掘（東から）



3 SD01 土層断面 A（西から）



4 SD01 土層断面 B（西から）



5 SD04 完掘（南から）



1 SD04 土層断面・遺物出土状況（北から）



2 SD04 遺物出土状況（東から）



3 SD03・04・05・06 完掘（南東から）



4 SD06 土層断面（北から）



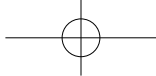
5 SD07 完掘（南東から）



6 SD07 土層断面（南東から）



7 SD07 遺物出土状況（西から）



1 SD08 土層断面 (南西から)

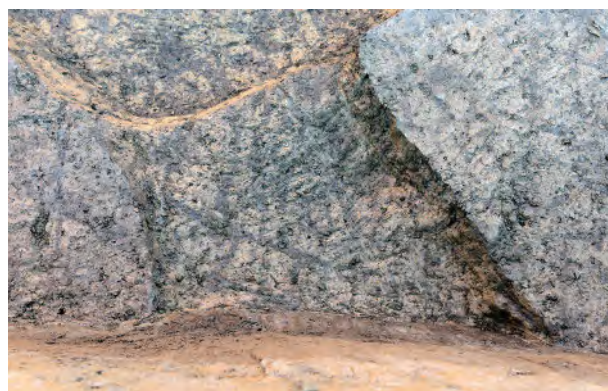


2 SD09 土層断面 (南から)

図版
4



3 SD10 土層断面 (北西から)



4 SD10 完掘 (2区調査時、南から)



5 SD08・SD11 完掘 (東から)



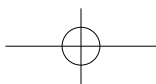
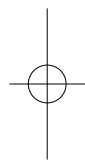
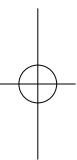
6 SD11 土層断面 (南西から)



7 SD12・13 完掘 (西から)



8 SD14 土層断面 (南から)





1 SD14 完掘 (東から)



2 SD14 土層断面 (南西から)



3 SK01 完掘 (北から)



4 SK01 土層断面 (北から)



5 SK02 完掘 (西から)



6 SK02 土層断面 (東から)



7 SK03 完掘 (南から)



8 SK03 土層断面 (北から)



1 SK04 完掘（北から）



2 SK04 土層断面（南から）



3 SK04 遺物出土状況（南から）



4 SK05 完掘（北から）



5 SK05 土層断面（西から）



6 SK06 土層断面（南から）



7 SK06 遺物出土状況（南東から）



8 SK07 完掘（東から）



1 SK07 土層断面 (南から)



2 SK09 完掘 (北から)



3 SK09 土層断面 (北から)



4 SK10 土層断面 (南から)



5 SK11 土層断面 (南から)



6 SK12 土層断面 (南から)



7 SK13 完掘 (西から)



8 SK13 土層断面 (西から)



1 SK14 完掘（西から）



2 SK15 土層断面（北から）



3 SK16 土層断面（西から）



4 SK17 完掘（南から）



5 SK17 土層断面（南から）



6 SK18 完掘（南から）



7 SK18 土層断面（南から）



8 SK19 土層断面（北から）



1 SK20・P38 土層断面（東から）



2 SK21 土層断面（東から）



3 SK22 完掘（北西から）



4 SK22 土層断面（北西から）



5 SK23 土層断面（北から）



6 SK24・SK28 完掘（南東から）



7 SK25 土層断面（西から）



8 SK26 土層断面（西から）



1 SK27 土層断面 (西から)



2 SK28 土層断面 (西から)



3 SK30 土層断面 (南から)



4 調査風景 (東から)



5 調査風景 (東から)



6 調査風景 (北から)



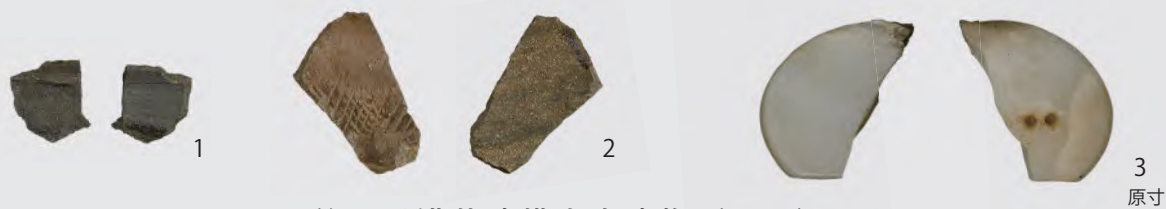
7 SD05 出土遺物 口縁部

(第15図-12、図版12-10)



8 SD05 出土遺物 内面

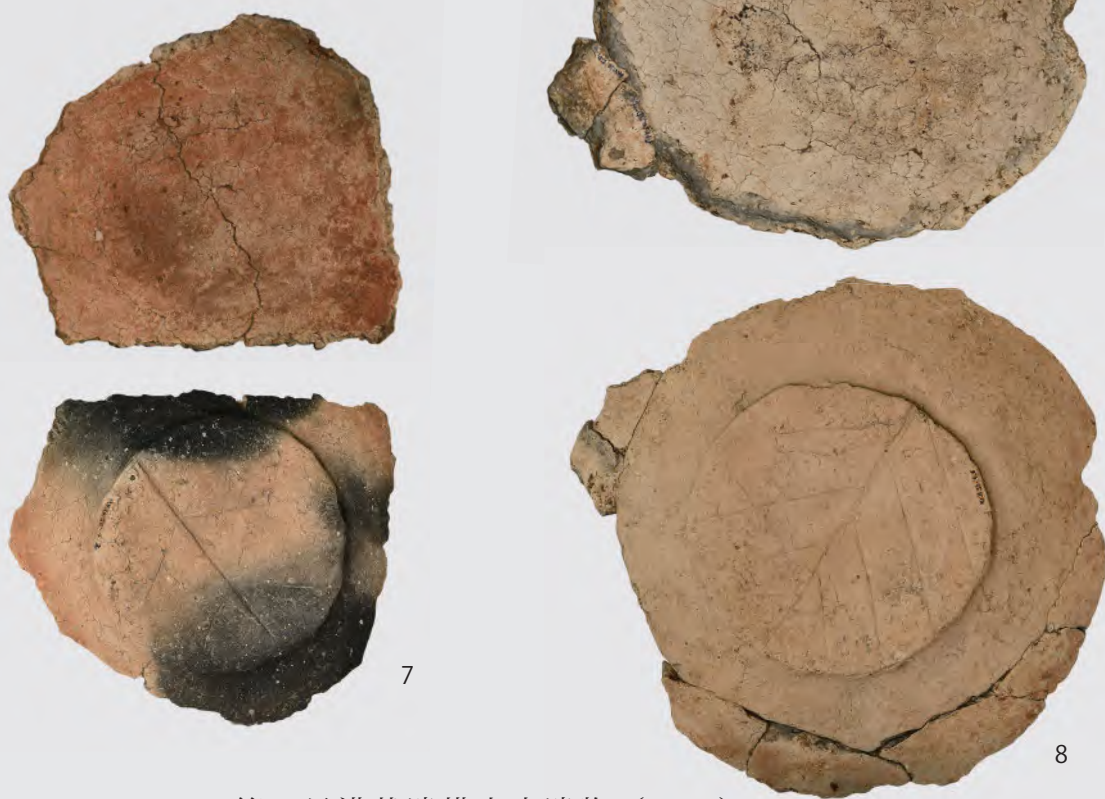
(第15図-12、図版12-10)



第 1 号溝状遺構出土遺物 (SD01)



第 3 号溝状遺構出土遺物 (SD03)



第 4 号溝状遺構出土遺物 (SD04)



第 4 号溝状遺構出土遺物 (SD04)



第 5 号溝状遺構出土遺物 (SD05)



第 9 号溝状遺構出土遺物 (SD09)



第 7 号溝状遺構出土遺物 (SD07)

第 13 号溝状遺構出土遺物 (SD13)



1

第 1 号土坑出土遺物 (SK01)



2

第 2 号土坑出土遺物 (SK02)



3



4

S=1/2



5



6



7



8

第 4 号土坑出土遺物 (SK04)



10

第 15 号土坑出土遺物 (SK15)



9

第 6 号土坑出土遺物 (SK06)



11
原寸

第 17 号土坑出土遺物 (SK17)



12

第 33 号ピット出土遺物 (P33)

報告書抄録

ふりがな	まえやいせきじゅう まいぞうぶんかざいはつくつちょうさほうこくしよ							
書名	前谷遺跡X 埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名	戸田市文化財調査報告							
シリーズ番号	33							
編著者名	今井源吾 林ひかる パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	戸田市教育委員会							
所在地	〒335-8588 埼玉県戸田市上戸田1-18-1 TEL048(441)1800							
発行年月日	令和3(2021)年 8月 31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所収地	市町村	遺跡番号					
まえや いせき 前谷遺跡 だいじゅうじちようさ 第10次調査	かみとだ にちようめ 戸田市上戸田二丁目 ばん いちぶ 25番3、6の一部	11224	06- 003、 004、005	35° 48' 46"	139° 40' 49"	2021.1.12 ～ 2021.2.12	126.91	店舗・ 共同住 宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
前谷遺跡	集落跡	弥生時代 後期後半 ～ 古墳時代 前期	溝状遺構 土坑 8条 7基	弥生土器、土師器		<ul style="list-style-type: none"> 第1次調査の周溝状遺構と同形・同規模と推定される周溝状遺構を検出。その他周溝状遺構と推定される遺構を2基検出。 弥生土器のミニチュアが完形で出土 		
		平安時代 ～中世	溝状遺構 井戸跡 土坑 6条 1基 11基	土師器、須恵器、中世陶器、石帯(丸軋)		<ul style="list-style-type: none"> 東西に延びる区画溝1条を検出 玉髓製の石帯(丸軋)が出土 		
		近世	井戸跡 土坑 1基 9基	陶磁器、土器				
		不明	ピット 60基	土師器、須恵器				
要約	<p>本調査地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地である前谷遺跡の範囲に属し、JR埼京線戸田公園駅から北東に約600mの戸田市上戸田二丁目25番3、6の一部に所在する。</p> <p>前谷遺跡は、利根川等の河川により形成された平坦な沖積地(荒川低地)に氾濫や流路変更によって左岸に発達した微高地上に立地している。</p> <p>調査の結果、弥生時代後期後半から古墳時代前期では周溝状遺構と推定される溝状遺構8条、土坑7基、平安時代から中世では溝状遺構6条、井戸跡1基、土坑11基、近世では井戸跡1基、土坑9基を検出した。その他、時期不明のピット60基を検出した。</p> <p>出土遺物は、弥生時代後期後半から古墳時代前期では弥生土器、弥生土器のミニチュア、土師器、平安時代から中世では東金子・南比企産の須恵器、中世陶器、石帯(丸軋)、近世では瀬戸・美濃系陶磁器、肥前系陶磁器、江戸在地系のかわらけ小皿や焙烙、銭貨の寛永通宝等が出土した。</p>							

戸田市文化財調査報告 33

前 谷 遺 跡 X
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

発行・編集 埼玉県戸田市教育委員会
〒335-8588 埼玉県戸田市上戸田 1-18-1
TEL 048(441)1800
印刷 能登印刷株式会社 東京営業所
〒101-0024 東京都千代田区神田和泉町 1-7-1
発行日 令和3年8月31日